

2008 年度 渥美国際交流奨学財団年報

目 次

◇理事長のことば 「アジアとの交流」	渥美伊都子 ……	2
◇交流事業・思い出		
・ 現場見学会	……	3
・ 軽井沢旅行	……	5
・ 渥美奨学生の集い 講演：八城政基評議員 「グローバル金融危機はなぜ起きたのか」	……	8
・ 新年会	……	10
・ 研究報告会	……	11
◇ 2008 年度渥美奨学生のエッセイ	……	14
◇ 2009 年度渥美奨学生の自己紹介	……	29
◇ 2008 年度海外学会派遣プログラム参加報告	……	43
◇ AISF ネットワーク		
・ ラクーン会	……	56
・ 日韓アジア未来フォーラム	……	64
・ SGRA チャイナ・フォーラム	……	66
・ 関口グローバル研究会 (SGRA)	……	69
■ 渥美奨学生 2008 年度著作・発表論文・特許リスト	……	71
□ 付録	……	83
・ 設立の趣旨について		
・ 2008 年度収支決算、貸借対照表		
・ 財団人名簿		
・ 奨学生名簿		
・ 2010 年度渥美奨学生募集概要		

「アジアとの交流」

渥美伊都子



渥美国際交流奨学財団は本年設立 15 周年を迎えます。第一期生 11 名の奨学生から始めたこの事業も今年で総数 179 名となり、ネットワークの輪も 33 ケ国に広がって大輪となりつつありますこと、大変嬉しく思っています。

世界中に散らばったこの優秀な研究者たちをネットで結び、関口グローバル研究会(セグラ)を立ち上げてから早 10 年となります。この活動は、毎年国内で 4 回、海外で 2~3 回のフォーラムを開き、それをレポートにまとめたり、メルマガでエッセイを配信したりして、日本へ留学した方々の声を広く社会に発信しています。

私のアジアの国との交流は、財団を設立する前から続いています。主人が鹿島建設の社長の頃、アジア西太平洋建設業協会国際連盟(IFAWPCA)の会長も引受けており、アジアの加盟国が持ち回りで一年半に一度開催される総会に出席しておりました。そして、その国々の史跡や自慢の民族芸能を見せて頂いて、国情や歴史を知ることができました。会員の皆様とはその都度お会いすることによって心の温かさを感じ、楽しい思い出として残っています。今から 20 年~30 年前のことです。

もうひとつ、私が 30 年以上続けているアジアの友好親善のための婦人会があります。

第二次世界大戦後、科学の進歩と技術改革による経済発展の時代に、三木武夫元総理夫人の三木睦子氏が、当時欧米志向であった各界のご婦人たちに声をかけ、「日本はアジアに位置する以上、アジアの人々と仲良くなければ、これからのアジアの平和は無く、発展も繁栄も無い。そのためにはお互いに文化や歴史を学びながら同じ故郷を持つという連帯感から手を取り合って心の交流を続けよう」とアジア婦人友好会を立ち上げられました。発起人にはアジアに駐在された元大使夫人や政財界の夫人たちで構成され、設立総会は 1968 年 11 月にアジア

会館で開かれました。会員にはアジアの国々の大使夫人や在日アジアの方々やアジアに関心のある日本婦人たちです。鹿島の母も三木様からのお誘いで発起人を引き受けております。

当初はお互いの国を知るために、各国大使館にお招き頂いて民族舞踊や音楽を鑑賞し、お国自慢のお料理を戴きながら語らい、又お正月には日本の伝統芸能を披露して外国の方たちに知って頂くという異文化交流に力を入れておりました。

そのうち緊急災害支援基金を作るためのバザーがアジア各国大使のご協力と会員の皆さま方のご努力により年々盛大になり、現在は「アジアの祭典」としてアジア婦人友好会の最大の行事となりました。入場券とラッフル券を売ったり、その賞品を集めたり、各国特有の珍しい民芸品やお料理を揃えたり、半年にわたる準備を経て当日は 4 千人もの来場者を迎えるほどの盛況振りで、無事終了した時にはほっとすると同時にアジアの人々が協力してひとつの大きな事業を成し遂げたという達成感と喜びを感じます。

その純益金は緊急災害支援金の他、参加 24 ケ国に均等に配分して各国の大使夫人より自国の学校、病院及び福祉施設に寄付することになっています。そして、この寄付先の病院や福祉施設を見学するため毎年親善旅行をしています。すでに 10 ケ国ほど訪ねましたが、どこへ行っても大歓迎です。数年前にカンボジアへ行きましたが、アンコールワットの遺跡を見学し、王宮に招かれてシアヌーク殿下同妃殿下にもお目にかかりました。しかしながら、地雷で傷ついた子供たちを見かけたり、「歩く時には脇道に入ると危険です」と注意されたり、まだまだ内戦による傷みが残りが痛みました。

これらの活動を通してアジア及び世界の人々と交流を図り、世界平和と人類の幸福に貢献することが出来れば幸いと思っています。

交流事業・思い出

現場見学会

2008 年度奨学生、東京国際空港 D 滑走路建設外工事を見学

2008 年 7 月 2 日（水）、7 月の例会とあわせて、財団の役員と 2008 年度渥美奨学生一同が羽田空港の滑走路拡張工事現場を見学した。工事の正式名称は「東京国際空港 D 滑走路建設外工事」と呼ばれるようである。理事長を始め、今西常務理事ら財団から 4 人、留学生 10 人が参加した。東京テレポート駅での集合は少し時間かかり、予定より 20 分遅れて羽田総合事務所に到着した。事務所に到着してから、早速阿部洋管理部長から工事に関する説明会が開かれた。

羽田空港は、日本国内航空旅客の 60% が利用する空港で、航空需要の増大により能力は限界に達している。現在 A,B,C 三つの滑走路があり、建設中の D 滑走路は 4 番目の滑走路となる。D 滑走路の完成によって羽田空港の発着能力は現在の約 30 万回から 40 万回に増強される。D 滑走路の建設は沖合における栈橋と埋立てからなる工事で、鹿島建設を筆頭に 15 社が建設に関わっている。2010 年までに完成する予定で、総工事費は 5700 億円に上ると

いう。環境へ十分配慮した設計で、多摩川の流れをせき止めないように、滑走路の 3 分の 1 が栈橋になっている。最初から栈橋と埋立てを混合した滑走路としては世界で初めてという。

説明を受けてから、ヘルメット、ライフジャケット、軍手を着用し、船に乗って工事現場に向かった。天気にもめぐまれ、長い間研究室に閉じ込められていた留



学生の皆さんは大興奮した。皆、船の屋上に登って風に吹かれ開放感を楽しんだ。1人がヘルメットを海に落す小さな事件があったが、みんな無事だった。工事は急ピッチで進んでおり、栈橋部分の工事はかなり進捗していて、埋立て用の土を山積みした船も見えた。約1時間かけて工事現場を回り、事務所に戻ってきた。

戻ってから質問の時間が設けられ、私はあえて最初に挙手して質問した。多摩川の流れをせき止めないために工夫した設計によって、工事コストがどれぐらい上昇したかを知りたかった。担当者によると、この設計は単なる事業者と建設業者からの配慮だけではなく、法律による詳細な基準にしたがったものであるという。日本の環境関連法律は充実していることを実感した。はっきりした答えはなかったけど、コストのことはどうしても気になってならないので、帰ってから自分で計算してみた。計算は以下の通りである。

埋立て部分の長さは全体の約3分の2、栈橋部分の長さは約3分の1。コストは半々。 $5700 \div 2 = 2850$ だから、埋立てと栈橋それぞれ約2850億円かかる。全部栈橋にした場合： $2850 \times 3 = 8550$ 億円。全部埋立てにした場合： $2850 \div 2 \times 3 = 4275$ 億円かかる。したがって、多摩川の流れを妨げないように工夫して $5700 - 4275 = 1425$ 億円を投入していることになる。莫大な金額である。それに比べて、環境への関心が世界的に高まっている今日でも乱開発によって環境が破壊されている国がたくさんあるのは残念なことである。

そのほかにも、杭やジャケットの耐久性などに関する質問があり、工事担当の坂本好謙工事長が丁寧に答えてくださった。今回の見学会の段取りをすべて用意してくださった、鹿島建設の皆さんに感謝したい。

見学が終了してから、みなでお台場を散策し、一緒に食事をした。美味しいビールを楽しみながら、いろんな話題に花を咲かせた。参加の皆様お疲れ様でした。

(文責：ネメフジャルガル)



軽井沢旅行

2008 年度軽井沢の饗宴

1. 前菜：親知らずの痛みと妻の裏切り添え

初めての新幹線に乗って、初めての東京駅の駅弁の蓋を開けた。

その瞬間、一人の顔が浮かんで、ピンク色の焼鮭に向かう私の熱い目線が遮られた。

歯医者顔だった。白い帽子に白いマスク。それに、「歯を抜いた 2 時間以内食事禁止」といういかにも憎らしい声が耳に響く。

ご馳走を目の前にして楽しめない。この世でこれ以上の苦痛があるのか。私は心の中で叫んだ。

私の呐喊が聞こえたかのように、隣に座っている妻が行動で答えてくれた。彼女は艶やかな笑みを浮かべながら、鮭を巧みに取っていった。

私は悟った。この世で最も苦痛なことは妻の裏切りだ。

2. スープ：日本とロシアの国交ころころスープ

そんな調子で軽井沢駅に到着。昨年、長野まで新幹線を利用した朴先輩の二の舞を演じるのはご免だ。

笑い声に包まれた研修センターに入ってもまもなく、自己紹介の番が回ってきた。会場の雰囲気は壊したくない。だが、妻に復讐したい。二つの狙いが争った結果、みんなの前で妻が悪妻に仕掛けられた。翌日、同期生の前に現れると、「奥さんは肉が好きだね」と何度もいわれた。

花火タイムが過ぎて、スラヴァさんのミニセミナーが始まった。日露戦争後から第一次世界大戦までの日露関係に関するお話だった。

10 年近くの短い期間の中で、日露両国は 3 回ほどの友好協定を結んだそう。両国の友情の固さというより、むしろその脆さが私には見えた。国々が利益のために安易に友情を結んだり、また利益のために平気で友情を踏み躪ったりする時代だなと思った。

初日は深夜まで流れ続けた熱い歌声の中で幕が下りた。夢の中で、私も王さんのような熱い男になった。

3. メインディッシュ：オリンピックと東アジアの平和繁栄の煮込みと東南アジアのピリ辛ソース

第 32 回 SGRA フォーラムは午後 2 時から始まった。今回の宴のメインだ。オリンピックの誕生、変遷と展望をめぐって 4 名の学者が発表を行った。

多くの参加者は初めてオリンピックの意義について真剣に考えさせられただろう。開催国の国民の一人として、私も思いに沈んだ。

やがて、高らかな声に私の瞑想は破られた。シンガポール出身のシム先輩だった。東南アジアの出席者を代表して、日・中・韓を中心とする討論のムードに抗議を申し出たのだ。

天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり。教育を受ける権利に限ってはそうかもしれない。しかし、世界の国々は生まれながら不平等だ。地理的な面など、オリンピック開催の客観的条件すらない国は多

く存在するのではないか・・・シム先輩の思いと一致しないだろうが、私はそう思った。

個人的には、プリントの上にかかれた円谷幸吉選手の遺書に感動した。人間本来の感情を掻き立てるのは意外とシンプルなものだと思った。

二日目の夜、右手の腕相撲ゲームで左利きの王さんに敗れた。

4. デザート：理想郷マンデー

シム先輩のおかげで、川崎さんとわれわれ中・韓の 2008 年度奨学生は無事に理事長の別荘に着いた。東南アジア勢はさっそく活躍したようだ。

理事長の別荘の規模は私の想像を遥かに超えた。3LDK マンションの夢が恥ずかしくなった。

バーベキューの時間だ。

日本の赤飯やおでん、韓国のキムチ、ベトナムの春巻き、トルコの豆サラダ、中国の炒め物が揃う食卓は初めてだ。料理の種類以上に多かったのは参加者の国籍だ。この経験もまた初めてなのだ。バーベキュー会場はバベルの塔が建造される以前の理想郷になった。

食事の際に、修さんが私に言った言葉は印象的だった。「歯はもう大丈夫みたいだね。」

東京駅に着いたのは夕方だった。新幹線の出口はまるで蒸籠の入り口に変わった。熱気に包まれ、人込みに紛れ込んだ私は、軽井沢の森、川、虫、夜が急に恋しくなった。

(文責：宋剛)



□ 花火&スイカ割り



□ SGRA フォーラム「オリンピックと東アジアの平和繁栄」



□ BBQ



渥美奨学生の集い

2008年度の「渥美奨学生の集い」は、11月4日（火）午後6時より、渥美財団ホールで開催された。渥美財団の評議員で、新生銀行会長の八城政基さんから、今、まさに私たちが経験している100年に一度の金融危機について、現場からのお話を聞かせていただいた。

特に、現在のアメリカ発の金融危機と1990年に日本を襲った金融危機との比較は、とても興味深かった。八城さんは、アメリカ発と日本発の金融危機の共通点は不動産バブルが弾けたあとから発生した点であると指摘された。1980年代後半における日本のバブル経済の引き金は、1985年のプラザ合意の円高による日本経済の減速を防ぐためにとった融資緩和政策にあるといわれている。お金が溢れていたことが、非合理的な不動産投資を招いて不動産の物価が高騰した。結局、バブルが弾けて、貸し出しを積極的に行った日本の銀行は膨大な不良債権を抱えてしまった。ア



メリカ発のサブプライム問題も同様に、アメリカの銀行が米国内の不動産バブルに乗って、マイホームというアメリカンドリームに膨大な貸し出しをしたが、結局、ウナギ登りの米国不動産価格が暴落し、アメリカの銀行部門は不良債権問題に悩まされている。そうして、日本発の金融危機と同様、銀行部門が余儀なく貸し渋り（CREDIT CRUNCH）を実施した。

米国発の金融危機の原因として、アメリカ当局が金融に対する統制をきちんとできなかったという点が取り上げられた。その結果、金融部門が高い利益を求めるために、高すぎるリスクを冒してしまった。リスクが高いということは、投資先が予想した高い利益を生み出す可能性があるが、その分その確率は低くなることを意味する。それに、米国発の金融危機では金融投資のハイテク化によりその仕組みが複雑になっていて、リスクを正確に把握することが難しくなっていた。

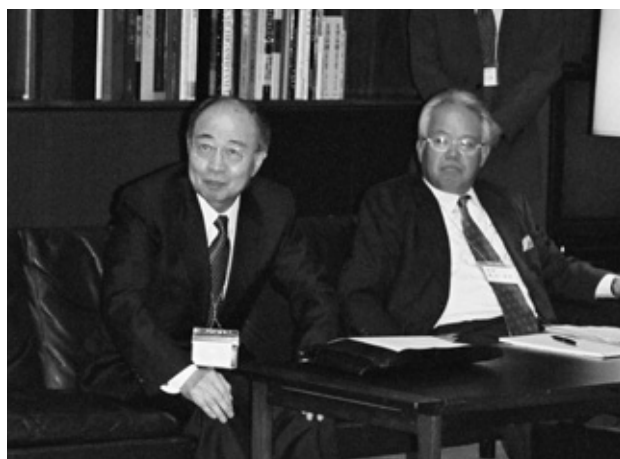
会場からの「そのような投資に日本の金融部門は、アメリカほど乗らなかったではないか」という指摘に対して、八城さんは投資銀行の行き過ぎた投資方法を批判しながらも、「日本の金融部門が万全かというと、必ずしもそうではない」と示唆された。

米国発の金融危機が日本と違う点については、少なくとも2点を取り上げた。日本発の危機は比較的限定的であり、殆ど日本に留まっていた。一方、米国発の危機は、今、世界にすごい勢いで感染している。これは、1980年

代から2000年代までの金融のグローバル化の進展を物語っている。サブプライムの貸し出しは、あらゆる投資サービスの中に入り込み、世界中へ販売されていた。もう一つ異なる点は、日本発の金融危機のほうでは政府や銀行の対応が遅かった。膨大な不良債権を抱えている銀行に対する公的資金の注入や銀行の不良債権処理がなかなか進まなかったということだ。

会場からの質問に対しても、八城さんは丁寧に答えてくださった。明石康さんは、「現在のグローバルな金融システムに対してどう思われるか」と質問された。どちらかというと八城さんは、システムがあらゆる問題を解決するというのに、依然として楽観的でいらっしゃると思われた。

(文責：F. マキト)



2009 新年会

2009 年 1 月 10 日（土）12 時から 4 時半まで、渥美国際交流奨学財団の新年会が開催され、1995 年から 2008 年までの奨学生とラクーン会員及び家族 60 人余りが、同財団ホールに集まりました。

今年も参加者は皆、おせち料理や焼き鳥など美味しい料理を食べましたが、一番人気のあったのが、王剣宏リーダーの指導の下で、奨学生が皆一緒に皮から手作りした中国風の水餃子のようなものでした。餃子プロジェクトチームの中には、初対面の人もありましたが、一緒に楽しく餃子の皮を作ったり、包んだりしているうちに、すぐに旧知の仲のようになりました。食事中に始まったお餅作りも興味深く、子供たちも楽しそうに参加しました。

食事の後、特別なプログラムが用意されていました。それは、2000 年度奨学生の金政武さんのお子様の金峰世ちゃんのピアノの演奏と、中国で何年もバンドをやったことのある王偉さんがギターを弾きながら歌った日本語と中国語の歌です。長渕剛と小虎隊の歌は本当に迫力がありました。お二人の演奏に、皆が魅了されました。

この後、参加者全員一人 30 秒の自己紹介をしました。皆自分のお正月の過ごし方や、論文の進行状況についての話をしていました。次に、恒例のビンゴゲームの前に、全員で理事長の 81 歳のお誕生日を祝いました。そしてお祝いのシャンパンとともに、英語、韓国語、北京語、上海語、台湾語、モンゴル語、ロシア語、ドイツ語、スリランカ語、ブルガリア語、カンボジア語、ミャンマー語、スイス語、エストニア語、インドネシア語で誕生日のお祝いの歌を歌いながら、みんなのお母さんである理事長のご健勝とさらなるご活躍を心からお祈りしました。

今年のビンゴゲームは、2006 年度奨学生のナリンさんとシムさんが担当しました。参加者全員熱心にビンゴをやっている楽しい姿が印象深いです。皆ゲームをやりながら新しい一年によいことがたくさん来るよう願っていました。

皆いっぱい集まってきて、もう「国連」みたいな存在です（シムさんの言葉）。毎年の財団の新年会に参加し、皆と会って話をするのがラクーン全員の楽しみだと思います。

（文責：劉健）



2008 年度研究報告会

渥美国際交流奨学財団の2008年度研究報告会は、2009年3月7日（土）午後2時から6時まで、東京都文京区関口の渥美財団ホールで開かれ、本年度の奨学生13人の研究発表が行われました。ラクーン会会員、財団の役員、来賓を含め約50名の方々が報告会に参加しました。

最初に、渥美伊都子理事長からのご挨拶があり、奨学生の皆さんに暖かいお言葉を送りました。特に、日本の春の風物詩の一つであるひな祭りに関する紹介と理事長ご自身に纏わる雛飾りの話がとても面白かったです。次に奨学生による博士研究の発表があり、皆さんはパワーポイントを駆使し、自分の研究内容を15分以内で、子供でも理解できるように説明することに挑戦しました。進行役の今西淳子常務理事から発表者に関するユニークな紹介もあり、紹介される学生が照れる場面もありました。理工系4名、文系9名計13名による発表は、休憩を挟んで6時まで続きましたが、参加者の皆様が最後まで静聴してくださいました。

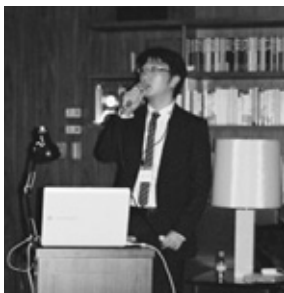
発表後には、ご出席くださった東京大学大学院工学研究科の金子成彦教授、亜細亜大学アジア研究所の小林熙直教授からコメントをいただきました。両先生は、ご自身の専門を超えた幅広い造詣をお持ちで、研究発表に関して大変有益なコメントをしてくださいました。天台密教をはじめ日本の伝統文化に関する研究は注目を集めました。また、研究テーマと関係なく、研究そのものに関する意味深い指摘もありました。

発表終了後に、同じホールで懇親会が開かれました。懇親会の機会を利用し、研究発表に関する意見の交流が行われ、新旧奨学生、財団の役員、来賓の皆様が歓談を楽しむことができました。

（文責：ネメフジャルガル）



□ 研究発表の 2008 奨学生の皆さん
(上段より、左から右へ次ページ発表順)



□ 来賓挨拶



東京大学大学院工学研究科教授
金子成彦先生



亜細亜大学アジア研究所教授
小林熙直先生



東京電機通信大学
広田貞雄様

□ 発表テーマ

張 建「中国都市部における後期中等教育と社会階層—教育機会格差の事例研究—」
 陸 載和「韓国の四天王像に関する図像学的研究」
 修 震「インターネットを用いたマルチ利用在宅手首リハビリシステムに関する研究」
 王 偉「超小型飛行ロボットの自律制御に関する研究」
 ヴェルノ、ヘリ リース「法華論記研究について」
 宋 剛「日中近代文学の比較研究—夏目漱石・魯迅と日本の自然主義文学との葛藤を中心に—」
 プアン、キムチャイヤラシー「下水処理における微生物の凝集現象」
 ネメフジャルガル 「農業構造調整下の牧畜地域経済に関する実証的研究—中国・内モンゴル自治区の草原利用型牧畜地域を
 中心に—」
 ハムスレン、ハグワスレン「現代モンゴル外交の構造的変遷に関する研究—ポスト冷戦期を中心に—」
 劉 健「漢字語彙変動詞のアスペクトについて」
 塩原 フローニ フリデリケ「桃山時代における高台寺蒔絵の意匠と技法—東京藝術大学大学美術館蔵『秋草蝶蒔絵料紙箱』の
 再現模型制作を通して—」
 洪 玗伸「沖縄戦と占領空間の研究—日本軍『慰安所』から米軍『収容所』までの戦場体験を中心に—」
 馮 凱 「バンプ型フォイル軸受性能の解析方法：リンク・スプリング計算モデル」

□ 懇親会



□ 2008 年度奨学生



2008 年度渥美奨学生のエッセイ

馮 凱 「日本に驚いたこと」 ----	15
洪 琬伸 「沖縄の蝶、渥美財団、そして私」 ----	15
塩原 フローニ フリデリケ 「旅がゴール」 ----	17
劉 健 「日本社会・日本人」 ----	19
ネメフジャルガル 「心の故郷」 ----	19
プアン、キムチャイヤラシー 「私が感じた日本及び日本人」 ----	20
宋 剛 「東遊記―旅で出会った人々の巻―」 ----	21
ヴェルノ、ヘリ リース 「言葉にしてくれなければ分かりません！」 ----	22
王 偉 「日本留学の感想」 ----	23
修 震 「自分の履歴書を創っている自分―変化に対応できるものを目指す―」 ----	24
陸 載和 「『近くて遠い国』から『近くて近い国』へ」 ----	26
張 建 「『細かいこと』の力」 ----	27

日本に驚いたこと

フェン カイ
馮 凱

東京大学（機械工学）

日本も中国も、アジアの一員であります。地理的にも隣国であり、文化的にも近い伝統文化を継いでいると思われています。日本に来たばかりの頃、私は、それほど異文化を感じないはずだと思いましたが、実際は、日本に対する理解が深まるにつれて、日本と中国の違いをますます感じるようになりました。

まずは、日本の社会には「決まり」が多いこと。日本はすごく秩序がある国として世界でも有名です。交通秩序はもちろん、公共場所でのマナーまでちゃんと守れることが私には驚きでした。電車の中で食べたり、電話をかけたりしないこと、エスカレーターで左側に立つこと、階段でもちゃんと上りと下りを分けていることなど、たくさんのルールがあって、みんなで守っています。これは素晴らしいことだということが、日本に対する最初の印象でした。日本にいる時間が長くなるにつれて、日本の社会での決まりごと、大人の一人として守らなければならないルールは、私の想像以上にあることに気付きました。たとえば、先輩の言うことをちゃんと聞くこと、先輩の方向通りに進むこと、自分の位置を意識して自分の身分に合う行動をしなければいけないこと。これらはどこの国でもそうだと思いますが、日本の方がもっと厳しいと感じました。何においても決まりがあります。それから外れると、周りの人に批判されます。どちらが良いか悪いかという問題ではなりません。ただ西洋の個人主義と違って、日本では皆と同じ行動をとることが大事だと感じました。

次は環境に対する意識です。地球温暖化とか、酸素の排出などは日本では皆が関心を抱いています。京都議定書なども皆が知っています。ごみの分別し方、ごみ処理技術などは世界の中でも最先端であると思います。ビニール袋をできる限り使わないこと、省エネ製品を使うことなど、消費者が皆注意しています。この

ようなことは日本の社会の常識みたいな存在になっていることに私は驚きました。

三番目は伝統的な文化を守ることです。中国と比べれば、日本はそんなに長い歴史を持っていないけれど、茶道、歌舞伎など今でも盛んです。お茶といえば、中国の有名なお茶も数多くあると思いますが、お茶の入れ方、飲み方、茶碗に対する鑑賞の気持ちなど、「茶道」と言われるものがあって、日本の方がもっと正式に継承していると思います。それから、正式の場合で和服の姿もよく見られます。

私は日本に来てそろそろ三年になります。日本に対する認識も少しずつ変わってきました。最初の「日本人はやさしくて、親切だ」という気持ちから、「日本人は頑固すぎる」に変わって、今は「お互いの国民性を理解した上で、仲良く付き合う」という気持ちになりました。これは留学生活のおかげだと思います。外国で暮らすことは誰にとってもそんなに簡単な事とは思いません。驚くことや、自分の考えと違ったりすることがあるのは当然なことです。そのうちに、自分も成長し、もっと国際的な人間になります。

沖縄の蝶、渥美財団、そして私

ホン ユンシン
洪 琬伸

早稲田大学（国際関係学）

一枚の写真を最後のエッセイに寄せたいと思う。渥美財団との出会いの直後に出かけた沖縄の座間味で撮った写真である。私はこの写真に「蝶の居眠り」という題をつけた。

座間味は第二次世界大戦期に多くの住民が、上陸する米軍と日本軍の間で逃げ場を失い、逃げ場のない恐怖から「集団自決」を強いられた島である。その島で、朝鮮人と住民との関係はどのようなものだったのか調べに出かけたが、私がまず学んだのは、朝鮮人の話でも、

住民の戦争体験でもない、蝶の写真を撮るコツだった。

1. まずはじっと待つ。
 2. 蝶の次の動きを予測して焦点を少し外して構える。
 3. そして、近づいたらやや早めにシャッターをおす。
 4. すると蝶が花の中に蜂蜜を求め、口を入れる瞬間がとれる。
- というのだ。

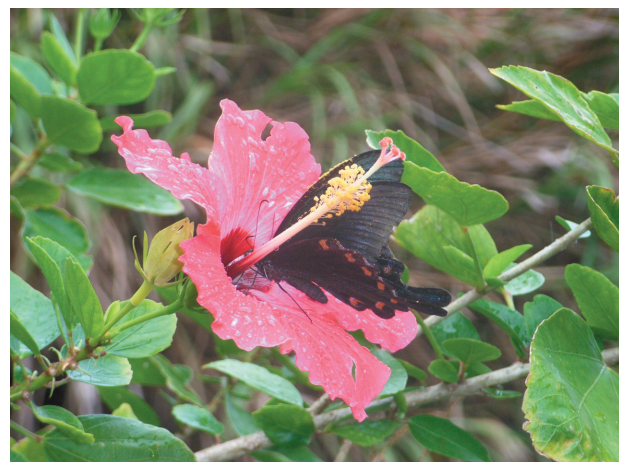
そして、この瞬間がとれたら蝶も、そして、それを撮る人間もシャッターが押されるわずかな瞬間、微妙に休めるのだと言う。沖縄の暑い夏、汗だらけになってカメラだけを手に握って座間味のあちこちを、この蝶を撮りに証言者と歩きまわった。彼の心を開かなければ何もできないし、私が聞きたいことは彼しかこの村では知る人がいない。こころの中では自分の聞きたい証言を早く聞きたい気持ちで焦りが出た。でも、もう彼の心を開けるようにするしかない。「お願いだから撮れてほしい」と心の中で蝶に祈った。蝶もまた、何回シャッターを押してもなかなかうまく撮れない若い女性を哀れむかのように、私の周りをぐるぐる回っているような気がした。私はいつのまにか、蝶を撮る時にじっと待つという彼の話を自分の研究に対する思いに寄せていたように思う。そして、何とか蝶の姿をカメラに収めた時のうれしさは今も忘れられない。嬉しさのあまり私はこの写真に題までつけている「蝶の居眠り」と。この写真が撮れて本当にうれしかった。そして生物学者であり、この島での「慰安婦」証言者であり、また、「集団自決」で家族を失った経験を持つ証言者は、夜、私だけのために村人を集めてくれた。私たちは蝶の話から、生まれたばかりの山羊に出会ったこと、そして島のあちこちでありあふれる自然の美しさで盛り上がり、そして、最後はこの美しい島でいかに悲しい歴史があったのかについて語って、ともに泣いた。

もし、私が「蝶の居眠り」にあのような時間をかけなかったら、きっと、あの夜の村人とのすばらしい証言会はなかったのであろう。私は焦りがでる時に、蝶の写真を撮るコツを思い出したりする。

今日何を書くか、あれこれ思いをめぐらせたが、やはり、この蝶の写真を寄せることにした。それは、こ

の写真は渥美財団の支援を受けて出かけた旅先の出来事であったし、最近焦りを感じながら（博士論文をかけなかったため）もう一度この旅で学んだことを思い出することが多くなっているからでもある。しかし、何より、今、蝶を撮る4つのコツを思い出してみると、不思議にも今西さんとの面談がそうであったのではないかと思ったからである。渥美財団での様々な思い出があるが、私にとって最も心強かったのは今西さんとの面談であった。その面談で私は進路の相談をするはずだったが、それよりは、思うがまま沖縄の調査についてあれこれと、また計画という段階でもない様々なやりたいことを、まるで子どものように話したような気がする。長い時間になる場合もしばしばあったが、最後までじっと待ってくれた今西さんに、この写真を送ろう。私の次の行動を予測し、早めにシャッターを押して、適切なアドバイスをしてくれたことに、今日はこの写真を送ることで感謝を申し上げたいと思う。おかげさまで、私は財団の支援を受けた1年間、長い留学生活でもわずかな休みを受けたように、心も体もほっとしたように思う。

へたくそな写真にたくさんの思いを寄せすぎた気もするが、今日だけは私も写真の中の蝶になってみよう。羽ばたく蝶のわずかな休みを下さった財団の皆さん、<ありがとうございました>。



旅がゴール

しおはら V r o n i F r i e d e r i k e
塩原 フローニ フリデリケ
東京藝術大学・博士（文化財保存学）

小さい時にはバレリーナ、作曲家、演奏者（バイオリン、ピアノ）になりたかったです。中学時代には哲学者、芸術家（彫刻、油絵）、歌手に深い興味を持っていました。どうしても普通じゃないことを目指していました。高校を卒業するまでの2年間、モデル事務所に勤めて、いろいろなところへ撮影やカットワーク（誰でも参加できる撮影会）に行きました。外国でも仕事をしました。そこで貯めたお金で卒業後にアメリカへ行きました。自分の力で成し遂げたということが、アメリカで過ごした時間よりも嬉しかったです。ドイツに帰って、大学に入りました。専攻は文化財保存学の油画、彫刻でした。世界遺産の再現制作や、他の文化遺産の修復をしました。3年間頑張って、素晴らしい経験をたくさんしました。修復現場で働いている時はホテルにずっと泊まっていたので、その生活は旅みたいでした。

卒業して、直ぐにスイスの博物館に勤めました。23歳でした。それで人生が終わったら大変と感じたので、次には日本への留学を決めました。日本についたら、日本語も分らなかったし、日本の文化を理解するのは難しいようでした。ドイツ文部科学省の同じ奨学金を頂いて一緒に福岡で日本語を習った友達と交流しながら、何でも体験しました。文化遺産や博物館だけでなく、プリクラの撮影、カラオケ、100円ショップ、花見、日本料理と日本語。ドイツやスイスにいて、専攻を生かして仕事をするよりも沢山の経験が出来てとても幸せでした。そして、よく覚えているのは、日本に着いたときの純粋な心です。町の看板からコンビニまで、どんなことにも興味がわきました。「普通はこうだ!」と思っていたら、日本の「こうだ!」は全く逆だったりしました。

日本について半年後に東京藝術大学に入ったときには、天国だと思いました。全く知らないことばかりで、

逆に、私の知っていることを教えてあげるチャンスも無く、次から次へ頑張ることばかりでした。日本の伝統的な漆工芸の技術を学ぶことによって、日本の生活に慣れることができたと思いますが、漆工芸の技術は難しかったので、本当に苦労しました。修士課程の2年間は殆ど旅でした。輸出漆器の特別観覧、国内外の長崎螺鈿の調査、そして東京では復元作業を行いました。

2年生のときに、頂いた奨学金のおかげで天皇家の方にご紹介していただいたことがありました。直接お話をし、握手し、日本人にもなかなか出来ないような経験をさせて頂きました。それはとても重要なことだったと思います。この表彰があったため、博士課程に入学し、日本に16世紀から制作された高台寺時絵を研究し始めました。そして、渥美財団から奨学金をいただき博士号を取得することが出来ました。

「何のために日本へ来ましたか?」とよく聞かれています。私は旅がゴールと思っています。日本へ来て、何かを探したことはあまりないです。着いてから偶然に見つけたことのほうが多いです。積極的にどんなことも受け入れようとしたら、生活が楽しくなりましたし、良い縁も生まれました。外国へ旅行したことがあれば、その気持ちを分ってくださると思います。自国で同じ経験ができるとしても、外国の喫茶店に入ったほうが楽しいです。自分の立場を考えるよりも回りをよく見ることを中心に時間を過ごせるので、自己中心の行動も少なくなると思います。留学のおかげで出来た一番ありがたいことは、性格が良くなったことです。自己中心、希望、夢よりも、回りに役に立つこと、上司を立てること、そして、我慢することが課題でした。朝起きたら、必ず「今日も頑張ろう」と、天照大神に挨拶して出掛けます。そして、やるべきことをやります。



図1：ヴェネツィア、奇抜金欄（部分）、12世紀
 テオフィルス・プレスビテル「De Diversis Artibus」
 レシピ収集による再現制作
 フローニ・フリデリケ・カウチ作、2001年



図2, 3：修了制作、長崎螺鈿
 技法の復元制作
 左：佐倉国立民族歴史博物館蔵、「花鳥螺
 鈿蒔絵香水瓶箱」復元制作
 右：ミュンヘン・国立民俗博物館蔵、シー
 ボルトが持って帰られた「梅螺鈿華掛け」
 復元制作
 フローニ・フリデリケ・カウチ作、2006
 年

図4, 5：博士制作、高台寺蒔絵の再現制作
 上：東京藝術大学蔵、「秋草蝶蒔絵料紙箱」蓋表
 下：「秋草蝶蒔絵料紙箱」蓋表の復元制作、
 塩原 フローニ フリデリケ作、2009年

日本社会・日本人

りゅう けん
劉 健

北京大学・早稲田大学（日本語教育）

日本社会はどのような存在か、日本人はどのような感じか、とよく中国国内の友だちに質問された。一言でこの質問に答えるのはちょっと難しいと感じた。

日本は二度目。前回も東京でしかも同じ早稲田大学だった。だから五年ぶりにまた来日して、ちょっと不思議に感じたのである。東京はあまり変わることなく、すごく懐かしい雰囲気であった。

しかし、今回の来日で、何よりも一番印象深いのは、日本社会における「能率意識」だ。国土もあまり広くはなく、資源にもそんなに恵まれていない日本は、どうやって国民にこんなに豊かな生活をさせることができるのか、中国人にはなかなか理解できないところであるが、実際に日本で生活してみると、だれでも感心すると思う。というのは、日本のどこに行っても、「能率性」を容易に見つけることができるからである。料理屋の店頭にある券売機から、ケータイにおける簡単入力機能まで、能率を高めることによって、人々が楽に、手間取ることなく、日常生活を楽しむことができる。この能率性を実現させる背後には、日本人の「能率意識」が働いている。一人の力よりは、グループでやるほうが、もっとスピーディーになるということは、日本人の誰でもがわかるイロハであるように感じられる。

それに日本人。桜と相撲を好きではない人はあまりいないと言えるだろう。この二つは古くからあるもので、つまり、日本人は伝統的なものをよく受け継いでいるのである。今でも昔ながらの家屋が街に残り、成人式や卒業式の日だけでなく、街角で時々目にする女性の着物姿などは、日本人の伝統を大事にする意識を物語っている。一方、日本人女性のメイクの仕方や重ね着をはじめとするファッション感も時代を先取りしている。伝統と現代の両極をバランスよくとって生活を送る日本人ならではのワザを育成するには、相当の想像力と創造力なしにはとうていできないと言っ

て過言ではない。優れた想像力と創造力を有する日本人が、インスタントラーメン、ケータイのメール機能などを続々発明してきたのも、別に不思議なことではないように感じられる。

日本に来てからまだ一年も経っていない。論文を書きながら、春の桜、夏のアジサイ、そして秋の紅葉を楽しむのは本当に幸せだと思う。もしまた冒頭ののような質問をされたら、今度はちゃんと答えられるのではないかと思う。

心の故郷

ネメフジャールガル
Nemekhjargal

亜細亜大学・博士（経済学）

内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）

僕は今まで、移動を繰り返しながらいろんな場所を彷徨ってきた。

もちろん遊牧ではない。僕が物事をわかるようになったところから故郷ではゲル（モンゴルの伝統的移動式住宅）の姿はなく、「オトル」と言われる夏季に限った年一回の移動のみが残っていた。僕が故郷を出てからすでに21年が経ち、今は「オトル」はもちろん、放牧まで姿を消そうとしている。

僕の彷徨は文化の遊牧かもしれない。故郷では中学校卒業まで15年間を過ごし、赤峰という地方都市の高校に進学した。そこで初めて都市を目にして、人とモノの多さに驚き、自分は田舎者だと感じた。両親から届く手紙と小包から故郷の温かさを感じながら3年間勉強に励み、無事に大学に進学した。大学時代には、中国東北の氷の町ハルビンで4年間住むことになる。中国語のコミュニケーションを習い、漢民族の友達もたくさん作った。一方キャンパスの中の自分は「他者」であることを感じ、「内モンゴル人」、「モンゴル族」であることを意識するようになった。ハルビンの各大学に通うモンゴル人の大学生たちが集まって小さなパー

ティーを開き、ミルクティーを飲みながら故郷の話で花を咲かせた。そこで当時医科大学に通っていた妻と出会ったのである。大学を卒業してから、引っ越しを繰り返しながら内モンゴルの中心都市フフホトで6年間生活した。フフホトの生活に慣れてきて、ようやく自分をフフホト人として認識し始めたところ日本に留学することになった。埼玉県、東京都の国分寺、小金井、東村山と移転を重ねて日本では7年間過ごした。移動や環境の変化に慣れ、自分が外国にいることを度々忘れるほど日本に馴染んでいた。池袋や大塚のモンゴル料理屋での集い、毎年ゴールデンウィークに光が丘公園で開かれるモンゴルの春祭り「ハワリン・バヤル」、10月に代々木公園あるいは川口西公園で開かれるモンゴル相撲大会は日本の中のモンゴルであり、我々の故郷であった。故郷を離れた人、故郷を失った人たちは、どこに行っても自分の心の故郷を見つけること、作ることができるのである。

場所を変えるたびに荷物を捨てたり、友人に譲ったり、郵送したり簡単に処分できた。移動する人にとって荷物の処分より気持ちの切り替えのほうがはるかに時間がかかる。日本に7年間生活して故郷に帰ってきたばかりの僕は、たびたび微妙な郷愁のようなものに襲われる。日本を離れるとき満開を迎えていた桜を思い出す。畳の匂い、ビールの味、満員電車、梅雨、温泉、居酒屋の赤提灯とのれんを思い出す。そしてフフホトの生活の隅々から日本を探し出すために工夫する。日本留学を経験した友人たちとの飲み会で自然に出てくる日本語の相づち、味噌や日本酒をおいている輸入品の店、日本人シェフが腕を揮う日本料理屋、本棚の文庫本から感じる古本屋の匂い…。中国にいるのに中国に関するニュースをヤフージャパンの海外ニュースから読む自分を不思議に思うときもある。

一方住む場所を転々としてきたこの21年間に、自分の本当の故郷は完全に姿を変えていた。数千年続いた遊牧は父の時代で終わり、僕の時代には放牧も姿を消そうとしている。自然も人間世界も変わるものだと分かっているものの、その変化の急激さにショックを隠すことはできない。草原は砂漠になり、畑になり、家畜は見えなくなり、河や湖が消えてゆく。本当の故郷と心の故郷とのギャップが日一日大きくなってゆく。

3歳の息子は日本で生まれ、フフホトで育ち、夏になれば僕のぼろぼろになった故郷を訪れる。彼にとって故郷とはどこであろうか、彼は将来どこへ行くのか、そして故郷に戻ってくるのか、僕にはわからない。今はただ、彼が大人になったとき、どこかにモンゴルの景色が残されていることを、彼は両親と心の故郷を共有できることを祈るだけである。

私が感じた日本及び日本人

プ ア ン キムチャイヤラシー
Phuong, Kimchhayarasy
宇都宮大学・博士（物性工学専攻）

カンボジアでは日本についての情報が少ないので、来日する前に、日本について知っていることは、地震の多い国であるということや技術の発達した国であるということくらいでした。あるいは、日本の自動車は経済的（燃費が良い）で、しかも性能が高いため、カンボジアでは一番人気があることしか知りませんでした。日本はどんな国か、日本人はどんな考え方を持っているのか、私は頭の中でずっと考え続けていました。

日本に関心を持ったきっかけは「おしん」のドラマを見たときで、とても感動しました。その時から、日本の文化や習慣に興味を持ち、是非日本に行って日本を体験したい気持ちが日増しに強まってきました。そして難関の日本留学試験に合格できたので、大学を中退して1997年4月2日に来日しました。来日したばかりの時は左も右も分からず、まるで言葉の通じない別の世界に迷い込んだみたいに感じました。最初は東京の国際学友会日本語学校に一年間通いました。その一年間は驚きと喜びばかりで、いまだに鮮明に覚えています。思い出すたびに、すごく懐かしいです。

日本語学校の後、佐世保工業高等専門学校に編入し、そこで三年間勉強しました。佐世保では方言が多く、標準語があまり使われなかったのが、最初の一年目は大変苦労しました。学校の勉強以外に、生け花部に入っていたので、より多くの日本の文化に触れると共に友達を

作ることができました。私にとって自分を磨くことができた3年間でした。

高専を卒業した後、信州大学の3年生に編入しました。長野では夏は湿度があまり高くないので、過ごしやすいくれども冬はとても寒かったです。しかし、雪が降ってくるのを見るのが私の一番楽しみでした。信州大学ではオゾンを用いて水中の有機物を酸化分解というテーマで研究を行いました。さらに化学物質を使わずに、環境に優しい微生物による水の浄化に関心を持っていたので、修士課程から宇都宮大学に進学することにしました。

来日してからあっという間に12年が経ちましたが、今振り返ってみると数え切れないほど多くの方々に出会いました。そのたくさんの方からの助けを受けて、様々な体験をしました。

日本人は「曖昧な表現をし、物事をはっきりと言わずに遠回しに言う」と言われていますが、それは日本人が相手を傷つけることを避けたいからだとは思いますが。日本の社会を見て感じたことは、日本人が勤勉で、責任感が強く、協力が大きい国民であることです。それに国民が豊かで、貧富の差がほとんど無い日本に対して、母国カンボジアの貧富の格差を痛感させられました。また、母国の外から母国を見ていると様々な面で非常に遅れていることも改めて感じています。

日本に来て初めて一人暮らしをして大変さや寂しさがありましたが、一人で何事も自分で解決しなければならなかったので、責任感および自己管理能力が強くなり、とてもよい経験になりました。私にとって日本は、私の第二の故郷でもあります。自分の人生の青春を、日本で有効に過ごせたことを幸運に思っています。それに、日本人の素晴らしい考え方、文化と習慣の違い、学校や地域交流やボランティア活動など、たくさんの経験を通じて、国、宗教に関係なく分かり得る友達を作れたことを実感しています。日本に留学した経験はこれからの私の人生を大きく左右することでしょう。

私の留学に際して奨学金支援していただいた文部科学省や他の奨学金財団と渥美財団、そこで出会えた皆様のお陰で自分の目標であった学位を取得できたことを心から深く感謝しています。これから日本で身に付

けた技術や経験したことを生かして、日本とカンボジアとの技術交流や両国の異文化の理解などに努めたいと思っています。

東遊記―旅で出会った人々の巻―

そう こう
宋 剛

桜美林大学・博士（地域文化）

北京外国語大学日本語学部講師（在北京）

2009年3月某日、リュック一つ背負い、帰国便に乗った私は、留学の旅にピリオドをうった。長かったような、短かったような6年間。出会ったあの人々は、今、何をし、幸せに生活しているのだろうか。

植田先生

大学院に入って始めて出会った先生。彼のオフィスで始めて聞いたのは、「私の兄は中国で戦死した。」という一言だった。どう反応すればいいか。頭が混乱に陥った。しばらくしてから、「僕は戦争映画が大好きです」と答えた。先生は笑った。私も笑ってみた。今から考えれば、あの時の先生は、きっと「そっちなよ」と心の中で呟いただろう。その後、植田先生は私の指導教官になった。修士論文も博士論文も指導してくれた。できれば、先生のそばにずっといたかったが。

浦山 某

初めてのバイト先の先輩。キャベツの千切りの速さは尋常ではなく、後輩を可愛がるスタイルも普通ではなかった。先輩は、数々の名言を残した。ずっと後で気づいたが、竹内力という俳優さんのセリフにかなり似ている。当時、一人の日本人女性のパートと一緒に働いていた。浦山先輩から戴いた愛称は「ゴキブリちゃん」だった。先輩が早く天国へのぼるように、ゴキブリちゃんと心を込めて祝福していた幾多の日々が懐かしい。

大江さん

次のバイト先の先輩、というか、私より一週間ぐらい早くパン屋に入ったおじさんだ。「剛君、お電話にこう」と、大江さんはいつもにこにこして言う。客に失礼にならないように、昼食のことをお電話というのは店のルールだ。大江さんの夢は自分のパン屋を持つことだった。一年後、大江さんは仕事をやめた。別れの言葉は、「剛君、おれのパン屋ができたから、いつでも食べに来な、金要らないからさ。」だった。

優君

大学での親友。高校時代、一時期暴走族の集団に入ったそう。大学生になっても髪が長く、目つきが鋭い人だった。彼とバスケットボールの試合で知りあい、友達になった。優君は少し怖そうに見えるが、名前どおりとても優しい人だった。卒業早々、長年付き合っていた彼女と結婚し、「バスケも結婚も宋君に負けないぞ」と笑って言った。

谷原さん

お世話になった財団のお婆ちゃん。「昔々」で始まる物語に現れそうな優しい顔つきで、算盤とカメラが得意な人だ。始めて面接の時にドアを開けてくれたのは谷原さんで、そして、最終発表会の写真とともに一通の書簡を送ってくれたのも彼女だった。書簡の最後に「元気で頑張ってくださいね」と優雅に書き綴っている。

印象に残った人、影響を与えてくれた人、愛してくれた人、傷付けてくれた人、出会った人はまだまだいる。みんなに幸せになってほしい。掛け替えのない六年間の旅を鮮やかに彩ってくれたのだから。

言葉にしてくれなければ分かりません！

ヴェルノ ヘリ リース
Võrno, Heli-Liis
学習院大学（哲学）

突然ですが、皆さんへ質問が一つだけあります。この一年で一番習得したことはなんでしょうか？

いいえ、学問としてではなくてもいいんです。個人的な経験でもいいです。何に感動しましたか？何に泣き、何に笑いましたか？

たくさんありますよね… 私は先日、大変お世話になっている先生の還暦お祝会に出席しました。そこで先生は奥様と共に還暦を迎えられたことを誇らしく感動の言葉を並べられました。ええ、共に還暦って、すごいことですね、確かに。

しかし、それに感動したわけではありません。感動的だったのは先生の奥様のスピーチでした。彼女も大学の教授でいらっしゃるって、皆に「林先生」と呼ばれています。

あれっ、今「はやし」と読みましたか？

違います、「リン先生」です。日本生まれ日本育ちの中国の方です。そして、リン先生がおっしゃったのは、「私はチャイニーズです！」と。

何、当たり前ですか？ はい。中国人は「私はチャイニーズです」というのは当たり前です。では、どこがすごいんですか？

では、再び質問します。外国出身で日本に住む人はどのように自分達を定義しているんですか？

アメリカ人ならアメリカ人同士、ミャンマー人ならミャンマー人同士と自分達のコミュニティの中で生活し、日本社会に溶け込もうとしない派と、それとは逆に、日本が大好きで日本人になろうとし、日本人との平等に、いいえ、日本人よりも日本人らしく振舞いながら必死に日本社会に溶け込もうとする派と、その二つが目立っていませんか？

それに対して、リン先生は日本生まれで日本育ちであり、日本人と結婚し、日本の大学で教え、日本人と一見何一つ変わらない生活をしながら、どこまでも「私はチャイニーズ！」を貫いていらっしゃるのです。どういことでしょうか？ リン先生のスピーチを簡単にまとめてみましょう。

彼女は結婚した時、ご両親にも日本人になるべきだと言われたそうです。ご本人もその当時そう思っていました。中国の国籍を持ちながら、中国へ行ったことがない自分はもはや日本人なのでは…？

しかし、しばらく経つと、同じ家で暮らすようになっても、生まれ育った背景が違うことを実感し始めたそうです。日本人同士では「言わなくても分かるだろう」という暗黙の了解が成立しても、彼女には通じません。相手の当たり前と自分の当たり前とは大分違います。そして、勤め始めた大学でも同様です。日本の大学で長いこと学んできているとは言え、またも「えっ！？」と思うことがあったりします。リン先生には、自分が日本人ではないことが、障害者のように何かのハンディーを持っているように思えて、かなり大変な時期もあったそうです。

しかし、ある時あることに気づきました。「私はチャイニーズです！」ということに。

「私はチャイニーズです！言葉にしてくれないと分かりません！」と。つまり、日本語の問題でもなくて、馴染む馴染まないの問題でもなくて、元々生まれ育っている文化的背景が違うのですから、日本人には「言わなくても分かるだろう」と言うことが通じるはずがありません。そして、それはハンディーではなくて、個性であり特徴です。よって、日本人にならなくていいんです。「言葉にしてくれないと分からないことがある」という特徴があるだけで、それを周囲に意識してもらえばいいんです。

パーティーのスピーチで、リン先生はそれを何度も繰り返していらっしゃいました。そして、どこでもそうおっしゃるそうです。「私はチャイニーズです！言葉にしてくれないと分かりません！」。

「その主張を貫いたから、こうして共に数十年教師として働き続け、共に還暦を迎えることができたと思います」とリン先生はスピーチを締めくくりました。

皆さんは、どう思いますか。日本の方はよく「そんなこと言わなくても分かるだろう」と思いがちだし、問題がある時でも話すか話さないか悩み、たいがい話さないようにして、何とかことを鎮めようとする傾向がありますね。それに対応するのが大変なので、自分の国のコミュニティの中で暮らす方法を選ぶ人も、諦めて帰る人も、一生懸命日本人らしくなろうとしている人も大勢います。

しかし、ベストはその中間くらいなのではないのでしょうか？「私は〇〇人」であることを意識しながらマイウェイで溶け込んでみてはいかがでしょうか？

この文章が何かのご参考になれば嬉しいです。もしわからないことがあったら、ご遠慮なく、声をかけてください。なにしろ、わたしはエストニア人ですから。言葉にしてくれないとわかりませんよ…

そういう愚か者ですが、今後何卒よろしく願いいたします。

日本留学の感想

おう い
王 偉

千葉大学・博士（人工システム）

千葉大学大学院自然科学研究科研究員

日本に来てあっと言う間に 11 年が経ちました。今まで自分の歩んできた道を振り返ると、不思議だななどの思いが溢れます。

最初に日本に来たとき、愛知県豊橋市にある愛知大学の留学生別科で日本語を学びました。来日する前に暫く会社で働いたため、再び学校に戻って真剣に日本語やほかの科目を勉強するのは大変つらいことでした。

でも、良い大学に入るためには勉強をしなければなりませんでした。もちろん、学費も生活費も全部自己負担でしたから、アルバイトと勉強の両立もかなり大変でした。何とか努力して千葉大学の工学部に合格することができ、人生二度目の大学入学を実現しました。

千葉大学の学部に入學したとき、私はもう 27 歳になっていました。周りの学生と比べると、かなり年上だったので、時間の大切さをしみじみ感じ、二回目の大学で絶対悔いを残さないよう頑張りました。勉強のほかに、アルバイトも十種類以上体験することができて、社会勉強も十分したと思います。学部の 4 年生になったとき、自分が一番興味のあるロボット工学研究分野を選んで、超小型飛行ロボットの研究を始めました。企業との共同研究なので、研究室に入ってもまもなく、企業に派遣されそこで実験を行うことがしばしばありました。しかし、その頃の私は、まだ制御に関する知識がほぼゼロの状態でした。上に先輩がいなかったので、ただ一人で本を読みながら、制御器の設計とプログラムの実装を懸命に行う試行錯誤の毎日でした。何度もミスを起こしたものの、やっと史上初の 10 グラム台の超小型飛行ロボットの自律制御に成功しました。その期間は、今までの研究生活の中でも一番大変な時期だったと思いますが、最も勉強し、最も力をつけることができた時期でもあると思います。その後、推薦入学で修士課程に進学し、伊藤国際教育財団の奨学生に選ばれて、生活に対する心配が一切いなくなり、全力で研究することができました。修士 2 年の時に、年齢が比較的高い私には、「早く就職した方がいいよ」というアドバイスを周囲からたくさんもらいました。確かに当時は某大手企業の内定も決まっていた。しかし、中途半端だった自分の研究をどうしても置いていけず、悩んだ末、引続き博士課程に進むことにしました。

千葉大学におけるほぼ六年間の研究のメインは、 μ FR (μ フライングロボット)、小型電動ヘリ X.R.B、そして現在全力で開発している Quad-Rotor タイプの X-UFO の三つを制御を対象として扱ってきました。いろいろな成果を残しましたが、現在の目標は早く実用化を実現することです。研究室の立場としては研究成果が一番大事ですが、私はこれから産学官連携特任研

究員として研究室に残るので、力を尽くして短期間で実用化をさせようと考えています。

日本での 11 年間の長い留学生活は、もうこれでマルをつけることになります。喜び、苦しみ、楽しみ、悲しみなどを味わって、私の人生の中で最も大きく成長することができた時期だと思います。そして、大学院に入った後、ずっと幸運に恵まれ、5 年間連続奨学金を受給することもできて、そのお陰で、研究成果を沢山あげて、順調に博士号を取得することができました。

これからも暫く日本に残って現在の研究をつづけますが、将来を考えると、やはりいつか中国に戻るだろうと思います。たとえ将来、中国に戻って、現在の研究を継続することができなくなっても、日本で過ごした人生は永遠に忘れず、日中友好の架け橋としても働いていきたいと考えています。

自分の履歴書を創っている自分 —変化に対応できるものを目指す—

しゅう しん
修 震

東京工業大学（機械制御システム）

人生は自分の履歴書を創る事であると思います。そして、なりたい自分を描き続けることで人は成長するのです。

日本経済新聞に「私の履歴書」と言う連載読み物があり、1956 年 3 月 1 日から朝刊最終面（文化面）に掲載され、現在も継続中です。就職活動を始めた頃からこの記事に興味を持ちました。各界の著名人の出生から今日に至るまでの半生を描く自伝でつづられ、その波瀾万丈な人生に感動し、自分もそのような人間になりたいと心を動かされました。

中国山東省の山奥に生まれ祖母の手で育った遊びが大好きな子、祖母から教師の両親の手に変わった勉強一筋の子、親戚に見守られ初出世と思われた北京への進学、多くの人生初体験を味わった日本への留学。今

までの私の人生を振り返って環境の変化ごとにまとめるなら、この四行で言い表せるでしょう。変化は人生に避けられないもので、ダーウィンが「この世に生き残る生物は、最も強いものではなく、最も頭のいいものでもなく、最も変化に対応できるものである」と言う考えを唱えました。この言葉に出会った私は、変化にどう向き合えばいいのかと出口を探し続け、自ら変化を求め、自己改造をしはじめました。留学する事を考えたのもこの気持ちがあったからかもしれません。日本に来てから、あっという間に4年間経ちました。今まで自分が暮らして来た環境からの変化は想像以上のものでした。

英語で試験、面接を受け入学したため、私は日本語が全く喋れないまま日本に来ました。最初日本人グループに溶け込む事は思った以上に大変でした。10月に博士課程に入学した私は研究室に同期がいません。博士課程は留学生が多く、修士、学部日本人グループと離れているのも事実でした。日本人学生は親切ですが、十分に信用できるまでには決して心を開いてくれませんでした。日本人同士の間でもそうでしたが、まして言語能力の足りない留学生の私にとって、最初の道開きは困難に満ちていました。困難は避けては通れないと思った私は、まず交流にそれほど言語能力が必要でない水泳などの運動から彼らと付き合い始めました。日本語が少し話せるようになった頃は、共通の話題を創るため彼らの好きな漫画を読んだり、話題の映画を見たりして、積極的に自分と彼らの共通な部分を伝えました。今は日本人の学生たちと普通にご飯を食べたり、遊んだりして、一緒に笑ったり、怒ったりもします。時には、お互いの国の悪いところ、敏感な問題も平気で討論できるようになりました。研究の面でも最初のうちは、英語での学会発表、論文作成などをしていましたが、今ではせっかく日本で博士号を取るなら、博士学位論文も研究成果も日本語で仕上げることにしました。そして言葉の壁が故に、留学生と日本人学生間の交流の悪循環を招かないように、私が設立を促進した留学生会では、日本人と留学生両方で構成したチームのみに参加できるスポーツ大会などのイベントも企画しました。

生活の面だけではなく、研究の面でも変化と向き合

うことは困難と向き合うこととなるのです。入学時に提出した遠隔制御の研究テーマは実用化の方針に従い、一年目の理論的な解析から実用意義のある遠隔リハビリに発展させましたが、この変化に伴い、必要となった医学観点からの意見を求めることはとても大変なものでした。テーマが決まったとしてもやり方は色々あるため、ある程度のストーリーが出来なければ、専門家でも意見が言えません。試行錯誤を繰り返し、試作品を作るしかなかったです。医学の知識が不足していたため、最初は様々な困難に悩まされましたが、どの分野のリハビリ専門家に尋ねればいいのかすら分かりませんでした。時には間違った分野の専門家を尋ね、皆の言った事がなぜ違うのだろうと困惑したこともありました。そこで、リハビリ専門家同士のメーリングリストに加入し、自分の熱意をリハビリの先生方に伝えました。先生方のイベントに参加しているうちに、プライベートな雰囲気の中、普段聞けない悩みを聞くこともあり、リハビリの現場で働く先生方の考え方や現場のニーズをしっかりと吸収することができました。その上、実際に試作した装置やシステムを患者に体験してもらい、提案したシステムの更なる改良と進展を実現しました。

そして、博士課程が終わりを迎える今、これまでのリハビリに関する研究を通じ、少子高齢化と言う社会的変化の中、現場の医療介護労働者たちの負担軽減、高齢者や患者に対する生活支援など安全で安心の豊かな生活環境の創造に対する早急な対応が迫られることを身を持って実感しました。その事業に、他の人よりも一歩先に出て行って、現状を打破し、社会に新しい価値を創造することができれば、未来に勝ち残れることになると思います。そこで、就職活動は福祉医療と工学を連携した福祉ロボット、生活支援システムなどの分野を取り込んでいる企業に注目しました。自己の人生観や職業観を分析することで、自分にあった職業や就職先を見つけ、これからも変化を恐れない信念を持ち、自分の履歴書を書き続けたいと思います。

「近くて遠い国」から「近くて近い国」へ

ユク ゼファ
陸 載和

武蔵野美術大学（造形芸術）

武蔵野美術大学非常勤講師

韓国でインド哲学、その中でも仏教哲学を勉強していた私は、翻訳書でありながら日本の研究者が書いた書籍などと接する機会が割と多かったため、知らず知らずの内に日本の緻密で幅広い研究に対する憧憬を抱いていた。しかし、当時私にとっての日本は、学問あるいは歴史の中に存在するものであり、ほとんど現実味を感じない国であった。ところが、研究のためにより良い環境を求めて日本に来たものの、日本で生活する以上、あらゆるところで韓国と異なる習慣や意識と対面せざるを得なかった。それはただ単に外国人がゆえに誰もが体験するものでなく、韓国人に対する日本人の特殊な認識によって生じるものであり、韓国人以外の外国人はそれほど感じないことである。

日本人は外国人とのつき合いを考える際に、その対象として欧米人を想定する傾向が強く（これに関しては韓国人もさほど変わらないと思うが）、また欧米人に対して非常に寛容である。欧米人がたとえ少々おかしな日本語を話しても十分に配慮しながら聞くことができるし、習慣の違いからくる行動の違い、あるいは動作や身振りの違いも、知識さえあれば戸惑うこともない。仮に何か嬉しいことがあって、いきなり欧米人に抱きつかれて頬にキスをされたとしても、それは彼らの習慣だからと、理解して許すこともできるであろう。

このように日本人が彼らに対して余裕をもって接することができるのは、彼らを明らかな異民族と意識するからに違いない。東洋人同士となると外国人意識（異民族意識）はもう少し薄くなる。そして、中国人やモンゴル人などに対してはさらに薄く、韓国人には最もその意識が希薄になる。当然なことながら、身体的な面でも文化的な面でも、日本人と韓国人は互いに他のいかなる民族との間よりも「大同小異」の間柄にある。ここで私は「小異」の問題について考えてみたい。

炊いたご飯を主食とするのは同じなのに食べ方が少々異なる、どちらも家族主義的なのに韓国では父系の血統を守ることが重要で日本では血統よりも家系の存続が目的となる。どちらも仏教を受容したのに韓国の寺院は山中に独立しており日本の寺院は町中に進出している。寺院に安置されている仏像は韓国では信仰の対象としての意味が強いが、日本では文化財としての意味が強い（勿論信仰の対象でもあるが）……。

このように日韓の間には異なるところが存在するにもかかわらず、その程度の差が欧米と比べて小さいため、つまり「大同小異」であるため、その「小異」を認めようとする意識が薄いのである。私が学会で発表をする時や他の研究者とつき合う時、私を外国人として見なす日本人はほとんどいない。つまり、「小異」を認めてもらえないわけだ。がゆえに、言葉遣いや身振りなどにおいて自分が日本人になったつもりで気をつけなければならない。つい愚痴をこぼしてしまったが、「小異」を認め合うことは日韓関係において重要な問題であると思う。

私が日本人とつき合う時に最も戸惑うのは、他人にはなかなか本音を言わない曖昧な態度である。しかし、言い換えれば、それは他人に対する優しい心遣いとも受け止めることができると来日 10 年目でやっと理解するようになった。紙面上多くのことは語れないが、いたる所に確かに存在する韓国と日本の微妙な違い、すなわち「小異」を、一人一人が認め合うことができた時に、真の韓流ブームあるいは日本流ブームが両国で起こりうるのではなかろうか。

「細かいこと」の力

ちょう けん
張 建

東京大学（教育学）

時々日本の「細かいこと」に感動する。

日本に来て、10 年目になる。日本での生活に慣れてきた。しかし、いまだに日本のいろいろなことに新鮮さを感じる。日本人はあたりまえと思っているかもしれないが、私に深い感動を与えることがたくさんある。

1999 年 10 月 5 日、日本の国費留学生として日本にやってきた。成田空港で出迎えてくれた日本のスタッフに 2 万 5 千円の「渡日一時金」を渡された。奨学金を数日後にもらえると考えたから、その時、「この小さな事」に大変感心した。お金をもらえることだけではなく、その「思いやりの心」に。

その後、いろいろな場面で日本人の「細かさ」に出会う。

- バスに乗る時、停車ボタンがある。「次に降ります」ボタンを初めて見た時に、その発想をとて面白かった。そのボタンの設置によって、多くの人に便利をもたらしたに違いない。
 - 映画館に行くと、子供用の座席が高くなる座布団を無料で借りることができる。
 - 冬の間、電車の席に座ると、足に温かい風が吹いてくる。
 - 雨の日に、公共施設にいくと、ドアの前に傘を入れるビニール袋が必ず用意される。
 - 多くの日本人は、飲み終わったボトルを水で洗い、キャップとラベルを外してから捨てる。
 - 買い物が終わると、スーパーから冷凍食品保存用の氷やドライアイスをもたらえる。
 - 日本の家庭では、お風呂の上に板あるいはシートをかけて温かいお湯を長持ちさせる。
 - トイレで水を流すときに、まず一回水が貯水タンクの上にある水管から出て、手を洗ってから便器を流す。
- ...

以上のような「細かいこと」は、特に大したことではないと思われるかもしれない。しかし、私はその背

後に大きな力が潜んでいると考える。日本の電気製品の性能と品質はずっと世界のトップである。最近、海外の製品に市場を奪われていると多くの人が感じるが、次世代の日本電気製品を見るかぎり、日本のブランドは依然として不動なものであることが分かる。例として冷蔵庫をあげてみよう。テレビのコマーシャルに出た製品だけでも、「真空保存」冷蔵庫、「急凍」冷蔵庫、「抗酸化ビタミン使用」冷蔵庫、「両方向ドア」冷蔵庫など、この数年間だけで 10 数種類の革新的な新製品が販売された。

これらの製品を生み出すアイデアが、なぜ日本で生まれ、そして生かされるのか。その背後に日本人の「細かいこと」への心遣いと他人への思いやりが決定的な要因として存在するのではないだろうか。日本人の力は、電気製品に限られることがない。ロボットの開発において、日本は文句なしに世界の最先端に立っている。ロボットの開発には、高い技術力が必要であるが、システムとしての「緻密さ」、ロボット用ソフトウェア開発に不可欠な「細かさ」を日本人が備えているからこそ、人間の動きに最も近いロボットが日本で生まれた。このような高度なロボットは日本しか開発できないと私は思う。

いま、100 年に一度の金融危機と言われているが、「思いやりの心」と「細かさ」を失わない限り、日本は依然として大きな力を持っていると私は信じている。そして、この「細かいこと」からでてくる日本の力について、これからも探し続け、そのなかから「小さい」感動を収穫していきたい。

2009 年度渥美奨学生の自己紹介

崔 恩碩 「日本の都市的起源を求め続けて」 ----	30
ホサム ダルウィッシュ 「来日のきっかけ」 ----	31
カバ メレキ 「『人間失格』を読めなくて」 ----	32
金 英順 「私と日本文学研究」 ----	33
郭 榮珠 「短い人生の歩み—韓国から日本まで—」 ----	34
権 南希 「研究者としての『志』」 ----	34
リンチン 「歴史の真相の究明をめざして」 ----	36
エリック・シッケタンツ 「日本と中国をつなぐ歴史理解」 ----	37
シェルマトフ ウルグベック 「ウズベキスタン法制度への貢献を目的として」 ----	38
孫 貞阿 「緑と共に歩む生活」 ----	39
フェルトカンフ エルメル 「私が伝えたい異文化の見方」 ----	40
イエ チョウ トウ 「ミャンマーのイエです」 ----	41
朱 琳 「自分探しの旅」 ----	42

日本の都市的起源を求め続けて

チェ ウンソク
崔 恩碩



出身国：韓国

在籍大学：国民大学（韓国）大学院国際地域学科／東京大学史料編纂所研究員

博士論文テーマ：日本近世の都市社会研究—近世後期武蔵国の小都市を中心に

私が研究対象としているのは日本近世の小都市である。小都市といえば聞き手は何を思い浮かべるであろうか。おそらくいまや東京のベッドタウンとして見事に生まれ変わった埼玉や千葉の人口 20 万前後の都市であろう。まったく的が外れた解釈ではない。なぜなら私の研究対象たる近世小都市はまさに現在の小都市の起源であり、その核をなすところの「町場」であったからである。江戸時代に千人～三千人の人口を維持するのが通例であったこれらの町場をもって、日本における「下からの都市」がいかように展開し、そのなかでいかなる社会問題を抱えるようになったのか、またどういうふうにこれらの新たな社会問題に対応したのかを探るのが、当面の私の課題である。

最初このテーマに取り掛かったのは、東京大学大学院で修士論文を準備しながら角筈村（現在の新宿駅一帯）の古文書を読み始めたことに端を発する。以後、千住・越谷・春日部・岩槻・浦和など埼玉の史料を詮索するうち、城下町中心の都市史研究が繰り広げる近世のイメージとはまた異なる世界が展開していたことをますます強く意識するようになった。三井など新興の大商人が都市共同体を形骸化し支配する一方で、広範な下層民の世界が幾百の町にわたって展開していたのが当時の城下町＝巨大都市ならば、そこから歩いて一日足らずの町場には戦国時代からの土豪が命脈を維持するなかで、同族商人中心の都市支配が強固に存在していたのだ。当時の日本人に一番身近な都市であったはずのこれら町場の社会は、意外にもあまり研究されていない。こういうことに気づいてから、小さい町場というプリズムを通して日本の近世を見ることが自分の当面の研究領域を構成するようになった。

私はその後、日本を離れ短い期間ではあるもののアメ

リカの大学院に籍を置いたり、研究を完全にやめて会社勤めをしたり、紆余曲折を経てきた。一時期はもう日本史を研究することはないであろうとも思っていた。しかし、日本留学時期の先輩の誘いで再び学校へ戻り、韓国の国民大学で日本史研究を続けることになった。もう 2 年も前のことである。

この春、渥美国際交流財団からの思いもよらぬ善意に恵まれて二度目の日本生活が始まり、自分のテーマを生み出したあの馴染みの空間、赤門をくぐると真っ先に目の当たりにする古色蒼然とした史料編纂所の建物で博士論文を書くことになった。久しぶりに戻ってきた日本史学研究室や指導教官のゼミにはもう友人たちの姿はなく、十数人をも数えた学生で史料編纂所の部屋が賑わっていた頃に比べれば少々寂しささえ覚えざるをえない。その一方で、変わったのは日本史学研究室だけではないということが少しずつ分かってくる。自分も変わったのだ。日本史独自のアプローチと用語、そして史料の量的蓄積へのこだわりは薄くなり、他の専門とコミュニケーションできる日本史研究、事実を超えて意味を問う歴史研究への志向は強くなりつつある。その結果として何が生まれてくるのか、来年の報告会でお見せしたい。

来日のきっかけ

ダルウィッシュ ホ サ ム
Darwisheh Housam



出身国：シリア

在籍大学：東京外国語大学大学院 地域文化研究科地域文化専攻

博士論文テーマ：ムバラク時代のエジプトにおけるムスリム同胞団と野党勢力の政策分析

私は、世俗的なシリアの一般家庭に生まれ育ちました。両親は共に教師をしており、仕事の関係で7歳までアルジェリアに滞在しました。アルジェリアでは地元の人々だけでなく、様々な国から来た先生やその子供たちと交流があり、このような国際的環境で幼少期を過ごしたことが、文化と宗教の多様性への意識を高め、視野を広げることに役立ちました。また持ち前の明るく活動的な性格や、人との交流が好きなことから、様々な背景をもった人と交流し、他者への理解が対立や紛争の解決につながると考えるようになりました。

日本について知る最初のきっかけは、学校の歴史の授業でした。授業では日本の戦後復興と経済発展について説明がありましたがこの時に驚いたのは、同じ時代の1946年に独立を果たしたシリアと1945年に終戦を迎えた日本のその後の命運の違いです。大学2年次には、キャンパス内に日本語教育センターが設立され、ダマスカス大学に交換留学で来ていた日本人学生にアラビア語を教えることで親しくなり、日本での大学教育や研究の環境、そして日本人の中東研究者について知ることができました。私は学部では英文学を専攻しており、英文学専攻で留学したい学生は、みな欧米に向かうのですが、日本の学術的環境を知ったことで、日本で勉強を続けたいと考ええるようになりました。

シリアは、隣国イスラエルと敵対関係にあるため、常に非常事態体制が敷かれており、この政治的環境が、経済状況の悪化、物価高騰、雇用機会や教育機会の喪失につながっています。この状況を改善するには政治的な変革が必要と考え、政治の研究を志しましたが、独裁体制のシリアでは自由に政治の研究ができる環境はありません。大学には図書館もなく、情報統制もあり、研究に必要な資料を入手することができません。それに比べ日本

では、大学の設備もそろっており、資料や文書も公開され、さらには研究環境の国際化で日本語を専攻していない学生に対しても窓口が開かれており、英語を併用した研究が可能な環境が整っていることが、日本留学の決め手となりました。それに加え、欧米発の中東研究が盛んな中で、中東と直接対立や歴史の確執がない日本では中立的な視点から中東研究が行われていることも、日本で研究を希望することにつながりました。

博士課程修了後には、日本の研究所や大学で研究を続けながら、中東について教えることを通じて、日本における中東理解と中東研究に貢献したいと思っています。そして、将来的には中東世界で日本の歴史や文化、そして日本の中立的な中東研究を紹介し、双方の交流と理解の促進に貢献したいと思います。

『人間失格』を読めなくて

カバ メレキ
Kaba Melek

出身国：トルコ

在籍大学：筑波大学大学院 人文社会科学研究科文芸・言語専攻

博士論文テーマ：ピエール・ロティの作品における日本とトルコ



初めまして。私は 1979 年 10 月 31 日にトルコの世界遺産で有名なパムッカレのデニズリ市に生まれました。外国語に興味があったので高校では英語を中心に勉強しました。高校卒業後は日本の企業に勤める目的でトルコのカイセリ市のエルジエス大学日本語・日本文学部に入学しました。

大学で初めて日本語とふれあい、日本文学の授業が面白かったのですが、トルコには日本文学の先生がいなかったため、十分に勉強できませんでした。大学時代、日本語を勉強していると言うと、相手は必ず興味を持ってくれました。よく「私は日本が好き」と言われました。しかし「日本や日本人の何が好きですか」と聞くと、多くの場合「着物」「侍」「電気製品」といった同じような返事ばかりでした。親日的だと言われるトルコの人々ですが、日本に対しての知識が少ないことに気づかされました。異文化を愛することだけでは足りない、それを知ることが必要だと強く感じました。たとえば日本の「侍」だけを知るということは、それ以外のことに気づかないということをも意味します。そこで私はトルコで日本文化や伝統を紹介することが、日本の企業に勤めることより大切だと思うようになりました。日本の歴史・文化を学ぶために日本に留学するトルコ人は多少いましたが、文学の場合は留学期間が長くなるためか、専攻するトルコ人留学生はほとんどいませんでした。

は適さない環境でした。そこで日本留学を決心しました。

2003 年に日本文部科学省の奨学金を頂き来日しました。現在はフランス人のピエール・ロティの日本とトルコについての作品を対象に研究を進めています。卒業後は日本文学の作品をトルコ語に翻訳することと、トルコ語の日本文学の教科書を作ることが私の夢です。それによってトルコでの日本研究に貢献したいです。それと共にトルコ文学を日本語に翻訳して紹介したいと思っています。

大学の卒業論文で太宰治の『人間失格』について書いたのですが、大学 4 年生なのに、この作品を十分に読み込むことができない自分に対して不満を抱きました。そこで将来は日本文学をもっと深く勉強することが私の目標になりました。日本人の文化や日常を知らないままでは、自分の文学の勉強は完全ではないと思いました。また、トルコには日本語の本が少ないため、研究や勉強に

私と日本文学研究

キム ヨンスン
金 英順

出身国：韓国

在籍大学：立教大学大学院 文学研究科日本文学専攻

博士論文テーマ：東アジア孝子説話研究



私が日本留学を決めた理由は、日本文学を学びたい一心からでした。そもそも、日本の文学に興味を持つようになったのは、韓国の博物館で偶然目にした日本の古典文学を紹介するパンフレットに掲載されていた『源氏物語』や『平家物語』などの書物と絵巻の写真を初めてみてからでした。韓国の古典にみる漢字ばかりの書物とは違って、漢字と変体仮名が混じりあって書かれた日本の古典は、文学作品そのものが芸術のように思われました。その時は、韓国語訳の粗筋と解説を読んでいたが、もっと詳しい内容が知りたい、さらに、自分の力で読んでみたいと思うようになりました。そこで、日本語を学び、日本の大学で本格的に日本の古典文学を勉強しようと決意し、家族の協力を得て日本に来ることができました。

その後、日本の大学で学士、修士、博士課程に進み、『平家物語』における説話を研究するようになりました。ところが、博士課程に進んで間もない時、韓国にいる父親が病に倒れて、韓国と日本を往来する生活を暫らく続けました。そうしているうちに博士論文を書くことができず、博士課程を修了することになりました。しかし、父親が亡くなった後、もう一度、研究を続けようと決心し、父の看病をしていた時から強く関心を抱いていた日本と韓国の孝子説話を中心に博士論文を書くことを決めました。そこで、以前から説話研究のご指導を頂いていた立教大学の小峯和明先生の下で博士論文のご指導を頂きたく、2006年立教大学博士後期課程に入学し、これまで準備して来た研究論文を学術雑誌に投稿しながら、現在、博士論文作成に取り組んでいます。

父親の病を契機に新たに取り組むようになった孝子説話研究は、父親の病と死に対する自分の無力を痛感していた私にとって、亡くなった父親に対する強い思いや、現在、中学校に通う子供をもつ母親という立場から最も身近な問題として考えられるテーマでした。しかし、従

来の日本における孝子説話の研究は、日本と中国を一対一対応で日本への一方的な受容論に終始し、間の韓国に伝わる孝子説話はあまり注目されていませんでした。こうした偏差を修正するために、博士論文では、日本の孝子説話と韓国の説話との比較を試み、東アジアにおいて儒教と仏教とで重要な意味を担った孝子説話の総合的な研究を目指し、博士論文を作成していきたいと思います。博士論文「東アジアの孝子説話研究」では、日本と韓国の説話文学に描かれている親子の関係について、両国に共通して伝えられている説話を中心に、親と子に求められる倫理観と儒教の孝の観念との間に生じる葛藤が説話の中でどう捉えられているかについて考えてみたいと思います。また、中国及び日本と韓国にも広く語られている釈迦の本生譚（釈迦の前生に関する説話）を中心に、中でも儒教の倫理観から強く否定される肉体損傷をモチーフに孝を主旨として語る本生譚に注目し、仏教の肉体観や死生観を踏まえながら東アジアにおける本生譚の孝子説話としての意義を明らかにしたいと思います。こうした博士論文の「東アジアの孝子説話研究」は仏伝の研究においても重要な意味を持つとともに、日本と韓国の説話の比較研究においても一つの柱になると考えています。

博士号を取得した後は、日本で暫くの間は、韓国説話文学『新羅殊異伝』『海東高僧伝』（平凡社より出版予定）の注解書刊行に伴う作業と研究を続けながら、博士論文をまとめて研究書籍として出版するつもりです。その後、夫の仕事や子供の進路の問題を考えたい、日本で研究を続けるか、帰国するかを決めたいと思っています。韓国に帰国した場合は、日本での長い留学経験を生かして大学などの教育機関で日本の文化と文学を教える仕事に従事しながら、日韓両国の学術と文化交流に力を尽くしたいと思います。

短い人生の歩み—韓国から日本まで—

カク ヨンジュ
郭 栄珠



出身国：韓国

在籍大学：千葉大学大学院 理学研究科地球生命圏科学専攻

博士論文テーマ：リモートセンシングと GIS による洪水の浸水被害低減のため素因抽出と脆弱性マップ作成に関する研究；韓国洛東江流域

■ 日本留学を決めた理由

千葉大学に留学する前に私は、大学院修士を卒業し、株式会社世光情報システムにて2年間、韓国釜山市の都市情報システムを構築し、大学講師として学生たちを教えていました。その際、常に前向きの姿勢で仕事に取り組み、2006年には測量・地形空間情報技術士の資格を取得しました。研究を重ねていくうちに、最近の自然災害の増加について、特に世界の中で洪水災害の約9割がアジア地域に集中しているという報告があり、災害と人間との関係について考察を行う必要がある防災分野に興味を持つようになりました。

私が留学を決心した大きな理由は2つあります。

まず一つ目ですが、日本の防災研究所などのウェブサイトを見た際、過去の災害事例を詳しく分析したデータに大変興味をもち、魅力を感じました。そして、私が研究で身につけた多様な空間情報の解析技術をベースに、韓国における災害情報システムを開発したいという思いが強くなりました。2つ目の理由は、韓国では最近、自然災害に対する防災対策に本格的に取り組むようになりました。グローバル化している今の防災分野に技術者の一員として参加するためには、この分野で最もその技術力が認められている日本での学業と研究が出来る機会を持つことだと思いました。そしてより優れた総合洪水管理と防災対策の習得を目指すことが大切だと思いました。

この2つの理由が日本への留学を決心した最大の理由であります。

今後母国へ帰国した際は、日本で培った私の経験と知識が重要なベースとなり、この分野での日本・韓国の学術・技術交流を促進し、両国間の関係改善にも寄与でき

ると確信しております。

■ 博士号取得後の計画

博士の学位を取得後は、韓国へ帰国し、日本で積み重ねた学術知識と研究を活かし、政府研究機関の防災庁、もしくは釜山大学で水災害研究に取り組むつもりです。

日本では、衛星リモートセンシングによる地表面の詳細な画像が得られるようになってから、30年以上が経過しています。これにより地球環境変動および災害が記録された衛星データ基盤情報を蓄積しています。私の研究はリモートセンシング技術と地理情報技術を用いて洪水流域管理分野、特に水災害研究のスケール問題に取り組むと共に、韓国と日本、すなわち安定大陸と変動帯の違いについて比較研究を行うことです。さらに、アジア地域に適用可能な減災方法を提案しながら防災分野における土木・測量・地形空間情報技術者として活躍したいと考えております。このように研究の理論も重要ですが、災害現場を見ながら体験するのが最も大事だと考えております。その為、日本の先進防災技術と私の実務経歴をベースとして、日本での実務経験を蓄積したいとも考えております。

私の研究している洪水災害分野が、地域住民に「人間を中心とする安全・安心な社会」を作ることに役立つように、これからも努力して行きたいと思っています。

研究者としての「志」

クオン ナ ミ
権 南希

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院 法学政治学研究科総合法政専攻実定法コース

博士論文テーマ：武力紛争における環境保護のための国際的取り組み



学部三年生の夏、東南アジアからの外国人労働者に韓国語を教える機会があった。フィリピン、ベトナムからの外国人労働者達と接しながら、初めて「国際」という言葉が身近なものに感じられた。その活動がきっかけで外国人の人権問題に関心を持つようになった私は、修士課程でフランスの人権研究機関の研修プログラムに参加した。ヨーロッパ人権裁判所や紛争地域で活躍しているNGOの人々の現場の話は非常に興味深いものだった。そこで、世界各国の学生達と人権問題と貧困、紛争、環境問題の関連性について議論しながら、戦争や内戦、外国駐留軍問題など、軍事活動がもたらす様々な影響について改めて認識するようになった。

日本と韓国には世界の中でも最も規模が大きい米軍基地がある。2000年、韓米地位協定の改正を求める韓国国民の声はこれまでにない激しいものだった。ソウル所在の米軍基地からホルムアルデヒドが無断放流される事件が発生し、駐留軍の駐屯による環境問題の深刻さが初めて浮上したのである。日韓両国は、米軍の駐屯をめぐる生じる様々な問題を抱えているという共通点にも関わらず、駐留軍の活動による環境問題を扱うに当たって両国の対応状況はかなり異なっているように思えた。こうした問題意識は次第に大きくなり、当時、米軍の活動をめぐっては殆ど議論の対象ではなかった環境汚染問題を研究テーマに、それまで務めていた外務省を辞職し、東京大学に入学した。大学院では、国家の安全保障と人間の安全保障の狭間にある環境破壊を国際法の観点から研究している。

博士課程に入ってからおよそ2年間、ハンセン病に関する国際人権訴訟に通訳として係った。国が違っても立場が違っても、誰もが共感できる人類共通の価値が存在することを実感した。安全保障と人権、環境問題の交錯

について研究するに当たって、この裁判を通じて感じたこと、出会った人々とのつながりは、私の研究の原動力となっている。

志は、夢や希望ではなく、目標であり、信念であると思う。私にとって「国際」という言葉は、まさに「志」である。志を持つことは、単なる目標の設定にとどまらず、その目標を達成するために日々の努力を積み重ねていくことである。そして、何より大事なことは、これらの過程を通じて得たものを自ら発信していくことであると思う。将来には、国際環境法を中心に研究をし、現場を知る国際法の研究者として理論と実践の橋渡しをしたいと思う。そして、紛争と平和の構築、環境保護分野で貢献できるようにその成果を積極的に発信していきたい。

歴史の真相の究明をめざして

リン チン
Rin Chin



出身国：中国（内モンゴル）

在籍大学：東京外国語大学大学院 地域文化研究科地域文化専攻

博士論文テーマ：中国共産党の内モンゴルに対する「極左」民族政策とモンゴル人地域社会

私は、中国内モンゴル自治区出身のモンゴル人です。1988年に中国で大学を卒業し、その後11年間は、師範学校教員と大学講師を務めました。現在、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程に在籍し、「中国共産党の内モンゴルに対する“極左”民族政策とモンゴル人地域社会—1950～1970年代の経済的統合・政治的統合の強行を中心に—」というテーマで博士論文を執筆しております。

本テーマは、内モンゴル一地域の歴史の解明に留まるものではありません。内モンゴルという民族地域を一例とすることにより、非漢人地域に関わる中国共産党の「極左」民族政策の全般的研究の一助にすることができます。これは、近年、世界的に注目されているチベットや新疆の問題の歴史的背景や要因の探究にも深く関わるものです。また、世界各地で地域紛争、民族紛争が激化する現在、多民族国家中国の歴史に対する正確な認識を深めることは、諸民族間の平和的関係の維持にも極めて有益であると考えます。

この研究に取り組み始めたのは、私が内モンゴル大学の講師在任中ですが、さまざまな原因で困難なことがわかりました。そこで私は、研究を成し遂げるために日本への留学を選びました。理由の一つは、日本が世界のモンゴル研究の中心で、かつ、中国の民族政策や民族問題の研究も盛んに行われており、しかも自由な立場から、より客観的な研究をすることが可能であることです。もう一つの理由は、私自身が、大学で第一外国語として日本語を学び、その後も勉強を続け、一定の日本語力を身に付けていたということです。

来日後は、東京外国語大学大学院の博士前期課程の時から、本テーマの本格的な研究を始めました。素晴らし

い先生方に巡り会い、日本の高いレベルの研究方法与理論を習得しつつ、また一次資料を重視して実証的に研究をおこない、今までに、『アジア経済』などの学術雑誌に8本の査読論文（現在査読中の論文を含む）を執筆しました。そのうち1本の論文は『中国関係論説資料』第49号に採録されました。また、アジア政経学会などの学会での研究発表も積極的におこなっております。そのほか、多くの日本人と交流をする中で、モンゴルの伝統文化を紹介するとともに、優れた日本文化に触れることができました。日本での留学・研究生活は私にとって非常に充実したものになったと実感しております。

今後は博士論文に専念し、2010年3月の博士号取得を目指しております。博士号取得後は、内モンゴルでもとの職に復帰し、日本で得た成果を活かして、研究を引き続き進め、より多くの歴史の真相を究明していきたいと考えております。同時に、日本で学んだ歴史研究の知識と日本の文化を学生たちの教育に役立てるつもりです。また、国際シンポジウム、共同研究を通じての学術交流および文化交流にも微力ながら尽くしていきたいと思っております。

日本と中国をつなぐ歴史理解

エリック シ ッ ケ タ ン ツ
Erik Schicketanz



出身国：ドイツ

在学大学：東京大学大学院 人文社会系研究科宗教学宗教史学専攻

博士論文テーマ：近代中国仏教形成における日本仏教の影響

私は、ドイツ西部にある、オランダとベルギーとの国境沿いのアーヘンという町で育った。中学高等学校時代より異文化理解に対する強い関心を持ち、はじめ中近東の考古学者になりたいと考えていた。しかし、イスラエルでの発掘作業に参加するなどして、考古学の知見を深めるなかで、次第に、文化の遺構ではなく、むしろ生きた異文化と交流したいと考えるようになった。このように、欧米圏と異なる文化を学びたいという願望を強く抱いていたところ、偶然にも、弟の同級生の日本人学生と、研究でアーヘンに来ていた彼の両親と知り合い、ドイツにしながら日本文化の一端に触れる機会を得た。日本人や日本文化に接する中で、日本に対する関心が高まり、高等学校を卒業した後、ケルン大学の日本学科に入学した。ケルン大学では、副専攻として中国学を選択し、中国語の勉強も並行して行った。

いたいという動機が底流している。

博士課程卒業後は研究者として研究活動を継続することを希望する。ヨーロッパかアメリカか、就職先は未だ決定していないが、いずれの地であれその国とアジアとの架け橋を作る作業に貢献したい。また、今年4月から非常勤講師となったことで、若者に自分が得た知識と洞察を教えることの重要性を再認識した。研究のみならず、教育にも今後の活動の重点を置いてゆきたい。さらに、将来は専門領域に限った活動のみならず、講演や新聞記事等によって、自らの研究成果を一般社会に発信してゆきたいと考えている。

1997年から1998年まで京都教育大学に留学し、1999年からは引き続き上智大学で学んだ。その際、半年程どちらの大学にも所属しない期間が発生したため、これを中国語修練のためのよい機会と捉え、台湾に留学した。この経験は、その後の私の研究活動に大きな影響を与えることとなった。というのも、日本の旧植民地である台湾において、多くの日本文化からの影響の痕跡を直接目にしたことで、近代における中国文化圏と日本文化圏の交流に対する強い関心が生まれたのだ。その後、ロンドン大学で修士課程を終え、同大学の博士課程に入学したが、その過程で、アジア研究は、西欧の側から思弁的な考察を通して行われるべきではなく、むしろアジアの中からはなされなければならないという認識を強めた。このために私は、ロンドン大学の博士課程を中退し、東京大学に転学した。このように私の研究には、アジアを抽象的な学問の対象としてのみ見るのではなく、個人的に体験し、この体験を何らかの形で反映する研究を行

ウズベキスタン法制度への貢献を目的として

シェルマトフ ウルグベック
Shermatov Ulugbek



出身国：ウズベキスタン

在籍大学：明治大学大学院 法学研究科民事法学専攻

博士論文テーマ：将来債権譲渡担保の研究

私の専門は法律です。1996年に私の母国であるウズベキスタンの世界経済外交大学国際法学部に入学し、4年間、法律を勉強しました。日本の大学院で修士学位を取りたいと思い、2000年にJICAの奨学金プログラムに応募しました。修士課程では、国の経済発展と密接な関係のある民法をより深く学びたいと考えていましたので、留学先の国として経済的に発展した日本が非常に魅力的だと確信していました。さらに、以前から、映画を通じて日本の歴史や文化に興味を持っていたため、日本の大学院で勉強したい気持ちはとても強いものでした。そして、上述したJICAプログラムに合格し、ウズベキスタンの大学を卒業した直後、2000年9月に来日し、横浜国立大学大学院国際社会科学部で民法の研究をしました。修士論文は債権譲渡についてでした。2003年3月に横浜国立大学大学院を終了し、帰国しました。

帰国後、2003年にウズベキスタン法務省に採用され、法務省の経済法立法部で国の経済関連の諸法の整備を担当していました。法務省で仕事をしている間に、ウズベキスタンにおける債権譲渡（担保）、特に将来債権譲渡担保に関する法整備および研究が不十分だと痛感しました。そこで、修士課程で行った債権譲渡の研究を踏まえて、博士課程で将来債権譲渡担保の比較法的研究を強く希望していましたので、文部科学省国費留学生採用試験に応募し、合格しました。ウズベキスタン法務大臣の許可を得た上で、2005年4月に再来日しました。そして、横浜国立大学での研究生としての研究を経て、2006年4月に明治大学に入学しました。

現在、明治大学大学院法学研究科の博士課程でアメリカ法、ドイツ法、日本法およびウズベキスタン法を比較しながら、将来債権譲渡担保の研究をしています。具体

的に、研究の対象は、将来債権譲渡担保と国税債権の優劣、倒産処理手続における将来債権譲渡担保の取扱い、譲渡担保の目的となる将来債権の特定性、将来債権の移転時期などです。博士課程の4年目である今年は、ウズベキスタンと日本における将来債権譲渡担保に伴う諸問題の解決を提案する博士論文を完成させたいです。

博士課程終了後、ウズベキスタン法務省経済法立法部に戻りたいと思います。以前に、法務省で主として契約法および輸送と民営化の実施に関する法令と共に債権譲渡、債権譲渡担保を担当していました。法務省での復帰後にも以前と同様の法領域を担当すると思います。日本で行った将来債権譲渡担保の研究の結果はもちろん、民法全体について日本で得た知識や経験をウズベキスタンの法整備に活用したいと考えています。また、今後、実務家としての仕事と同時にウズベキスタンの大学の法学部で客員講師として研究活動も続ける予定です。

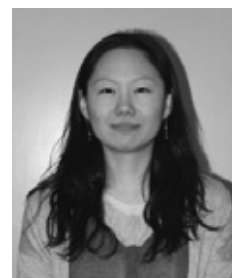
緑と共に歩む生活

ソン ジョンア
孫 貞阿

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院 農学生命科学研究科森林科学専攻

博士論文テーマ：マツノザイセンチュウの樹体内移動と宿主抵抗性との関係の究明



私はイチョウの紅葉や夜中に街灯に照らされて黄緑色に透けて見えるケヤキの葉などを眺めるのが大好きです。ソウル育ちの私はこのような自然にとっても癒されてきたので、樹木に対する勉強は楽しそうと思い森林専攻の学部に入りました。森林専攻の分野は広範囲で、勉強は難しいところもありましたが、面白いことがたくさんあり、その中の樹木の生理生態分野に対してもっと勉強したいと思いました。

クロマツ、アカマツまたチョウセンゴヨウは韓国人にとっては昔から生活に溶け込んでいた樹木で、木材を利用することはもちろん、葉を餅を蒸すときに使い、花粉をお菓子にして食べたり、実を直接食べたりします。また詩や絵の対象になることもしばしばありました。韓国ではこのように親しみ深いマツがマツ材線虫病により枯れていき、その被害範囲が急速に広がりつつあったので、その危機性を大いに感じるようになりました。マツ材線虫病の研究は、日本が長年の実績がありもっとも進んでいたのもので、日本への留学を決めました。

ちょうど私が留学を始めた2004年は、政府傘下の森林研究機関（国立山林科学院）でもマツ材線虫病の蔓延を防ぐために国を挙げて研究プロジェクトを立ちあげた年でもありました。国立山林科学院のマツ材線虫病研究グループでは、大学で森林昆虫、線虫、樹木病理、樹木生理などを専攻した人たちが研究を行っています。そこで私はこの研究を行うことの重要性をしみじみと悟り、一生懸命に頑張ろうと思っています。

今私は、マツに対するマツノザイセンチュウの攻撃とマツノザイセンチュウに対するマツの抵抗を明らかにするための実験をわくわくしながらやっています。結果は失敗に終わることも多く難しいですが、少しずつ見える

糸口をたよりに、全力を注ぎ込んでいます。

研究室で一緒に研究した、またはしている日本人と中国人、台湾人、タイ人、イラン人をはじめとして、寮に住んだ時の隣部屋のモンゴル人、ベトナム人と友達になったことにより、彼らの国はとても身近に感じられ、他人の国ではなく友達の国になりました。彼らまたはその国に対して少しずつ知ることができて、私にとって新しい世界がどんどん広がっていくことは、とても貴重な経験だと思っています。

博士号取得後はポスドクとして研究を続けながら、なるべく早く国に帰りマツ材線虫病研究に励みたいと思っています。またマツ材線虫病が急速に広がりつつある中国、台湾における研究にも貢献できればと思っています。

私が伝えたい異文化の見方

フェルトカンブ エルメル
VELDKAMP, Elmer

出身国：オランダ

在籍大学：東京大学大学院 総合文化研究科超域文化科学文化人類学専攻

博士論文テーマ：動物の「供養・慰霊」の変化を通して見た現代民俗社会の変容



私は、高校を卒業して大学に進学する時に、自分の知っている西欧の文化と全く違う地域で、同じ地球を歩いている人々の世界観について学ぼうと考えて、ライデン大学の日本学科に入学しました。学部在学中に、二回も日本に留学する機会が与えられました。最初に勉強を始めたころは、日本という国は遠くてエキゾチックな存在でありました。しかしこの二年の留学を通じて、映画に出てくる日本の伝統文化や旅行案内書に登場するステレオタイプだけでは、自国と日本との相違点・共通点を理解することができないことを痛感しました。

オランダの大学を卒業した後、自分がしてきた勉強は実は「外側」の視点に過ぎなかったことに気づいて、「内側」の視点を身につけようという目標で日本の大学院に進学することを決心しました。ヨーロッパと日本との間では、お互いの地域文化を一枚岩的なものとして捉える傾向がありますが、そのような先入観にニュアンスをつけるような役割を、学者としても追求していきたいと考えています。私の留學生活において日本政府から支援をいただいたこと、また東京大学の文化人類学研究室という、この目標を実現させるための研究環境に恵まれたことを常に感謝しております。

博士号取得後は、ヨーロッパと日本との間の相互理解を促進させる仕事がしたいと考えております。私は大学に入学してから研究一筋で生きてきましたが、今後の計画としては研究を続けながら東京大学の大学院で得られた知識と経験を新しい学生たちにも伝えていく予定です。

そのためにはオランダの大学で就職したいと思います。現在の日本学科の新入生の大半はマンガに惹かれて日本に興味を持つようになったそうですが、もう一歩踏

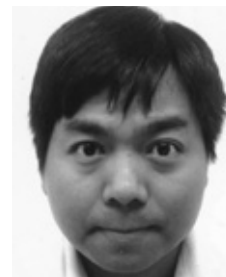
み入った関心を持ってもらいたいと思います。そのような一層深い理解のためには、私が日本で習ってきた民俗学の方法論、つまり日常生活を拠点にして社会の諸問題に取り組むアプローチが最も相応しいと思います。

最近のオランダの大学（特に日本学科）では、大学の法人化に伴って「商品としての知識」が強調され、経済や政治等、就職に有利な「実用的な」勉強が優先されています。ただし、実際に人々を動かしているものは、やはり日常生活環境に埋もれた文化なので、一般の人々の視点に立っての相互理解は極めて大切なことです。

博士号取得後は、留學中に積んだ経験と知識を活かしながら、ヨーロッパと日本との間における現実的な文化レベルでの相互理解・国際交流を進めていくのが、私の一番の目標になると思います。

ミャンマーのイエです

イエ チョウ トウ
Ye Kyaw Thu



出身国：ミャンマー

在籍大学：早稲田大学大学院 国際情報通信研究科国際情報通信学専攻

博士論文テーマ：アジアの音節言語共通のユーザーフレンドリーな携帯機器への文字入力インターフェース

はじめまして。ミャンマーのイエ チョウ トウと申します。ミャンマーでは姓と名を分けないので、名前をお呼びいただく時は「イエ」でも「イエ チョウ」でも「イエ チョウ トウ」でも構いません。

現在、早稲田大学大学院国際情報通信研究科の博士課程に所属しています。今後、アジアの発展途上国でも携帯機器が普及すると考え、小さな画面で少ないボタンを使い、子供やお年寄りも簡単に使えるユーザーフレンドリーなキーボード・マッピングと文字入力方法を研究しています。

私は、本を読むこと、知識を得ることが好きです。学会発表などで海外へ行く機会がありますが、いろいろな国からの参加者と知り合い、新しい考え方や文化を学ぶことは大変楽しいです。武道にも興味があり、ミャンマーでテコンドーの選手として活動していたこともあります。来日してからは合気道を習っており、週末は近所の道場で子供に教えています。私の長所は、何事にも積極的に取り組むこと、そして1度目標を決めたらそれを達成するまで決してあきらめないことです。また、異なる文化や習慣を受け入れ、理解しようと努力します。

子供の頃、私の父は船乗りとして度々日本を訪れていました。日本人は親切で勤勉で信頼できると父から聞き、日本に対して憧れを抱いて育った私はいつか日本へ行きたいと夢見ていました。そして、2002年に財団法人国際情報化協力センター（CICC）のコンピュータ研修で初めて日本を訪れました。その際、日本の最新の情報通信技術に感銘を受け、アジアで最も携帯端末の研究に力を入れている日本に留学したいと強く願うようになりました。ミャンマーに帰国後は日本語を学び、2003年に再び来日して日本語学校に通い、翌年から修士課程に進学

し、現在は博士課程で研究を続けています。

博士号取得後は、日本の大学でヒューマンコンピュータインタフェースについて教えることを希望しています。同時に、この分野に関する研究を続け、障害者 - 障害者間、健常者 - 障害者間の国際コミュニケーションの発展に貢献したいと考えています。たとえば、ミャンマーと日本の手話は異なるので、ミャンマーの手話を日本の手話に通訳するシステムを開発してコミュニケーションの円滑化に役立てたいです。

また、日本の学生生活、食文化、合気道などに関する本をミャンマー語で書き、私の経験をミャンマーの人々に伝えたいと思っています。

将来的には、日本で得た知識をミャンマーに持ち帰り、国の発展に貢献したいです。ミャンマーにはまだ私立大学がないので、ミャンマー人のために私立コンピュータ大学を設立することが私の夢です。

どうぞよろしくお願い致します。

自分探しの旅

しゅ りん
朱 琳



出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院 法学政治学研究科アジア政治思想史専攻

博士論文テーマ：内藤湖南と梁啓超における中国史像の比較—歴史観と政治観との間—

大学院を出て二年間社会人としての経験を積んだ後、2005年4月に、私は留学することを決意し、仕事をやめて日本に旅立ちました。

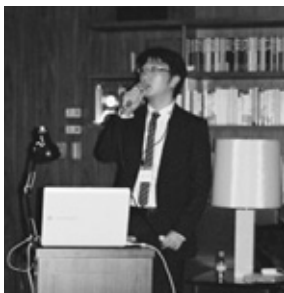
仕事をやめて留学に至った動機は、大きく言えば、人生の目標というものを見つめ直してみたいと思ったことです。大手出版社での安定した給料、与えられた仕事をこなす日々は、それなりの充実感も得られていましたが、「いったい何をしたいのか」と自問すると、はっきりとした答えを出せない自分がいたのも事実でした。考えてみれば、そのとき、研究が好きな私には、やはり優れた研究者になりたい、そのため、自らを育てる時を逸したくない、という気持ちが多少あったのかもしれない。

日本留学をきっかけに、「中国から見る日本」と「日本から見る中国」という二つの視角の必要性和重要性を、いっそう強く意識させられました。日本に来る前に、自分なりの中国理解、いわば「自己認識」を持っていたわけですが、留学することは様々な意味において、日本という「他者」を通じて、かえって中国についての新たな発見をもたらしてくれました。留学の意味は、簡単に言ってしまうと、自分を磨くこと、そして相対化の視点をもつことにあるだろうと思います。自分と異なる言語、文化を持つ人々と接し、その社会で暮らす中で、内側と外側の両方の視点——複眼的に物事を考えるようになり、何か問題にぶつかった場合に、「彼らならどう考えるだろう」というように、別の「眼」ができるのです。留学と同じく、およそ外国研究にも、こういう「自己—他者」間の認識・理解の課題が最も本質的に含まれているでしょう。20世紀初頭、中国の多くの若者は留学先を日本に決め、日本で吸収した新しい知識をいち早く母国に発信しました。地理的にも心理的にも一定の距離を置き自国を眺めることによって、彼らは日本文化を視野に収

めると同時に、自らの果すべき使命を痛切に感じたのでしよう。背景が異なろうが、時代が変わろうが、留学生はつねに真摯な愛国者であると同時に、冷徹な文明評論家でもあります。これこそ留学生の立場であり、少なくとも自分がそうなりたいと思っているものです。

博士号を取得したら、帰国するか、それとも日本で就職するか、とよく聞かれます。私の答えは、日本にしようが、中国に帰ろうが、世界のどこにいても、自分の本当にやりたいことをしながら、留学経験を生かして二つの文化の架け橋になることができれば最も理想的、ということ。博士課程に進学したとき、ある先生から次のような言葉が贈られました。「自分が本当にやりたいと思う分野が長続きする分野です。すぐに研究者になれるとか、就職できる分野はほとんどありません。けれども、十年間一つの分野をやれば、必ず専門家になります。これだけは間違いありません。就職は「運」や「偶然」によります。しかし、十年間辛抱できれば、必ず自分に「運」がめぐってきます。」とても深くてよい話です。微力ではありますが、私の日本への理解と中国を愛する気持ちが、お互いの国、大げさに考えなくても、お互いの国の人々に何かの希望をもたらすことができると信じています。

□ 研究発表の 2008 奨学生の皆さん
(上段より、左から右へ次ページ発表順)



□ 来賓挨拶



東京大学大学院工学研究科教授
金子成彦先生



亜細亜大学アジア研究所教授
小林熙直先生

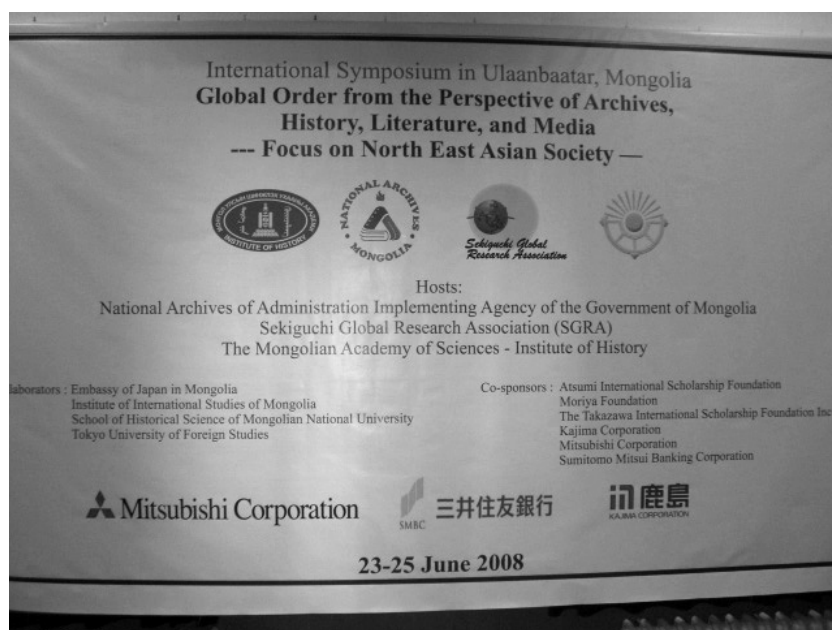


東京電機通信大学
広田貞雄様

モンゴルの伝統文化と草原を見学するための小旅行に出かけた。

SGRAは、これまで日本とアジア諸国で多くの国際会議を企画実施していたが、今回のシンポジウムは、同研究会が初めてモンゴルで実施したプロジェクトであった。この国際シンポジウムは世界各国の研究者の国際交流の促進や若手研究者の育成の面で重要な役割を果たした会議であったと思う。私は今回のシンポジウムに渥美

国際交流奨学財団の学会旅費助成を受けて、現在滞在先のアメリカから参加することが出来た。この場を借りて、シンポジウムに参加する機会を与えて下さった渥美国際交流奨学財団に深く感謝を申し上たい。



一年前のHBM大会で知り合った、アメリカのIllinois大学に在籍しているTse Chun-YuさんとドイツのOsnabrueck大学で博士号を取ったばかりのChow Ho-Mingさんと再会しました。私達三人は同じ香港出身で、香港の大学から修士号を取った後、海外に渡って外国の大学院の博士課程に入り勉学・研究したという経験が共通しています。一年前のシカゴ大会期間中、三人はよく話し合い、留學生活、仕事情報、異文化交流など話題が尽きませんでした。今回の大会期間中にもよく夕食を取りながら、各自の近況を語り合いました。来年の学会でまた会うことを約束しました。

メルボルンに住んでいるVincent Fokさんは、中学校時代の先輩です。私は中学校一年生からサークルの一つである天文研究会に入りました。Fok先輩は私より3つ上の四年生で（香港の教育制度はイギリスのシステムを採り、中高一貫性の七年制）、天文部の会計係を担当していました。普段の活動や合宿などの機会を通して、先輩から天文学の知識を習いました。やがてFok先輩は家

族と共にオーストラリアに移住しました。私は六年生の時、天文部の部長を務めることになり、Fok先輩から手紙をもらっていくつかのノウハウを教えてくれたことは今もよく覚えています。今回はFok先輩と15年ぶりの再会になりました。互いにすでに30歳を超えましたが、楽しい中学校生活は今も心に残っています。

学会が終わった後、私は足を延ばして、シドニーに行きました。Australian School of BusinessのChris Carter教授とお会いしたかったのです。Carter先生は私の修士課程の時の指導教員で、香港科学技術大学で10年間教えていました。私は2000年から2002年まで香港科学技術大学に在籍し、Carter先生と共に多変量データの解析について研究を行いました。5年ぶりになる今回の再会は、互いの近況を報告し合い、先生から大変貴重なコメントを頂きました。

今回の学会もまた忘れ難い、充実した旅でした。ありがとうございました。

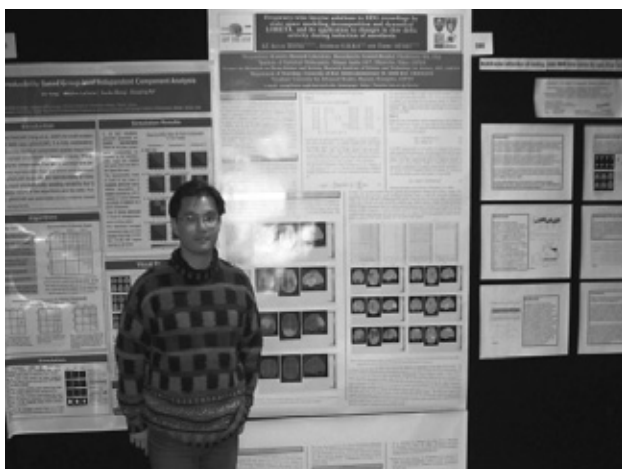


写真1：ポスター発表



写真2：定藤先生、藤井猛さんと私



写真3：Fok先輩と私



写真4：学会の会場とその近所

モンゴルシンポジウムに参加して

マンダフ アリウンスাইハン

Mandah, Ariunsaihan

博士（地域社会学） 一橋大学

（在米カンザス）

2002 年度 奨学生

ウランバートル市の南部にそびえ立つ山はボグダ・ハン山と呼ばれている。世界最初の自然保護地である。この山はウランバートル市のどこからでも見える。秋になると山一面が金色に輝き、冬になると雪に覆われて真珠貝のように光って見え、春には雪が解けて薄黒くみえるが、夏になると山一面が緑になる。多くのウランバートル市民は、ボグダ・ハン山の景色を眺めながら四季の移り変わりを楽しんでいる。例年5月初め頃から雨が降り始めると、薄黒く見える山の風景は、見る見るうちに色を深めて青緑色になる。そして、モンゴルの子供の日である6月1日にウランバートル近郊に点在する夏の子供キャンプが一斉にオープンし、夏休みがいち早く始まった小学校の生徒を迎える。

しかし、近年の地球温暖化の変化はモンゴルの季節にも大きな影響を与えている。昨年の夏は、6月中旬になっても雨がまったく降らず、ボグダ・ハン山も雨の降るのを待ちきれないウランバートル住民の気持ちを案じているかのように暗い顔をみせていた。待ちに待った恵みの雨は6月20日頃から降り始め、降ったりやんだりしながら一週間も続いた。この雨の降り続くウランバートルで2008年6月24日から25日にかけて、関口グローバル研究会（SGRA）、モンゴル国文書管理局、モンゴル科学アカデミー歴史研究所、モンゴル・日本センターの共催により国際シンポジウム「アーカイブス・歴史・文学・メディアからみたグローバル化のなかの世界秩序—東北アジアを中心に—」が開催された。今回のシンポジウムには、モンゴル、日本、ロシア、ドイツ、韓国、オーストラリア、中国など8カ国から研究者約50名が参加し、「メディア・アーカイブスからみた北東アジア社会秩序の形成：過去・現在と課題」、「北東アジア文学の中の社会像・世界像」、「アジア主義論からアジア共同体へ」、「北東アジア地域アーカイブス情報の資源化とネッ

トワークの形成にむけて」の4つのセッションに分かれて発表した。

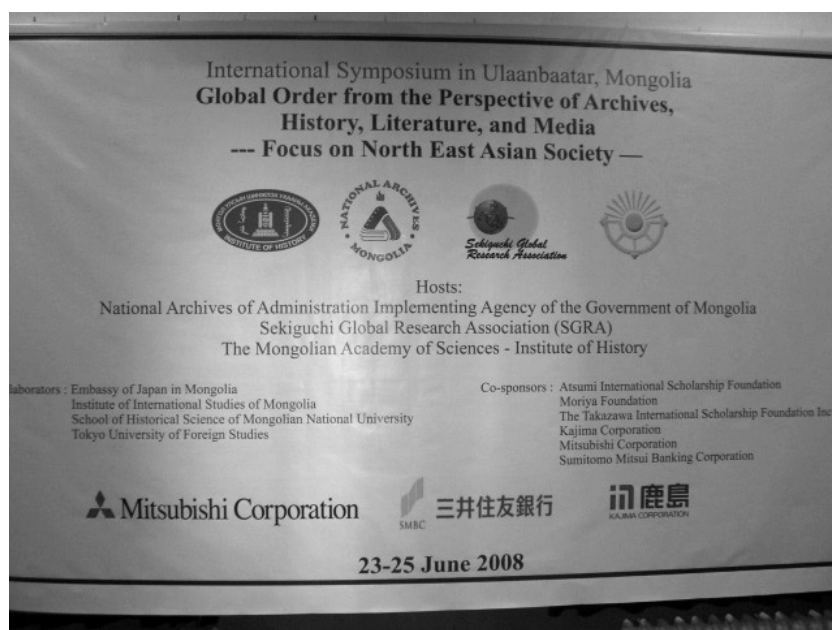
シンポジウムは6月23日に、ウランバートルのモンゴル・日本センターで開会式が行なわれ、午前中はモンゴル国法務・内務大臣ムンフオルギル、在モンゴル日本大使館の小林弘之参事官、SGRA代表の今西淳子らの来賓や参加者による祝辞のあと、6名の著名な研究者による基調講演があり、午後には各国の研究者が上述の4つのセッションに分かれて研究報告を行なった。私が参加した第一セッションは、国立文書館で行なわれ、10名の研究者による東アジア地域の歴史、社会、文化に関する貴重な研究報告がなされた。私の場合は、最近の研究成果として、「日ソ中立条約とモンゴル」を報告した。本研究はモンゴル、日本、ロシアにおける近年の史料調査に基づくもので、日ソ中立条約がモンゴルの国際的地位の向上に果たした役割についてモンゴル側の視点から分析しようと試みたものであった。

シンポジウム最終日の午前中には、モンゴル日本センターで閉会式が行なわれ、まず各セッションの司会者による研究報告に関する成果報告が行なわれ、その後、モンゴル国文書館管理局のウルズィバートル局長により会議全体に関する総括がなされた。同局長は、今回のシンポジウムにおいて、北東アジア地域の歴史、文化、経済に関する多くの貴重な研究報告が行なわれたことを強調し、今後会議の成果として研究者の報告書を一冊の本に取りまとめることの必要性を述べていた。閉会式終了後の午後には、文書館で展示中の歴史写真展を見学した。歴史資料販売コーナーでは、近年モンゴルで出版された貴重な歴史資料集、本などを買い求めることが出来た。この後、会議参加者はスフバートル広場のモンゴル政府兼国会議事堂前のチンギスハーン像の前で記念写真を取った後、

モンゴルの伝統文化と草原を見学するための小旅行に出かけた。

SGRAは、これまで日本とアジア諸国で多くの国際会議を企画実施していたが、今回のシンポジウムは、同研究会が初めてモンゴルで実施したプロジェクトであった。この国際シンポジウムは世界各国の研究者の国際交流の促進や若手研究者の育成の面で重要な役割を果たした会議であったと思う。私は今回のシンポジウムに渥美

国際交流奨学財団の学会旅費助成を受けて、現在滞在先のアメリカから参加することが出来た。この場を借りて、シンポジウムに参加する機会を与えて下さった渥美国際交流奨学財団に深く感謝を申し上たい。



第 37 回国際実験血液学会および 第 6 回国際新生児血液及び免疫学会 参加報告

き きんぼう
奇 錦峰

博士（医学）東京医科歯科大学

広州中医薬大学（在中国・広州）

2001 年度奨学生

2008 年 7 月 9 日から 12 日まで、私は渥美国際交流奨学財団（博士号取得者）の海外学会派遣プログラムの援助を受けて、アメリカの Boston で開催された“第 37 回国際実験血液学会および第 6 回国際新生児血液および免疫学会”（2008 ISEH and Neonatal Hematology and Immunology Meeting）に参加しました。

この二つの合同学会には世界各地からおおよそ 500 人の参加者（医者、研究者、および医科大学の院生）があり、講演、ワークショップおよびポスターの形で各自の最新の未発表の研究結果（血液と幹細胞 / stem cell）を発表し、交流しました。わたしは自分の血小板関連の研究結果をポスターの形で発表しました。

今回の学会は、膨大な医学の分野の中のほんの一部である、血液学、新生児血液学、および免疫学に関連する専門学会でしたけれど、細かいところまで議論していくとさらに以下のような多数のトピックに分かれていました。

- 1.ISEH: Developmental Hematopoiesis and Immunology
- 2.Neonatal: Developmental Hematopoiesis
- 3.ISEH: Leukemogenesis
- 4.Neonatal Immunology
- 5.Neonatal Immune Defense Systems
- 6.Neonatal: Mucosal Barrier Defense Mechanisms
- 7.ISEH Young Investigators' Session: Nurturing Your Inner PI
- 8.ISEH: Biology of HSCs
- 9.Neonatal: Immune-Related Neonatal Injury

- 10.Neonatal: Hematology, Coagulation and Thrombosis
- 11.ISEH: Biology of Erythrocytes
- 12.Neonatal: Biology of HSCs
- 13.Neonatal: Inflammation and Autoimmunity
- 14.ISEH: Hematopoietic Niche (Point-Counterpoint)
- 15.Neonatal: Hematology and Coagulation
- 16.ISEH: Leukemia and Leukemic Stem Cells
- 17.ISEH: Lineage Commitment
- 18.Neonatal: The Pathophysiology of Platelets
- 19.Neonatal: Translational Studies and Infectious Disease
- 20.ISEH: Epigenetic Regulation of Hematopoiesis
- 21.Neonatal: Unexpected Mechanisms of Pathogenesis
- 22.Neonatal: Oral Concurrent Presentations
- 23.ISEH: Oral Concurrent Presentations

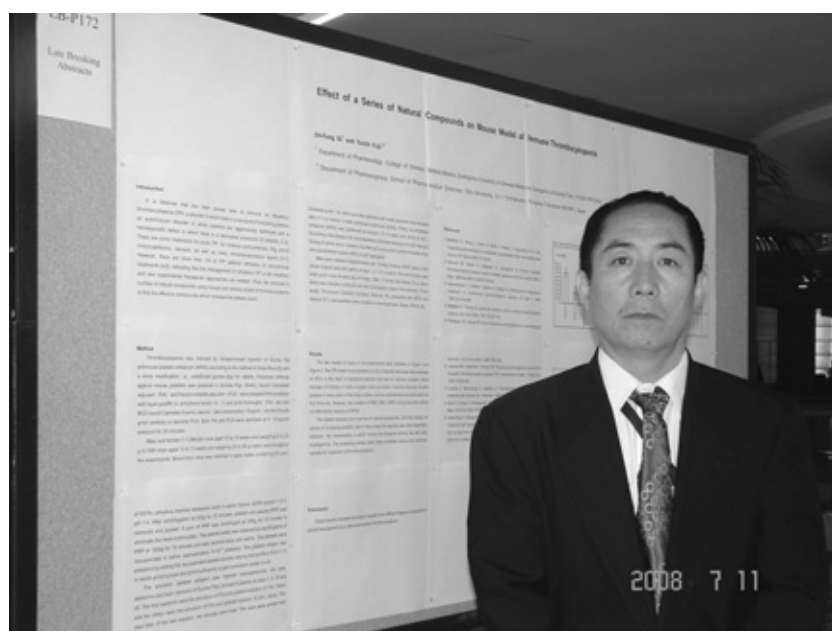
今回の学会で一番中心になっている研究は、やはり分子生物学関連のものでした、つまり、分子生物学の理論と技術があらゆる学問に取り込まれ、生命学がますます進んでいるのがよく感じられます。その中でとりわけ印象的だった研究は、Zebrafish (*Danio rerio*) という魚が、今、人間のいろいろな病気、特に血液関係の病気、さらには器官発生学（細胞増殖、分化）、遺伝子学（変異）などの研究に最も適した動物モデルになっているというものでした。というのは、この魚は、受精した 1 日目で人間の 1 ヶ月目にあたる胚を有し、早期発育の中枢神経系、内臓器官、血液及び循環系、視学系などが分子レベルでいうと、その 85% が人間に似ているといわれているからです。

学会の後、世界トップレベルの大学：Harvard University, Massachusetts Institute of Technology, Yale

University 及び Boston University を時間をかけて見学しました。これらの大学の学習と研究の雰囲気に感動しました。

一言で言うと、アメリカは想像していたものと大分外れていた！

旅行中に印象的だったことは、走っている車の六割が日本車、商店街で販売している衣類の六割が Made in China、ボロボロの地下鉄、古くなっている町（特に New York, Boston, Washington のような大都市）……、それから食べ物の種類が少ないものの、肥満者（always take Junk food ?）の多いこと、びっくりしました。



「ウズベキスタンの韓流ブーム」

ヒョン スンス
玄 承洙

博士（地域文化）東京大学
国会議員李相得政策特別補佐官
2006 年度奨学生

今年の7月、ウズベキスタンに行ってきた。今年の4月まで私が勤めていた韓国外語大の中央アジア研究所とウズベキスタンの識者グループが夏に共同でセミナーを開くことになっていたため、夏の休暇を利用してウズベキスタン入りをしたのである。セミナーはタシュケントにあるウズベキスタン国立大学の一室で行われたが、それほど密度のある学術交流とまではいえず、少し気の抜けた感じのものであった。私は中央アジアのイスラーム、特にイスラーム原理主義や過激派、テロリズムなどを専門にしているが、現地ではこれらの話題を口にすること自体が禁忌とされたため、がっかりした。また、ウズベキスタン大統領の宗教政策の成功事例ばかりを羅列する向こう側の学者たちには正直あきれたものである。しかし、セミナーが終わってからはウズベキスタンの主要都市を周りながら、自分なりのフィールドワークができたことを感謝している。コースは首都タシュケントからブハーラ、サマルカンド、ヒーヴァとウズベキスタンの中央部と南西部を一周するルートであった。摂氏40度を越える酷暑のなかを、クーラーもついていない小型車で毎日6時間以上走るといったハードな旅程であったが、現地のモスクを訪問しイスラーム教徒たちの素直な声を聞くことができた。

ところで、いまだ韓国では「ウズベキスタン」というと、「あ～ウクライナね」という返事が返ってくることが多い。せめてウズベキスタンという国名を正確に言える人も、十中八九はあの国がどこにあるのかよくわからない。「スタン」で終わる国は貧乏な国、イスラーム色が強い国、どこか怖いイメージがするという人も多い。韓国ではあまりウズベキスタンのことは知られていないのである。

だが、ウズベキスタンでは事情は正反対である。まず首都タシュケントをはじめあの国のほぼ全域で道路は韓

国車で溢れかえっている。今韓国では没落した財閥企業の代名詞となっている「デウ」の車である。デウはソ連邦崩壊後、ロシアの支配から抜け出して新しい独立共和国を創り始めていた中央アジアのスタン五カ国に速やかに進出を図った。なかでもウズベキスタンでデウの活躍は目覚しく、現地に自動車工場をつくるまでに成長した。その結果、ウズベキスタンで走る自動車の約9割はデウの車が占めるようになった。しかし90年代末、デウ自動車は破産してしまった。海外で無理に事業を拡張していたことが原因とされる。ウズベキスタンで稼働していた自動車工場も閉鎖される危機に直面した。幸いにも、ウズベキスタン政府がこれらの工場を買い入れたおかげで、工場は運営を続けることができた。ただ、もはやそこで作られる車はデウ製ではなくなった。ブランドはデウであってもウズベキスタンの車である。しかしウズベキスタンの人たちはデウが韓国の車だということをみんなよく知っている。それゆえ、タクシーに乗ったら運転手から韓国車の褒め言葉で耳が痛くなることを覚悟しなければならない。

またウズベキスタンで「韓流」を実感することもできた。旅行中現地の市場でぶらぶらと歩くことが大好きな私であるが、市場にいったら現地の人々から「ジュモン」という言葉でよく声をかけられた。最初はそれが何を意味するのかわからなかったが、ある子供が写真を見せながら「ジュモン」、「ジュモン」と言った途端、それが昨年韓国で大人気を集めた時代劇のタイトルだということがわかったのである。事情はこの国の最西端にある古都ヒーヴァでも同じである。そこで偶然出会った現地の大学生は『ジュモン』は子供向けの幼稚なドラマだが、ベ・ヨンジュン主演の「冬の恋歌」は秀作だ。あのドラマはウズベキスタンでもう6回も再放映され、その度に視聴率は60パーセントを記録している。僕もあのドラマを

観てから人生が変わったんだ。必ず韓国に行く。」とまで言ったのである。日本でもヨン様ブームを巻き起こしたあの「冬ソナ」のことである。

ウズベキスタン第二の都市でこれまたシルクロードの古都でもあるサマルカンドでは街のいたるところで韓国語が聞こえてくる。それも現地の商人が客引きをするために片言で話す韓国語ではない。すばらしい発音とイントネーションはもちろん、今韓国で流行っている流行語なども混じった流暢な韓国語である。彼らに聞くと、韓国で3年以上働いた経験のある人がほとんどである。実はいま韓国ではウズベキスタンから出稼ぎに来ているウズベク人労働者が非常に多い。彼らのほとんどはソウル周辺の工場などで働いているが、3年くらい働くと結構大きなカネを稼いで国に帰ることができるという。さらにウズベク人女性が韓国人男性と結婚して韓国で住み着くケースも増えているようである。この国では韓国は夢を実現する地として知られているらしい。

こうした韓流ブームには、当然であるが、問題も付きまとう。ウズベキスタンにはあまり興味を示さない韓国

人だが、例外の人たちがいる。キリスト教の猛烈信者たちである。夏の観光シーズンになるとソウルからタシュケントまでの航空便がよく満席になったり、チャーター便ができたりするが、それはウズベキスタンに行く韓国人のキリスト教宣教団が急増するからだという。韓国の大型キリスト教会は、だいたい、中央アジア、なかでもイスラーム色の最も強いウズベキスタンで活発な宣教活動を展開している。彼らが現地で様々な問題を起こし、現地警察に摘発されて追放されるケースも増えているという。真偽のほどは確かではないが、ウズベキスタンのイスラーム・カリモフ大統領がつい最近「もうこれ以上、ウズベキスタンを外来宗教のゴミ捨て場にはさせない」と警告したようであるが、それは韓国の宣教団に当てた警告であるらしい。アフガニスタンでも韓国人宣教団がターリバーンに人質にされ物議を醸した事件があったが、同胞たちの自制を願いたい。

今回のウズベキスタン滞在は渥美財団からの支援金があったからこそ可能であった。この紙面を借りて感謝を申し上げる。



イスラーム神秘主義教団ナクシュバンディーヤの創設者ナクシュバンディーの聖廟



イマーム・ブハーリ神学校（タシュケント）



サマルカンド

中国の教師教育国際シンポジウムに参加して

そう
臧 俐

博士（教育学）東京学芸大学

東海大学短期大学部准教授

2003 年度奨学生

2008 年 10 月、中国全国教育学会主催の第 2 回中国教師教育国際シンポジウムに参加した。開催地は中国の安徽省南部にある安慶市であった。安慶市は上海や南京から見て西南の方に位置する地方都市で、交通の便があまり良くなかったこともあり、最初は参加するかどうか迷っていた。だが、シンポジウム開催地引き受け側の安慶師範学院の先生からの熱心なお誘いを受け、また同時に渥美国際交流奨学財団の海外学会派遣プログラムからご支援をお願いすることができたので、このシンポジウムへの参加を決断し、安慶市への旅へ出発することができた。上海空港から合肥へ、合肥空港から安慶へと飛行機を乗り継ぎ、安慶空港到着後は車で 3 時間もかかってやっと開催大学である安慶師範学院に辿り着くという長い旅路であった。

しかしながら、今、振り返ってみると、このシンポジウムに参加してよかったと思っている。

今回の国際シンポジウムには、中国全土の師範大学をはじめ、アメリカ、日本、フィンランド、トルコ、モロッコ、台湾などの国と地域の教員養成大学および教師教育関連機関から多数の参加者が集まった。そしてそこでは共通の課題である「教師の総合的資質能力及び実践的指導力の向上」(Cultivation of Teachers' Comprehensive Quality and Their Ability for Practice) を主題として多角的な視点から貴重な研究発表が行われた。具体的には、1「師範大学の整備と発展」、2「教師の専門的資質能力の向上」、3「基礎教育分野における改革と展望」、4「師範大学における教育指導システムの改革」、5「教師教育における国際動向」という 5 つの分野に分けて進められた。わたしは「教師教育における国際動向」の分野において、「日本における教員の初任者研修政策」をテーマに発表をした。このシンポジウムを通して、中国の教師教育、そして中国と日本以外のいろいろな国の教師

教育の動向を把握することができたことは本当にいい勉強になった。

また、今回はわたしにとっては改めて「日本」を感じることとなったシンポジウム参加でもあった。初日の開会式は盛大に行われた。というのは、今回のシンポジウムが安慶師範学院の創立 110 周年記念式典に合わせてあったので、総勢 4～5 千人が開会式の会場である同大学の新しいキャンパスの広い運動場に集まった。会場は人の海であり、その海の中に点々と開会式参加者の所属部門が書かれた鮮やかな旗がそよ風の中、静かにきれいに翻っていた。主催者も開会式参加者も意気軒昂のようであった。会場の正面には一段高くひな壇が設置され、司会者や来賓である国家教育委員会の高官、関係師範大学の学長、地元の政治家などが座った。わたしたち海外からの参加者も来賓席の最終列に案内された。私は唯一日本からの参加者であり、中国人でありながら海外学者扱いであった。わたしにとってこのような貴賓扱いは正直に言うと恐縮であった。意外に思ったのは、「日本からの臧俐博士」と紹介されて丁寧にお辞儀をした私に会場から大きな拍手が寄せられたことであった。その拍手は、「日本」からの参加者に対する歓迎の意味なのか、それとも他の国の参加者のあっさりした挨拶と違う「日本式」の丁寧なお辞儀に対する好印象の表れなのか理由は分からないが、少なくとも「日本」に対して会場の人々の反応が良かったのは事実であった。それを感じた私は正直ほっとして非常に嬉しかった。

夜の懇親会の席上でも「日本」を感じることにしきりであった。中国式のテーブルを囲んで、アメリカ、フィンランド、トルコ、モロッコの方々と名刺交換をした時に、わたしの「I'm from Japan」という声にみなさんは非常に積極的に友好的な表情を表した。そして、意外なこと

に、「Your Chinese is very good!」との褒め言葉に対してわたしが「日本の大学に勤めているが、中国人です」と説明した後も、みなさんはわたしの状況に納得しながらも話題を日本のことから別のことへ移そうとはしなかった。話題は日本武士のイメージからアニメのこと、秋葉原・渋谷の若者文化などへと移り、話は延々と続いた。私はつくづく世界の人々の日本に対する興味関心の強さを感じた。

日本の大学に勤めている私のような外国人は、学会などで祖国に帰ったり他の国々に行ったりする度に「Japan」を背負って行くわけである。わたしは自然に日本に対する他の国の人々の印象を気にしてしまう。特に日中関係では、なにか問題でも起こっている時期には中

国の人々の態度が特別に気に掛る。そのような中で、今回のシンポジウムに際して、意外に中国の人々が日本に対していい印象を持っていたこと、そして世界の他の国の人々が日本に対して強い興味関心を持っていることを知り得たことは、わたしにとってこのシンポジウム参加のもう一つの大きな収穫であった。

今回のシンポジウム参加を通して得たものを大切にして、今後の教育と研究にぜひ生かしたいと思う。

エコバランス国際会議参加報告

かん ぐんこう
韓 珺巧

博士（工学） 早稲田大学

Lawrence Berkeley National Laboratory 研究員

2005 年度奨学生

2008 年 12 月 10 日から 12 日にかけて、東京ビックサイトで開催された第 8 回エコバランス国際会議に参加しました。この国際会議は、1994 年以来 2 年ごとに開催され、ライフサイクルアセスメント (LCA) を核とし、製品、技術、組織の環境パフォーマンス評価、評価結果の情報開示、その手法の開発と実践に関する討論の場として、世界の中心的役割を担ってきました。今回は、エコバランスに関する様々な手法開発とエコイノベーションに向けた実践を重点テーマとし、採用された論文は約 265 件、ポスターが約 150 件でした。世界中からきた参加者は約 800 人とされています。私はエネルギーおよび資源節約先進技術というセッションに参加し、大規模オフィスビルにおける自動化された需要反応実施結果について発表しました。

電力自由化は電力ユーザ、発電及び電力供給会社に複

数の選択肢を与え、電力コストの削減、電力設備の効率的利用を促し、世界の主流となってきました。私の発表は電力自由化された市場における電力ユーザが電力の供給状況や経済インセンティブに応じて、需要量を臨時的に調整することにより、電力供給の安定及び電力需給システムの効率を高めると同時に、電力インフラの整備が最適化し、電力料金の上昇を防ぐことを実現するという研究でした。この研究は、自由化市場に移行している日本に貢献できると期待しています。

また、ドイツ大学の教授ならびに、日本ライフサイクルアセスメント界で名高い吉川廣和先生による、資源の循環利用、ゼロエミッション型社会インフラの実現など大変興味深い基調講演を聴きました。私は、今まで、エネルギーに関する研究をしてきましたが、エネルギー或いは省エネがどのように環境に影響を及ぼすか定量的に

解析したことがありませんでした。今度の学会で、定量化した環境評価の方法論を勉強しました。私の将来の研究に非常にプラスになると思います。

今回の学会は私が博士号を取得した後初めての国際会議でした。日本を再び訪問するのも久しぶりでした。会議前後の時間を活用して、大学院時代の恩師、先輩、同期及び友達を訪問し、研究や生活近況等について話しました。皆さんが各自の分野で自分の目標に向かう頑張っている印象を深く受けました。

米国経済が悪化している最中に、渥美財団のおかげで、今度の国際会議に出席し、日本の友人を訪問することができましたことを、心から感謝しています。



AISF ネットワーク

■ラクーン会	 56
■第8回日韓アジア未来フォーラム 「日韓の東アジア地域構想と中国観」	 64
■第3回 SGRA チャイナ・フォーラム 「一燈やがて万燈となる如く」 ～アジアの留学生と生活を共にした協会の50年～	 66
■関口グローバル研究会（SGRA）	 69

2008 年度ラクーン会レポート

常務理事 今西淳子

■ラクーン会 in ボストン

2008 年 4 月 2 日、快晴のボストン。ラクーン会は午後のダックツアーから始まった。ボストンの中心部を廻る 90 分間の人気ツアーだ。ツアー参加者が乗っている車は第二次世界大戦時に使われていた水陸両用車を改造したもの。午後 3 時、ラクーンたちは星条旗風に彩られたダックに乗り科学博物館から出発した。運転手を兼ねているガイドさんは、ユーモアな口調でボストンの歴史、とりわけ 200 年間の変貌を語ってくれた。ラクーンたちはアヒルの声を模してガーガーという声をかけてツアーを楽しんでいた。

そして夕方に、ラクーン会はリーガルという海鮮レストランでの食事会に移った。ホストはニューヨークからわざわざ駆けてきた今西淳子さん。ラクーンの皆さんがテーブルに揃ったのは午後 8 時ごろ。参加者の顔ぶれは、喬辛さん（96 狸）、王岳鵬さん（97 狸）とご家族（陳潔さん、王匯成ジェームスくん、王匯麗ジュリーちゃん）、孫艶萍さん（98 狸）と同伴の Mitchell Albert さん、林泉忠さん（00 狸）、そして王健欽ケビン（05 狸）。サラダやシーフード風の前菜に続き、メインディッシュはロブスター。スチームかオープン焼か選べる。



美味しいロブスターに加え、面白い話題もいろいろ。日本経済の低迷問題、インドの自動車会社の買収の動き、サブプライム問題、アメリカでの不動産売買といった経済の話題から、台湾の総統選やアメリカの大統領選、チベット問題そして中東問題のような国際政治関連の話まで、さらに生活に関わる食品安全問題、新車種、新型携帯電話など、楽しい会話は他のお客さんがほとんどいなくなった 11 時過ぎまで続いた。駐車場でさようならの挨拶を経て、今回のラクーン会が幕を閉じた。またいつか集まりたい。

（文責：王 健欽）

■韓国ラクーン会 in ソウル（2008 年春）

2008 年 4 月 19 日、夕方 6 時、ソウルの中区にある南浦麵屋で韓国ラクーン会（KSR）が開かれました。

渥美財団常務理事の今西淳子さん、李来賛さん（KSR 会長、96 狸）南基正さん（96 狸）洪京珍さん（99 狸）高熙卓さん（00 狸）李炫瑛さん（01 狸）朴栄濬さん（02 狸）蔡相憲さん（03 狸）韓京子（KSR 幹事補助、05 狸）玄承洙さん（06 狸）の 10 名が集まりました。



40 年の歴史のある平安道料理のお店で店内には李明博大統領、鄭夢準議員、呉世勲ソウル市長などの色紙が飾られていました。個人的にはこのお店の名物でもあるドンチミという大根の水キムチが大好きです。店内には漬けた日にちが記された甕が地中に埋められています。今回の料理は菊池寛が平壤で食べて絶賛したという鍋料理オボックジェンバン（於腹／魚腹鯨盤）です。真鍮のお盆のような平たい鍋に牛肉のタン、お乳や胸部のお肉、野菜などを煮て食べる料理です。名の由来には諸説あり、その説によって字も於腹だったり、魚腹だったりします。

今回は李大統領の日本訪問前日という時期で政権交代の話題や、今年度から奨学生を韓国現地から直接選抜することなどについて話し合いました。

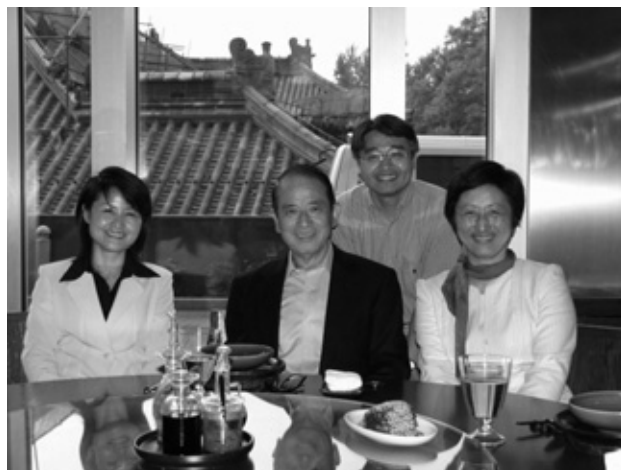
帰宅してから思ったのですが、せっかくすぐそばが清溪川だったのでライトアップされた清溪川をバックに記念撮影すればよかったです。ご存知とは思いますが清溪川は現大統領がソウル市長の時、長年コンクリートで覆われていた川を復元したものです。今やすっかりソウル市民の憩いの場となっています。

また 南基正さんや朴栄濬さんから、夏の恒例の SGRA フォーラム in 軽井沢へのお誘いがありました。ちょうど今話題のオリンピックがテーマということです。あつ〜いフォーラムとなりそうです。さっさと仕事を終わらせて、軽井沢で会いましょう。

（文責：韓 京子）

■ラクーン会 in 北京

2008 年 5 月 16 日、北京で中国ラクーン会が開かれました。渥美財団常務理事の今西淳子さん、趙青さん（96 狸）、孫建軍さん（02 狸）、朴貞姫さん（03 狸）の 4 名が集まりました。ラクーン会は、午後の喫茶会と夕方の



食事会の2部に分けて行われました。趙青さんは、第一部だけに参加しました。そして、第二部は渥美財団評議員の八城政基さんにご招待いただきました。

午後3時から4時半までは、北京大学・清華大学近くの万聖ブックカフェで今昔の感慨を語り合いながら話に花を咲かせました。夕方6時から8時半までは、北京の王府井にあるハイヤットホテル（北京東方君悦大酒店）で佳肴美酒（美味しい料理と美味しい酒）を交わしながら、世界情勢や日中関係や中国の素晴らしい発展や最近中国で起きたさまざまな自然災害・突発事件などについて話し合いました。重い話題ではあったものの、とても穏やかな雰囲気でした。

今回のラクーン会の特徴は、外賓の参加です。外賓の参加がラクーン会に異彩を与えてくれたとも言えるでしょう。日本の新生銀行の会長をされた八城さんは、世界の金融界のベテランで、今年79歳の高齢ですが、見た目には50歳にも見える非常にお洒落な方で、驚くほどの精力と記憶力の持ち主でいらっしゃいます。中国の銀行監督委員会や建設銀行の顧問をしながら中国語を勉強するために北京に住んでおられ、まだ1年ちょっとなのに、会話もでき、文章も書けるとは、まさにスーパーマンとしか考えられません。みんな、すっかり感心し、「がんばらなくっちゃ」という刺激を受けました。

毎回楽しいラクーン会ですが、今回のラクーン会は、なおさら楽しい集いでした。次回は、どんなラクーン会が待っているでしょうね。

（文責：朴 貞姫）

■ 2007 ラクーンによる送別ラクーン会

2008年5月25日、初夏の気分の中、ポラス・ロハス・オスカルさんの送別会が行われた。彼は今回、母国コスタリカに帰って、すぐ学校の教授になるばかりではなく、学部長に昇進する予定だ。同じ2007年度渥美奨学生として、羨ましいけれども、心から誇りの気持ちでいっぱいである。また、彼の国は遠いので、今回帰ったら一生会えないかもしれないという思いで、送別会を計画した。

今回は事前の準備期間があまりに短く、また皆さんは卒論に大変忙しいから、全員の出席はかなわなかった。出席できたのは渥美奨学財団の常務理事今西さん、事務

局長嶋津さん、2007年度の奨学生の金ミンスク、李垠庚、権明愛、顔海念、シュラトフ・ヤロスラブ、王剣宏とボラス・ロハス・オスカルそして奥様の10人だった。



オスカルさんのご希望をもとに今回の定番料理は北京ダックにした。5月25日池袋の中華街（店名）でにぎやかに開催した。美味しい料理がたくさん揃っている。最初はいろんな前菜、そしてボリュームがありかつ美味しい本番、最後はデザートなどを注文した。とくに北京ダックの三種の食べ方は皆さんの賞賛を買った。飲み物はビールをはじめ、紹興酒そして中国の定番白酒などを試した。私が中国人としてびっくりしたのは今西さんをはじめ皆さんが平気で白酒を飲めることでした。白酒はアルコール度数が高いし特別な香りがあり、慣れない人が結構多いという考え方をもっているの。はじめは、オスカルさんの母国コスタリカの事情をはじめ、四川大地震など話題が弾みました。そのうち、上海女性と北の女性どちらか強いのかという面白い話題になり、皆さんを巻き込んで熱烈に議論された。

時間は過ぎ早い、午後6時から10時まであっという間に過ぎた。最後、ミャンマーのサイクロン災害の募金が行われて、皆さんが積極的にお金を出したので、すぐに4万円に近い支援金となった。記念写真を撮り、10時半ぐらい店を後にした。今回の送別会は本当に楽しかった。今回の送別会を通してわかったのは一旦縁があって仲間になったら、人生の友と言える。一生ずっと大切にしなければいけないことである。今後是非、皆さんの仲間として、ずっと渥美奨学生という縁を大切してください。

（文責：王 剣宏）

■ラクーン会 in 大阪

2008年7月6日、大阪府梅田で関西ラクーン会が開かれました。渥美財団理事長渥美伊都子さん、常務理事今西淳子さん、金外淑さん（97 狸）、李鋼哲さん（99 狸）（家族2人）、周海燕（99 狸）、武玉萍さん（00 狸）（家族3人）、王雪萍さん（05 狸）の12名が集まりました。特に、李鋼哲さんご一家と周海燕さんは遠方の金沢と富山からわざわざ駆けつけてくれました。



会場は大阪駅のすぐそばのヒルトンプラザイースト7階の大阪聘珍楼です。12時から14時半までの短い時間でしたが、美味な中華料理を食べながら、和気藹藹の雰囲気の中、中国四川省大地震、地球温暖化問題、日本の医療環境の変化、少子化の中の日本教育事情などのような固い話題から、子供の教育や、新しい結婚事情、関西のお笑い文化などのような柔らかい話題まで、いろいろと議論されました。

食事後、幹事の金外淑さんは関西ラクーンを代表して、やや遅れた誕生日プレゼントを理事長の渥美伊都子さんに贈りました。理事長のご長寿のお祝いのお話から、平均寿命がますます延びていく日本社会における定年後の生活の過ごし方まで話題が発展しました。

会の最後に、参加した関西ラクーンから、今回は皆さんが参加した初めての関西ラクーン会であったことが判明しました。今回は、渥美理事長と今西常務理事の来阪がきっかけで開催できました。これをきっかけに、今後も時々開催したいという要望も出されました。次回のラクーン会で皆さんとのを期待しています。

（文責：王 雪萍）

■ラクーンビジット in ボローニャ

8月11日（月）～14日（木）、フィレンツェでの会議の後、マリアエレナさん（2003 狸）を訪ねてボローニャに行きました。イタリアは夏休みの真っ最中。有名なレストランもお店も、ショーウィンドーに「8月20日までお休みです」などの張り紙。それでもマリアエレナさんは、毎食、インターネットで探した開いているレストランに連れて行ってくださいました。時には、お友達に運転手をお願いして。スパゲッティーボロネーズ、プリマ（土地の名前です。会社の名前ではありません。）の生ハム、などなど。本当に美味しかった！そして、ボローニャの街は歩くのが一番ということで、アーケードの連なる街を歩き回り、マリアエレナさんが卒業した小学校、一番好きなアイスクリーム屋さんなどに案内していただきました。丘の上の聖ルカ教会のマリアの記念堂までも歩いて登りました。その他、たくさんの教会（聖ペトロニオ大聖堂、聖ステファノ聖堂などなど）、世界で一番古いボローニャ大学（1088年創立）の解剖学教室、貴族が競争して建てた塔（そして建設に失敗して有名になった斜塔）などを観光しました。また、13日には、「世界で5番目に小さな国（ミニ国家）、現存する世界最古の共和国」というサンマリノに行き、帰りにはマリアエレナさんが夏を過ごすリミニのビーチにも立ち寄りま





した。マリアエレナさんは「8月にはイタリア人はボローニャに居ない。これは本当のイタリアじゃない。」と言うでしょうけど、おかげさまでイタリアを満喫しました。3日間の専属ガイドをありがとう！

(今西淳子)

■ラクーン会 in ロンドン

2008年8月17日(日) ロンドンで第一回英国ラクーン会が開催されました。メンバーは今西さん、勇人さん(今西家の長男)、ブレンダさん(2004 狸)、David Nathan さん(私の旦那)と私(方美麗：1997 狸)の



5名です。場所は West Brompton にある台湾料理の店でした。今西さんの宿泊先 Paddington のホテルで待ち合わせてからそちらに行きました。今回は渥美財団の奨学生のブレンダさんと私だけでなく、音楽とコンピューターに関心を寄せる勇人さんと、絶滅危機に瀕している言語データの採録と保存に携わる David さんの参加で、コンピューターの話から、天気の話、移民の話、「国語」の話、さらに食べ物の話など、天文、地理、気象、政治、経済、人文、科学、そして言語と文化を超えた範囲の話題が次々と取り上げられました。この集まりについてそれぞれの感想書いていただいたので、以下のようにまとめます。

☆今西淳子：

【感想】方さんのおかげで、と一っつも美味しい台湾料理をロンドンでいただきました。これからもずーっと続けましょね。

【話題】オリンピックで台湾が違った旗で参加しているという話を初めて聞きました。台湾語での巧みな交渉のおかげで特別料理がたくさんでてきました。ここの台湾チームはとても強い！ごちそうさま！

☆今西勇人：

【感想】こんなにたくさんのお料理がでて、食器洗いも大変そうだな。

【意義】Catch up what's with everyone!

【話題】Good microphones for recording conversation!

☆ブレンダ：

【感想】About Restaurant and Food, the appetizers are very 'appetizing', very sumptuous. Thanks to Fang-san for the recommendation.

【意義】雰囲気が良い！I enjoyed not only the food but the various interesting topic over the meal. Great to see Imanishi-san, Hayato, Fang-san and David.

【話題】The topic on food culture especially on the difference between Taiwanese and Chinese was particularly interesting.

☆デビッド：

【感想】Kono meeting-wa Cho oishiil

【話題】I enjoyed meeting Brenda Tenegra and discussing immigration issues. We also discussed the situation of endangered languages in different parts of the world.

【意義】It was a meeting of experts from UK, Japan, Philippines, Taiwan and Australia.

☆方 美麗：

【感想】同じ英語を使っても、言語背景違いで David の英語的ユーモアが勇人には皮肉、COOL に聞こえ、おふたりの間で行ったりきたりする話が、私にとっては、まるで日本のボケとつっこみの漫才のようにみえました。国語の話が出てきました。同じ「国語」という語彙であるのに、英語と日本語では事情が異なり、一つの表記法で統一される英国の国語は、多数の表記法、しいて言えば多言語（仏教経典、漢文、物語、和歌、軍記など）の日本の国語と比べて、異なる次元のものと言えよう。

【話題】日本は、留学生の受け入れ目標を 30 万人にすると今西さんから聞きました。おっと！ひょっとすると、私の“表現教授法”（A Performance Approach to Language Teaching and Learning）が、日本語教育の普及に役に立ってるのかな…！福田さんにお勧めした方がいいかも。

【意義】一回目の英国ラクーン会は、ただの食事会ではなく、それを超えて、多元的文化論について、異なった視点から討論できたことが、この集まりを意義付けてくれました。良かったです！

（文責：方 美麗）

■韓国ラクーン会 in ソウル（2008 年秋）

2008 年 10 月 12 日、お昼の 12 時、ソウルの鍾路区仁寺洞にある閔家茶軒（Min's Club）で韓国ラクーン会（KSR）が開かれました。

渥美財団常務理事の今西淳子さん、事務局長の嶋津さん、朴哲主さん（95 狸）尹錫姫さん（95 狸）李来賛さん（KSR 会長、96 狸）南基正さん（96 狸）高熙卓さん（00



狸）朴栄濬さん（02 狸）韓京子（KSR 幹事補佐、05 狸）玄承洙さん（KSR 幹事、06 狸）の 10 名が集まりました。久しぶりに 1 期の先輩方にお目にかかれた貴重な時間となりました。

お店は朝鮮末期の悲運の王妃明成皇后（閔妃）の親戚の子孫の邸宅です。伝統家屋（韓屋）を西洋風に改装したはじめての建物で今はレストランとして使われていますが、建築史においても重要であり、ソウル市の民俗文化財に指定されています。料理も宮中料理など伝統料理ではなく西洋風にアレンジされたフュージョンレストランです。外観は古風ですが、中は韓洋折衷という感じです。

いつもこの時期にラクーン会があるのですが、今回はご存知のように渥美財団の奨学生選抜（韓国現地採用枠）の面接があったのでその日程に合わせて開かれました。そのため一緒にあった嶋津さんはこの後ちょっとしたソウル観光をなさいました。まず、世界的に話題となっている（といわれているにもかかわらず、現地の人はほとんど観ていない）ミュージカル「JUMP」（テコンドーの動きをもとにした）を鑑賞し、夕暮れには李明博大統領がソウル市長だった時に復元した清溪川を散策、その後ソウル市庁前の王宮「徳寿宮」（なんと 8 時までやります）と、その中にある美術館を観覧しました。清溪川を散策しているとき、今西さんが「どうしてみんな橋の下に集まってるんだろう？」って不思議がっておられました。言われて気がつきましたが、川辺に人が座って話をしたりしているのですが、なぜか橋の下の方が人が多く、明るい日差しあたるところの方が少ないのです。真昼なら日差しをさけてとは思いますが、黄昏時に薄暗くなった橋の下に、どうして??? 人間の心理ってやはり難しいです。同じく美術館で展示中のラテンアメリカ巨匠展の絵画を見ても、「いやー。わからないな」「んー。これはちょっとわかるような気がする」といった感想ばかりでした。わからないまま観るものなのか、解説を聞いてしっかり理解するものなのか、芸術の世界もわからないものです。

嶋津さんを国民大学のゲストハウスにお送りしたあとの帰りのタクシーの中で、運転手さんと奨学金や人材育成などをめぐってあつ〜く韓国の企業のあり方について語り合いました。

秋晴れの晴天の中、そして夜は満月前夜の下で自然や

芸術に浸り、忙しい日常を振り返る機会となりました。
みなさま、たまには空を見上げましょう。

(文責：韓京子)

ラクーン会前日、渥美奨学生北京・ソウル面接枠応募者の面接後、夕方から始まる日韓アジア未来フォーラムの打合せまでの空き時間に、南基正さんのドライブで国民大学の借景にもなっている山の麓にあるお寺、三角山道読寺に参詣しました。日本でもそうですがお寺に行くとなぜか気持ちが引き締まります。少しひんやりした気持ちのよい澄んだ空気のせいもありましたが、不思議です。南さんは月1回お参りされるという。お母さんが喜んでくださるとか。すばらしい。ちなみにお母さんは毎週お参りされると伺いました。

(文責：嶋津)

■ラクーン会 in 広州

2008年10月18日(土)午後7時、広州市のホリデーインホテルの中にある日本料理店「かしきや」で、ラクーン会が開催されました。参加者は、奇錦峰さん(2001狸)、香港から来てくださった叶盛さん(2004狸)、広州を訪問中の今西、そして特別ゲストの竹尾真由子さんでした。広州では一番本格的な日本料理をいただきながら、叶さんの会社で製作販売している簡易血圧計の話から始まり、奇さんの漢方薬の副作用の話まで、さまざまな話題で盛り上がりました。薬の副作用の研究で日本医科歯科大学から博士号を取得された奇さんは、漢方薬は危ないと主張されています。興味がある方は、関連資料をお送りしますので、今西@渥美財団までご連絡ください。



10月19日(日)広州から香港へ行き、ちょうどリーマンブラザーズからノムラホールディングスに移行する間でちょっと時間的に余裕のあった候延琨さん(1999狸)にご案内いただきました。久しぶりにビクトリアピークまで登って、香港の町を見降ろしながら、グローバル金融危機の後のダメージや、物価の高騰、香港の魅力などおしゃべりしました。

(文責：今西淳子)

■ラクーン会 in 台北

今年の台湾は11月に入っても30度前後の高温が続き、8日の朝になってはじめて秋の気配が感じられました。遅れてきた寒波の訪れと共に、待望していた台湾のラクーン会が開催され、今西さんと4年ぶりにやっと台北でお会いすることができました。幹事を務めた葉文昌さん(1999)が、台湾の美しい景色を披露しようと北海岸の旅を計画し、張桂娥さん(2003)の運転で金山の温泉、富基漁港、九分などの観光スポットを今西さんに案内しました。冷たい風と雨のなか、今西さんは早くも冬の台北には特有の雨景色を満喫し、観光客の気分で温泉や台湾料理を満喫されたようでした。



葉さんと張さんのほかに、楊接期(1999)、陳姿菁(2002)、蔡英欣(2004)、藍弘岳(2005)と詹彩鳳(2007)総勢七人、台湾に居る台湾のラクーン会のほぼ全員がそろい、11月9日の夜に台北の『青葉』という台湾料理の老舗で集まりました。あいにくな天気や経済の冷え込みのせい、外食客の多い日曜日の夜なのに東区の繁華街にはいつものような人の群れが見えず、店内も空いていました。台湾ラクーン会はメンバーの半数が初対面ですが、自己紹介の続き、教育現場の出来事をはじめ、教

育制度改革の問題、留学経験がもたらしたものの子育ての方針まで歓談が続きしました。最後に、最近の台湾先鋭監督の話題作『海角七号』（岬七号）という映画をめぐってさらに盛り上がりました。しかし、メンバー達の専門分野が多彩で、関心も多岐にわたっていたため、夜10時近くなっても SGRA フォーラムのテーマは纏まりませんでした。結局今西さんのご期待に叶えず、台湾フォーラムの企画は実現できませんが、今回の集まりは貴重なスタートを切ったと思われます。来年までに良い提案が生まれるよう、そして理事長をお迎え、今西さんと一緒に台北で再びお目にかかれるよう、台湾のラクーン会一同そろって、心からお待ちしております。

(文責：詹彩鳳)



無事に帰国しました。東京は、台北よりさらに寒いですが、雨は降っていません。昨晚は、久しぶりに皆さんにお目にかかることができとても嬉しかったです。お忙しい中お集りいただき、ありがとうございました。青葉は洒落たインテリアで、お料理もとても美味しかったです。それに、皆さんから、台湾の状況といろいろな意見を伺えて、とても楽しかったです。

前日の温泉旅行も、あいにくの雨でしたが、金山や九分は、確かに、そのおかげで週末にしては人が少なかったと思います。富基漁港の海老蟹も、金山の街の小さなお店の家族で作っている小籠包も、九分の芋餅も、「やっぱり台湾は美味しい」と再確認でした。金山の温泉宿も、九分の茶房も、歴史ある木造の建物で雰囲気が満点でした。久しぶりに観光した気分です。葉さん、張さん、ご案内ありがとうございます。張さん、お疲れのところ、2日間ずっと運転手をしてくださってありがとうございます。

SGRA フォーラムの企画は纏まりませんでしたが、そんなに急ぎません。何か良いアイデアがあれば提案し

てください。せっかくこんなにたくさんのラクーンの皆さんが台北にいらっしゃるから、できれば何かやりたいと思います。皆さんの負担にならないように、むしろプラスになるような何かがないかなと思っています。大きな予算があるわけでもないのですが。

そんなことで、また来年お会いしましょう。今度は理事長も誘ってみます。皆さんも、日本に来ることがあって、時間があったら連絡ください。

(文責：今西淳子)

韓国未来人力研究院 /21 世紀日本研究グループと渥美財団 /SGRA との共同プロジェクト

第 8 回日韓アジア未来フォーラム

「日韓の東アジア地域構想と中国観」を開催

日 時：2009 年 2 月 21 日（土）午後 2 時 30 分～5 時 30 分

会 場：東京国際フォーラム ガラス棟 G 409 会議室

日韓同時通訳付き

2009 年 2 月 21 日（土）、東京国際フォーラムで「日韓の東アジア地域構想と中国観」をテーマに第 8 回日韓アジア未来フォーラムが開催された。前回のグアムフォーラムにおいて「東アジア協力」と「ソフトパワー」というキーワードを念頭に置きながら、中国に対する見方の日韓の差に注目し、今後具体的に検討していくことにしたのを受けて、今回のフォーラムでは、日韓の東アジア地域構想について比較の視座から考えてみることにし、その大きなポイントとなる中国観の日韓における相違などについて検討する機会を設けた。

■ プログラム

総司会：金 雄熙（韓国仁荷大学国際通商学部副教授、SGRA 研究員）

【開会の辞】今西淳子（SGRA 代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

【開会挨拶】李 鎮奎（未来人力研究院院長、高麗大学経営学部教授）

【発表 1】「日本の東アジア地域構想－歴史と現在－」平川 均（名古屋大学経済学部教授、SGRA 顧問）

【発表 2】「韓国の東アジア地域構想－韓国の地域主義－」孫 洌（延世大学国際学大学院副教授）

【発表 3】「日本（人）の中国観」川島 真（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

【発表 4】「韓国（人）の中国観」金 湘培（ソウル大学外交学科副教授）

【コメント】「中国からみた日韓の中国観」李 鋼哲（北陸大学未来創造学部教授、SGRA 研究員）

【パネルディスカッション】「日韓の東アジア地域構想と中国観」

【閉会の辞】嶋津忠廣（SGRA 運営委員長、渥美国際交流奨学財団事務局長）

■ 概要報告

フォーラムでは、今西淳子（いまにし・じゅんこ）SGRA 代表と韓国未来人力研究院の李鎮奎（イ・ジンギョ）院長による開会の挨拶に続き、4 人のスピーカーによる研究発表が行われた。

まず名古屋大学の平川均（ひらかわ・ひとし）氏は 20 世紀から現代までの日本における主なアジア主義について思想と実態とに分けてその特徴を明らかにした上で、昨今の東アジア共同体ブームに関連して、現在が歴史の再現ではないことを力説するとともに、日本の東アジア共同体構想に対する立場は米国配慮と中国牽制であるとした。

延世大学の孫洌（ソン・ヨル）氏は、韓国の地域主義について「東北アジア時代構想」と「東北アジアバランス論」を主な事例として取り上げながら、地域の範囲、性格、アイデンティティ、方法論の側面から日本や中国のそれとの違いを明らかにした。そしてミドルパワーとしての韓国のバランスとしての役割を強調した。

東京大学の川島真（かわしま・しん）氏は「日本人の中国観」について、これまでの日本の対中観を歴史的な経緯や、

近30年間の調査結果、そして昨年の状況などについて概括した。とりわけ、東洋／日本／西洋という三分法の下にあった日本の中国観は戦後日本にも継承され、中国があらゆる分野で存在を強めたことで、日本内部で拒否反応が起きてきたと主張した。また、現在も、日本では中国についての否定的な言説が支配的であるが、中国そのものへの不信感は政治や歴史認識問題ではなく、しだいに生活そのものに脅威を与える存在として中国が認識されつつあるとした。

そして最後の発表者としてソウル大学の金湘培（キム・サンベ）氏は「韓国人の中国観」について発表を行った。21世紀東アジアにおける世界政治はソフトパワー（soft power）や国民国家の変換（transformation）に注目すべきであるとした上で、こうした文脈から理解される中国の可能性とその限界とは、取りも直さず技術・情報・知識・文化（これらをまとめて「知識」と「ネットワーク」という21世紀の世界政治における二つのキーワードにいかにかうまく適応できるかを基準にしながら評価できるものであると主張した。

パネル討論では、SGRA 研究員であり北陸大学の李鋼哲（り・こうてつ）氏は、「中国からみた日韓の中国観」について、対中国認識における日韓両国と国際社会の間の乖離、対日本認識における中韓両国と国際社会の乖離、中国観と現実の中国の間にみられる乖離に触れつつ、「求大同、存小異」の姿勢を力説した。このほかにもパネルやフロアからたくさんの意見や質問などが寄せられたが、時間の制約上議論は惜しくも懇親会の場に持ち越された。

今回のフォーラムは67名の参加者を得て大盛會に終えることができたが、これには同時通訳という「重荷」をボランティアで快く引き受けてくれたSGRA 会員の方々の存在が大きかった。この場を借りて感謝の意を表したい。例年だと、フォーラム終了後は「狂乱」の飲み会になってしまうことが多かったが、今年はグローバル金融危機のしわ寄せもあって静かな夜に終わったような感じがする。来年を期待してみたい。

（文責：金雄熙）



第3回 SGRA チャイナ・フォーラム

講演：工藤正司（アジア学生文化協会常務理事）

「一燈やがて万燈となる如く」

～アジアの留学生と生活を共にした協会の50年～

2008年9月26日（金）午後3時～6時 延辺大学総合棟七階報告庁

2008年9月28日（日）午後2時～5時 北京大学外国語学院民主楼

主 催：関口グローバル研究会（SGRA）

協 力：（財）アジア学生文化協会、北京大学日本語文化学部、延辺大学アジア研究センター

協 賛：（財）双日国際交流財団、国際交流基金北京日本文化センター、（財）渥美国際交流奨学財団

■ 概要報告

中国における第3回目のフォーラムは、9月26日（金）に延辺大学総合棟七階報告庁にて、9月28日（日）に北京大学外国語学院民主楼にて開催されました。2006年に北京大学で開催したパネルディスカッション「若者の未来と日本語」、2007年に北京大学と新疆大学で開催した緑の地球ネットワーク高見邦夫事務局長のご講演「黄土高原緑化協力の15年：無理解と失敗から相互理解と信頼へ」に引き続き第3回目です。今回は、50年にわたり東京で留学生の受け入れ態勢の改善に取り組んできたアジア学生文化協会（ABK）の工藤正司常務理事に、協会の創設者穂積五一氏の思想とABKを通して見た日本とアジアのつながり、そして民間人による活動の意義をお話いただきました。



工藤さんは、「お国の発展ぶりに讃辞を送ることからお話を始めることになるのですが、私の本当の心を申しますと、それよりも前に、私の国・日本が過去に皆様のお国に行ったことをお詫びさせて戴きたい思いです」、「今日私がお話しするのも、私たちの協会や創設者のことを、誇るためでも、宣伝するためでもありません。敗戦した国で日本人は何を考え、どのように行動したか、そして、現在はどう動いているかを、1つの例として、私たちの協会とその創設者の人間を通してのぞいてみることを、そして、それを通じて『公益事業を民間が行うこと』の意味を皆さんと一緒に考えてみて、もし、皆様にも参考になることがあれば、活用していただきたいということです」と講演を始め、戦前の日本に対する反省に立って「新しい戦後日本」を構想して設立されたABKと創設者穂積五一氏の思想、その後の協会の展開と工藤さんご自身の関わりを、パワーポイントで写真を映しながら話されました。そして、最後に、「日本に居る留学生たちは、今、いじめにあうのを恐れて、自由にものを言えないのではないか」「移民政策が定かでないのに、日本の労働力不足を補うために留学生の受け入れを急増させようという留学生30万人計画は危ないのではないか」「日本も中国も短絡的に相手を見ることが多すぎるのではないか。お互いの現在の状況を新しい姿勢で、もっとよく研究する必要があるのではないか」と問題提起し、「具体的提案があれば、私はABKが現在進めている改革に、文化交流の一環として、組入れることを真剣に検討する用意があると申し上げます」と結ばれました。

延辺大学フォーラムの参加者は、主に国際政治学を専攻する学生約150名で、日本と中国の教育や学生の違いについて等の質問がありました。北京大学フォーラムの参加者は、日本語学習者を中心とした北京大学、北京第二外語大学、北京語言大学、北京人民大学等の学生、日本留学中にABKや太田記念館に滞在した方々、渥美財団の渥美理事長他関係者など約80名でしたが、大学で日本語を勉強する学生さんは皆さんとても流暢な日本語で質問したので驚きました。ふたつのフォーラムを実現してくださった延辺大学の金香海さんと北京大学の孫建軍さんに心から感謝いたします。また、参加してくださったSGRA会員のみなさん、呉東鎬さん、金熙さん、張紹敏さん、朴貞姫さん、馮凱さん、宋剛さん、ありがとうございました。

(今西淳子)



◆ 延辺大学の金香海さんより：



延辺大学のフォーラムでは、講演の後も、学生達の興味深い質問に対し、工藤さんは熱心に回答してくださり、会場は一貫して熱い雰囲気でした。その余蘊が去らず、30名の参加者達は、日本国際交流基金の援助で出来たばかりの「延辺大学日中ふれ合いの場」で立食パーティーを開き、ワインを交えながら、再び工藤さんから日中学生気質の違いや日本語教育についてのお話を伺い、夜が過ぎるのを忘れました。このように大きな共鳴を引き起こしたのは、やはり工藤さんの講演の内容とそのすばらしい人格のためであったと思います。

日本とアジアは長い文明交流の歴史がありました。日本は明治維新を通じて西洋と肩を並べる近代国民国家になりましたが、その過程でアジアを否定して西洋の価値観を取り入れて“空想的帝国”をつくろうとしたが失敗しました。この後、またアメリカの価値観を取り入れ、先進国になったけれども、ここにはいろいろな歪みが生じました。これがまさに、ABK創設者の穂積先生が、日本社会の疾病としたもので、敗戦直後から「アジアのために」アジアの留学生を支援してきた理由です。工藤さんは、日本の再生、そしてアジアの価値の回復と創造は、学生達の草の根の交流があって初めて、“一燈やがて万燈となるとき”実現できると仰いました。大変優しく、すばらしい人格の持ち主で、文明に対する深い理解を持っていらっしゃる工藤さんを、私は非常に尊敬しています。



◆ 北京大学の孫建軍さんより：



「留学」について深く考えさせられるお話でした。外国の進んだ技術や裕福な生活に憧れ、または外国語の習得や学術研究に役立たせるために、留学したい人が多いものです。多くの人の場合、それは夢だけに終わってしまいますが、僅かながら留学を実現させた人もいます。自分を中心に生活を考える留学生と違い、工藤さんのいらっしゃる ABK は留学環境を整えるために 50 年奮闘して来られました。日本国内政治の動きや国際関係の変化に翻弄されながらも、留学生のためという信念を曲げることがありませんでした。ABK のような組織は、アジアの学生にとってどれだけ心強い存在でしょう。

ABK にお世話になった元中国人留学生が、会場にたくさん集まったのも ABK の強い求心力の表れに違いありません。

講演を聞きながら考えました。心にゆとりのある人でなければ NPO 活動は成立しません。留学がきっかけで、自分は NPO の存在を知り、関わるようになりました。精神的に豊かな方のそばにいただけで励まされます。もっと精神的に成長しなければならないと切実に感じました。



活動報告（2008 年 4 月～ 2009 年 3 月）

☆年 4 回の SGRA フォーラムを開催

☆ SGRA レポートを発行

☆メルマガ【SGRA かわらばん】無料購読メールを配信（購読者 710 名）

■ 2008 年 5 月 10 日 第 31 回 SGRA フォーラム「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」 （於：東京国際フォーラムガラス棟 G610 会議）

総合司会：李 海峰（北九州市立大学国際環境工学部特任准教授、SGRA 研究員）

【講演】「エネルギー、環境、農業の融合を考えるーバイオマス利用とエネルギー自給・地域活性化ー」

東城 清秀（東京農工大農学部 准教授）

【講演】「福岡県築上町の米エタノール化地域モデルー水田を油田にするための事業構想ー」

田村 啓二（福岡県築上町産業課資源循環係）

【パネルディスカッション】

進行：李 海峰（北九州市立大学国際環境工学部特任准教授、SGRA 研究員）

コメンテーター：埼玉大学経済学部教授、SGRA 顧問 外岡 豊

パネリスト：上記講演者 3 名

→ SGRA レポート No.46

■ 2008 年 7 月 20 日 第 32 回 SGRA フォーラム in 軽井沢「オリンピックと東アジアの平和繁栄」 （会場：鹿島建設軽井沢研修センター）

総合司会 南 基正（韓国国民大学国際学部副教授、SGRA 研究員）

【基調講演】「オリンピック運動の内破と東アジアの諸問題」

清水 諭（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）

【発表 1】「日本からみたオリンピックー東京オリンピックと 1960 年代の東アジアー」

池田慎太郎（広島市立大学国際学部准教授）

討論者：全鎮浩（光云大学校東北亜大学国際協力学部助教授、防衛省防衛研究所客員研究員）

【発表 2】「韓国から見た東アジアのオリンピック：2028 平壤オリンピック？」

朴 榮濬（韓国国防大学校副教授、SGRA 研究員）

討論者：李鋼哲（北陸大学未来創造学部教授、SGRA 会員）

【発表 3】「北京オリンピックが中国にもたらすもの」

劉 傑（早稲田大学社会科学総合学術院教授）

討論者：木宮正史（東京大学総合文化研究科准教授、SGRA 顧問）

【パネルディスカッション】「オリンピックと東アジアの平和繁栄」

進行：南 基正（韓国国民大学国際学部副教授、SGRA 研究員、SGRA 研究チーフ）

パネリスト：上記講演者

→ SGRA レポート No.47

■ 2008 年 12 月 6 日 第 33 回 SGRA フォーラム「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」

(会場：東京国際フォーラム G402 会議室)

総合司会：李鋼哲（北陸大学教授、SGRA 研究員）

【基調講演】「FTA で経済関係が深まる日本と東南アジア」

東 茂樹（西南学院大学経済学部教授）

<コメント：感想と問題提起>

平川 均（名古屋大学経済学研究科教授、SGRA 顧問）

ド・マン・ホーン（桜美林大学経済経営学系講師）、ベトナム出身

フェルディナンド・C・マキト（SGRA 研究チーフ）、フィリピン出身

【パネルディスカッション】

パネリスト：平川 均（司会）、東 茂樹、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト

→ SGRA レポート No.49 近日発行

■ 2009 年 2 月 21 日 第 34 回 SGRA フォーラム「日韓の東アジア地域構想と中国観」（第 8 回日韓アジア未来フォーラムと共催）

(会 場：東京国際フォーラム G 409 会議室)

総合司会：金 雄熙（韓国仁荷大学国際通商学部副教授、SGRA 研究員）

【発表 1】「日本の東アジア地域構想－歴史と現在－」

平川 均（名古屋大学経済学部教授、SGRA 顧問）

【発表 2】「韓国の東アジア地域構想－韓国の地域主義－」

孫 洵（延世大学国際学大学院副教授）

【発表 3】「日本（人）の中国観」

川島 真（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

【発表 4】「韓国（人）の中国観」

金 湘培（ソウル大学外交学科副教授）

【コメント】「中国からみた日韓の中国観」 李 鋼哲（北陸大学未来創造学部教授、SGRA 研究員）

【パネルディスカッション】「日韓の東アジア地域構想と中国観」

→ SGRA レポート No.50 編集集中

第 31 回



第 32 回



第 33 回



第 34 回



■ 渥美奨学生 2008 年度著作・発表論文・特許リスト

【1995 年度奨学生】

■ 高 偉俊

1. 筆頭執筆: Weijun Gao, Toshiyuki Watanabe, Hiroshi Yoshino, Yutaka Tonooka, The Energy Consumption Trend and its Challenge of Building Sectors in Urban Area of China, pp168-173, 5th International Symposium of Asia Institute of Urban Environment, November 24-26, Toyama, Japan, 2008
2. 筆頭執筆: Weijun Gao, Hongbo Ren, Nan Zhou, Chris Marnay, Theoretical model of Structural and Operational Optimization for Distribute Energy Resources, 4th European PV-Hybrid and Mini-Grid Conference, 29th-30th, May 2008, Glyfada, Athens, Greece
3. 共同執筆: Hongbo Ren, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Economic optimization and sensitivity analysis of photovoltaic system in residential buildings, Renewable Energy, Volume 34, Issue 3, Mar-09, Pages, 883-889
4. 共同執筆: Guan Dongjie, Gao Weijun, Watari Kazuyuki, Fukahori Hidetoshi, Land use change of Kitakyushu based on landscape ecology and Markov model, Journal of Geographical Science Vol.18, No.4, November 2008, Nov-08, Pages, 455-468
5. 共同執筆: Yingjun Ruan, Qingrong Liu, Weiguo Zhou, Bill Batty, Weijun Gao, Jianxin Ren, Toshiyuki Watanabe, A Procedure to Design the Mainline System in Natural Gas Networks, Applied Mathematical Modelling, Oct-08, 2008
6. 共同執筆: Hongbo Ren, Weijun Gao, Yingjun Ruan, Optimal sizing for residential CHP system, Applied Thermal Engineering, Volume 28, Issues 5-6, Apr-08, Pages, 514 ~ 523, 2008
7. 共同執筆: 任洪波, 高偉俊, 渡辺俊行, バイオマスを燃料とした住宅地区の複合エネルギーシステムの導入効果及び経済性の要因分析, 日本建築学会環境系論文集 第 637 号, Mar, 2009, 331-338

【1997 年度奨学生】

■ デマイオ、シルバーナ

「航路なき旅——伊太利亜王国海軍の艦隊と明治初期日本人の伊太利亜観」『言語文化研究』2008 年 11 月 20 巻 2 号 pp. 33-42

■ カノックワン・ラオハブラナキット片桐

「フィリピン人日本語学習者の数字のアクセント」『アジアにおける日本語教育—「外国語としての日本語」修士課程設立一周年セミナー論文集』上原聡編 チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座, pp.103-127. (2009)

■ 金 外淑

1. 心理療法 不安からの脱却を図る認知行動療法. 治療学 42(7): 45-49, 2008
2. 健康行動理論を用いた患者指導 認知行動療法の観点から. 糖尿病ケア 5(2): 26-31, 2008
3. 行動療法のすすめ 認知行動療法. 肥満と糖尿病 7(2): 183-185, 2008
4. 第 5 章 糖尿病. 医療心理学の新展開 鈴木伸二(編) p42-56: 北大路房出版, 京都, 2008

■ 李 恩民

1. 三谷孝編、内山雅生・李恩民 他著『中国内陸地域における農村変革の歴史的研究』、科学研究費補助金（基盤研究（B））（海外学術調査）研究成果報告書、A4 判、全 216 頁、2008 年 7 月
2. 李恩民「中江要介『日中外交の証言』」、アジア・アフリカ研究所『アジア・アフリカ研究』第 49 巻第 1 号、74 ~ 78 頁、2009 年 1 月

■ 王 岳鵬

1. Wang YP, Zheng XR, Riddick N, Bryden M, Baur W, Zhang X, Surks HK. ROCK isoform regulation of myosin phosphatase and contractility in vascular smooth muscle cells. Circulation Research. 2009 Feb 27;104 (4):531-40.
2. Michael SK, Surks HK, Wang YP, Zhu Y, Blanton R, Jamnongjit M, Aronovitz M, Baur W, Ohtani K, Wilkerson MK, Bonev AD,

Nelson MT, Karas RH, Mendelsohn ME. High blood pressure arising from a defect in vascular function. Proc Natl Acad Sci U S A. 2008 May 6;105(18):6702-7.

■ ウィリアムス、ダンカン

1. "A Festschrift for Helen Hardacre" A Special Issue of the Japanese Journal of Religious Studies (Spring 2009; Nanzan Institute of Religion and Culture)
2. "At Ease in Between: The Middle Position of a Scholar-Practitioner." Journal of Global Buddhism (Vol. 9, 2008), 155-63.

■ 張 紹敏

1. H. Li and SSM. Zhang. Role of Stat1 Is associated with normal neuron functions of mouse retina. ARVO, 5381/D918, Fort Lauderdale, 2008
2. M. Carroll and SSM. Zhang. Imbalanced STAT activation in hematopoietic stem cells lead to abnormal organ development and Crohn's disease-like pathogenesis. 27th Penn State's Summer Symposium in Molecular Biology "Inflammation, Innate Immunity, and Disease", University Park, 2008
3. SSM. Zhang and C.J. Barnstable. Understanding the transcriptome of retinal development. The XVIII International Congress of Eye Research, Beijing, 2008
4. SSM. Zhang. Histone modification during mouse retina development. XIIIth International Symposium on Retinal Degeneration, Sichuan, China 2008
5. C. Pinzon-Guzman, SSM. Zhang, C.J. Barnstable. Protein Kinase C regulates rod photoreceptor differentiation through modulation of STAT3 signaling. Society for Neuroscience, Washington D.C., 2008
6. E.Y. Popova, M.G. Liu, C.J. Zeiss, C.J. Barnstable, SSM. Zhang. Epigenetic regulation during mouse retina development. Society for Neuroscience, Washington D.C., 2008
7. X. Lou, H. Li, C.J. Barnstable, SSM. Zhang. Functions of signal transducer and activator of transcription 1 in mouse retina. Society for Neuroscience, Washington D.C., 2008
8. Zhang, C., Li, H., Liu, M.G., Kawasaki, A., Fu, X.Y., Barnstable, C.J., and Zhang, S.S. STAT3 activation protects retinal ganglion cell layer neurons in response to stress. Exp. Eye Res. 86(6):991-7, 2008
9. Liu, M.G., Li, H., Xu, X., Barnstable, C.J., and Zhang, S.S. Comparison of gene expression during in vivo and in vitro retina development. JOBDI 1(2-4):59-72, 2008.

【1998 年度奨学生】

■ 胡 潔

1. 「平安文学における「博士」と「学生」(日向一雅編『王朝文学と官職・位階』477頁-493頁 竹林舎 2008.5)
2. 「従養老令の親属称谓看古代日本礼と法的兼収并蓄」北京大学日本語言語文化系・北京大学日本文化研究所編『日本語言語文化研究』8 145頁-153頁 2008.8.
3. 「白詩と平安文学的女性形象」『日語学習与研究』73頁～78頁 2008.12.
4. 「婚姻習俗と文学一恋の諸相の底流にあるもの」(論集『異文化としての日本』143頁～152頁 名古屋大学国際言語文化研究科 2009.3)
5. 「嫡庶考(2) 一律令・戸籍を中心に」『言語文化論集』30 巻第2号 1頁～18頁 名古屋大学国際言語文化研究科 2009.3.

■ 孫 艶萍

1. Y. Sun, A. Allen, J. Gereige, P. Zygmanski, C. Polvorosa R. Soto, Hiroto Hatabu, M. Albert, Evaluation of Lung Cancer Treatment with Radiation Using ³He MRI. American Journal of Respiratory and Critical Care Medicine, Vol. 177, p403, 2008
2. Yanping Sun, Jessica Gereige, Joey Mansour, David Sugarbaker, Mitchell Albert, Using Hyperpolarized ³He MRI to Evaluate Lung Function in Mesothelioma. American Journal of Respiratory and Critical Care Medicine, Vol. 177, p413, 2008
3. Y. Sun, S. Zhalehdoust-Sani, H. Bao, Y.-S. Tzeng, J. Mansour, J. Gereige, X. Zhou, M.H. Cho, E. Israel, K.R. Lutchen, M.S. Albert, Ventilation and Heterogeneity in Mild-to-Moderate and Severe Asthmatics Using Hyperpolarized ³He MRI. Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the International Society of Magnetic Resonance in Medicine, 2008.
4. T. Tan, M. Albert, Y. Sun, The N-Methyl-D-Aspartate Receptor in Cerebral Ischemia, North American Journal of Medicine &

Science, Vol. 2, Issue 1, 9-14, 2009.

5.Lisa Marie Campana, Jennifer Kenyon, Sanaz Zhalehdoust-Sani, Yang-Sheng Tzeng, Yanping Sun, Mitchell S. Albert, and Kenneth R. Lutchen, Probing Airway Conditions Governing Ventilation Defects in Asthma via Hyperpolarized MRI Image Functional Modeling, J Appl Physiol, 106, 1293-1300, 2009

6.Xiangzhi Zhou, Haihua Bao, Ruqayyah Al-Hashem, Hongbin Ji, Mitchell Albert, Kwok-Kin Wong, and Yanping Sun, Magnetic Resonance Imaging of the Response of a Mouse Model of Non-Small Cell Lung Cancer to Tyrosine Kinase Inhibitor Treatment. Comparative Medicine, 2008,Vol 58, 276-281.

【1999 年度奨学生】

■ 李 鋼哲

1.『글로벌 코리아 경제문화 네트워크』(共著・『グローバルコリアン経済文化ネットワーク』2008.9. 民族出版社(中国北京)「朝鮮族グローバルネットワーク構想と戦略」pp.42～58(朝鮮語)

2.「中国経済圏に組み込まれる北朝鮮—混沌の中で生き残る道」(2008)時事通信社『時事トップ・コンフィデンシャル』(10月28日号)、pp.2-7.

3.「東北アジア環境共同体の軸をなす日中環境協力」『北陸大学紀要』第32号(2009年2月)pp.79-91.

■ 楊 接期

1.Yang, J. C., Huang, Y. T., Tsai, C. C., Chung, C. I., & Wu, Y. C. (2009, March). An Automatic Multimedia Content Summarization System for Video Recommendation. Educational Technology & Society, 12(1), 49-61.

2.Yang, J. C., & Chien, K. H. (2009, March). Development and Evaluation of a Mobile Learning System for Energy Education. In Proceedings of the 5th International Workshop on Mobile and Ubiquitous Learning Environments 2009 (MULE 2009). Tokushima, Japan. 83-90.

3.Yang, J. C., Chien, K. H., Wu, T. K. (2008, December). ECOPET: A Digital Gamed-Based Learning System for Energy Education. In Proceedings of Technology Enhanced Learning Conference (TELearn 2008). Hanoi, Vietnam.

4.Yang, J. C., Lin, Y. L., Wu, J. J., & Chien, K. H. (2008, November). Design and Evaluation of a Physical Interactive Learning Environment for English Learning, In Proceedings of the 2nd IEEE International Workshop on Digital Game and Intelligent Toy Enhanced Learning (DIGITEL 2008). Banff, Canada.

5.Yang, J. C., & Young, S. C. (2008, October). Development and Evaluation of a Multimedia Content Summarization and Recommendation System. In Proceedings of the Annual Conference of Japan Society for Educational Technology. Niigata, Japan.

6.Yang, J. C., Lin, Y. L., & Lin, T. Y. (2008, May). Shared Display Groupware Supported Mobile Learning. In Proceedings of the Third Mobile and Ubiquitous Technologies Enhanced Learning Conference (Ubilearn2008). Tainan, Taiwan.

■ 葉 文昌

1.Hsiangen Huang and Wenchang Yeh, "Continuous Si epitaxy by direct current magnetron sputtering", Electrochem. Solid State Lett. 12 (2009) H67-H69.

2.Wenchang Yeh, Hsinchi Chen, Chihping Hsiao, Hsiangen Huang, Jengywan Jeng, "Superlateral growth of a-Ge film by excimer laser annealing", Appl. Phys. Lett. 93, 094103 (2008).

【2000 年度奨学生】

■ 鄭 成春

1.『日本のE P Aについての分析と韓日F T Aへの政策インプリケーション』,2008.12, 対外経済政策研究院(共著)

2.『韓日両国のエネルギー分野における対応の実態と協力方案』,2008.12, 対外経済政策研究院(共著)

3.『日本農業の競争力と韓日F T Aへの政策インプリケーション』,2008.12, 対外経済政策研究院(共著)

4.「第14回気候変動枠組み条約締約国会議の評価と展望」,2009.1, 対外経済政策研究院(単著)

5.「日本の低炭素社会戦略の現況と政策インプリケーション」,2008.8, 対外経済政策研究院(単著)

■ 高 熙卓

1. 「日本近世思想史のための方法論的試論？公共探求の共時性と通時性」、日本思想 No. 14、2008
2. 「東京大学教養学部教育企画と成果？制度と教育内容を中心に」、教養教育研究 V ol. 2-1、2008
3. 「＜神国日本＞の政治思想？例外主義や保守主義の内面化による＜国家＞と＜国民＞形成の戦略」、日本研究論叢、No. 28、2008

■ 林 泉忠

1. 共著：『現代アジア研究 第2巻：市民社会』（アジア政経学会監修、竹中千春等編、慶應義塾大学出版会、2008年）担当部分：「台湾におけるアイデンティティ政治の特徴：創造・想像・記憶が交錯する『近代性』」（287-316頁）。
2. 共著『やわらかい南の学と思想——琉球大学の知への誘い』（沖縄タイムス出版社、2008年4月）担当部分：「沖縄アイデンティティの読み方：県民の帰属意識の調査から」（106-123頁）。
3. 学術論文「沖縄住民のアイデンティティ調査（2005～2007）」『政策科学・国際関係論集』第9号、2009年3月、105-147頁。
4. 学術論文「『返還』の身分政治学：香港旅券の多様化」『民博通信』124号特集「国籍とパスポートの人類学」2009年3月、8-9頁。
5. 雑誌論考「中南海對馬英九全面設防——『胡六點』的真意」『明報月刊』（香港）2009年2月号。
6. 雑誌論考「欲走還留的「去邊陲化」意象？——解讀《海角七號》中的『國境之南』語境」『明報月刊』（香港）2009年1月号。
7. 雑誌論考「兩岸邁向『對等』還有多遠？——陳雲林『台灣行』後的省思」『明報月刊』（香港）2008年12月号60-62頁。
8. 雑誌論考「轉型期的台日關係：馬英九『特別夥伴關係』的來龍去脈」『明報月刊』（香港）2008年11月号、72～74頁。
9. 雑誌論考「解剖馬英九『兩岸特別關係論』——『逆向型「内外有別」』戰略的成本」『明報月刊』（香港）2008年10月号、62-64頁。
10. 雑誌論考「從『中華臺北』之爭看『擱置爭議』之實——北京重掌兩岸關係主導權的三步棋」『明報月刊』（香港）2008年9月号、51-54頁。
11. 雑誌論考「奧運下的中國民族主義——兩岸三地的向心力與離心力」『明報月刊』（香港）2008年8月号、28-32頁。
12. 雑誌論考「西藏事件的文化解讀——中國民族主義 VS 西方價值體系」『明報月刊』（香港）2008年5月号、33-37頁。

■ 任 永

1. "Substrate Properties of Ubiquitin Carboxyl-Terminally Derived Peptide Probes for Protein Ubiquitination" Michael M. Madden, Wenjiao Song, Paul G. Martell, Yong Ren, Jian Feng and Qing Lin, Department of Chemistry, University at Buffalo, The State University of New York, Buffalo, New York 14260-3000, and Department of Physiology and Biophysics, School of Medicine and Biomedical Sciences, University at Buffalo, The State University of New York, Buffalo, New York 14214-3005 ,Biochemistry, 2008, 47 (12), pp 3636-3644
2. Parkin Protects Dopaminergic Neurons against Microtubule depolymerizing Toxins by Attenuating Microtubule-associated Protein Kinase Activation" Yong Ren, Houbo Jiang, Fang Yang, Kazuhiro Nakaso and Jian Feng, From the Department of Physiology and Biophysics, State University of New York, Buffalo, New York 14214 and the Department of Neurology, Tottori University, Yonago, 683-8504 Japan ,THE JOURNAL OF BIOLOGICAL CHEMISTRY VOL. 284, NO. 6, pp. 4009-4017, February 6, 2009.
3. Direct Binding with Histone Deacetylase 6 Mediates the Reversible Recruitment of Parkin to the Centrosome Qian Jiang, Yong Ren, and Jian Feng Department of Physiology and Biophysics, State University of New York at Buffalo, Buffalo, New York 14214, and 2Neurodegenerative Disease Group, New York State Center of Excellence in Bioinformatics and Life Sciences, State University of New York at Buffalo, Buffalo, New York 14203 ,The Journal of Neuroscience, November 26, 2008, 28(48):12993-13002;

【2001年度奨学生】

■ ボルジギン、ブレンサイン

1. 「近代ハラチン．トメドにおける地域利益集団の形成」東北アジア研究シリーズ『内なる他者＝周辺民族の自己認識のなかの「中国」：モンゴルと華南の視座から』2009年3月31日
2. 「中国領モンゴル人が母語で文化人類学を学べることになったー内モンゴル大学の「民族学社会学学院の紹介ー」『日本とモ

ンゴル』43-1 (No. 117) 日本モンゴル協会、2008 年 9 月、pp113-116.

3.『世界史史料』第 9 巻 151「抗壟闘争—胎谷の上奏文 (1902 年 8 月 6 日)、2008 年 6 月、pp250-251.

4.『世界史史料』第 9 巻 150「清末新政と「移民実辺」政策—岑春 煊の上奏文 (1901 年 4 月 20 日)、2008 年 6 月、pp251-252.

■ 範 建亭

1. 著作：『中国建設産業の発展プロセスと産業組織の進化』、上海财经大学出版社、2008 年。

2. 論文：「日本における公共工事談合行為の防止策とその啓発」、『現代日本経済』、2009 年第 1 号

■ ルイン・ユ・ティ

1. Miyaki K, Lwin H, Masaki K, Song Y, Takahashi Y, Muramatsu M, Nakayama T. Association between a polymorphism of aminolevulinic acid dehydrogenase (ALAD) gene and blood lead levels in Japanese. *Int J Environ Res. Public Health* 2009,

2. Miyaki K, Lwin H, Fuji S, Song Y, Muramatsu M, Takahashi Y, Sakurazawa H, Andoh H, Hoshino H, Suzuki N. Salt reduction intervention in workplace based on behavioral theory. -Rational and design of a randomized controlled trial. 1st Asia-Pacific Health Promotion and Education (APHPE) International Conference. Mukahari, Chiba, Japan, 2009.

■ 奇 錦峰

1. Kenji Abe, Rumi Sato, Emika Ohkoshi, JinFeng Qi, Weimin Li, Yuichi Fujii, Hiroshi Nojima. Antipruritic Effects of the Supercritical Fluid Extract from *Cnidii monnieri* fructus (dried fruits of *Cnidium monnieri* Cusson) in Mice. *Pharmacometrics* 75(1/2) 33-38, 2008.

2. Jin-Feng Qi and Yuichi Fujii, Effect of a Series of Natural Compounds on Mouse Model of Immune Thrombocytopenia. ISEH 2008 37th Annual Scientific Meeting, July 9-12, 2008, Boston, Massachusetts, USA.

■ スリスマンティヨ、ヨサファット テトオコ

1. Yashon O. Ouma; J. Tetuko Sri Sumantyo.; and R. Tateishi, Analysis of co-occurrence and discrete wavelet transform textures for differentiation of forest and non-forest vegetation in very-high-resolution optical-sensor imagery, *International Journal of Remote Sensing*, Volume 29, Issue 12 June 2008, pages 3417 - 3456 (Taylor and Francis)

2. Yashon O. Ouma, J. Tetuko Sri Sumantyo, and Ryutaro Tateishi, Multiscale remote sensing data segmentation and post-segmentation change detection based on logical modeling: Theoretical exposition and experimental results for forestland cover change analysis, *Computers & Geosciences*, Volume 34, Issue 7, pp. 715-737, July 2008 (Elsevier)

3. J.T. Sri Sumantyo and Jalal Amini, "Model for Removal of Speckle Noise in SAR Images (ALOS PALSAR)," *The Canadian Journal of Remote Sensing*, Vol.34, No. 6, pp. 503-515, December 2008 [link]

4. M.M. Rahman, J.T. Sri Sumantyo, and M. Sadek, "Microwave and optical image fusion for surface and sub-surface feature mapping in Eastern Sahara," *International Journal of Remote Sensing* (Taylor and Francis) (Accepted)

【2002 年度奨学生】

■ イミテ、アブリズ

1. A Nafion Film / K⁺-exchanged glass Optical Waveguide sensor for BTX Detection, *Anal. Chem.*, 2008, 80(20) 7678-7683.

2. Detecting HCl Gas by Congo Red cross-linked PVA Thin Film / K⁺ Ion-exchanged Glass Optical Waveguide, *Chinese Journal of Analytical Chemistry*, 2008, 36(10) 1435- 1439 (Chinese)

3. Fabrication of the Optical waveguide Ethanol Gas Sensor, *Imaging Science and Photochemistry*, 2008, 26(4) 285-290 (Chinese)

4. SO₂ Detection by Triethanolamine Complexes of Copper Doped PVA Composite film / K⁺ Ion-exchanged Glass OWG Sensor Element, *CHINESE JOURNAL OF SENSORS AND ACTUATORS*, 2008, 21(10) 1665-1668 (Chinese)

5. The Application of Optical Waveguide Element for the Sulfur Dioxide Determination, *Chinese Journal of Spectroscopy Laboratory*, 2008, 25(3) 435-439 (Chinese)

6. Progress in highly sensitive composite optical waveguide sensors, *CHEMICAL SENSORS*, 2008, 28(2) 12-19 (Chinese)

7. Optical Waveguide Sensor for Volatile Organic Compounds Detection, *CHEMICAL SENSORS*, 2009, 29(1) 11-13 (Chinese)

■ 于 曉飛

1. ホジェン族における女性の地位の変遷—女性と婚姻・家庭、そして社会変動との関係に関する一考察—,『桜文論集』第71巻, 日本大学法学部, pp47-64, 2008年7月25日
2. ホジェン族の謡におけるリフレインの役割について, アジア民族文化研究 第8号, PP 81-109, アジア民族文化学会, 2009年3月

【2003年度奨学生】

■ フスレ

1. 「内モンゴルにおける文化大革命直前の政治状況についての一考察——内モンゴル大学における“民族分裂主義分子”批判運動を中心に——」『学苑』No.811、2008年5月、24-37ページ。
2. Imanishi Junko, Ulziibaatar Demberel, Husel Borjigin, A New Global Order in North East Asia : Proceedings of the International Symposium on Global Order from the Perspective of Archives, History, Literature, and Media—— Focus on North East Asian Society ——, Fukyosha, 2009.3.
3. 「国際学術研討会“従歴史、文学、伝媒、档案資料透視全球化之秩序——以東北亜社会为中心”側記」『蒙蔵現況双月報』第17巻第6期、2008年11月、28-40ページ。.

■ 金 賢旭

1. 『翁の生成』思文閣出版、2008年12月
2. 「日本演劇の起源と渡来文化」『日本研究』11号、2009年2月（高麗大学日本研究所）

■ 林 少陽

1. 「現代思想としての西脇の詩学理論——そのロマン主義とヘーゲル主義批判をめぐる」『日本思想史研究』第9号（東京大学日本思想史・思想史論研究会、2008年9月、74－100頁）
2. 漢字圏文脈のモダニズム文学——近代修辞批評系譜の中の横光利一の批評理論について」『比較文学研究』92号「横光利一特集号」、東京大学比較文学会（2008年11月、47－64頁）。
3. 「黄侃の「文」解釈と章炳麟及び劉師培との関連—黄侃の『文心彫龍札記』をめぐる」『九葉読詩会』第4号、駒沢大学・九葉読詩会、2009年3月、54－81頁。
4. 「漢字圏文脈のモダニズム文学としての日中新感覚派文学：東京—上海—香港」『華南地域社会の歴史的淵源と現在』（2007年＜平成19年度＞～2008＜平成20＞年度 科学研究費補助金基盤研究＜C＞課題番号19510245、代表谷垣真理子）研究報告書、2009年（平成21）年3月、＜SPAN lang=EN-US＞69－84頁。

■ ユン ヒスク

1. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-teak Hyeon
"Fabrication of hierarchically porous bioactive glass ceramics", Key Engineering Materials, 361-363, 285-288, 2008
2. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-taek Hyun
"Preparation of 3 dimensional cubic ordered mesoporous bioactive glasses", Solid State Science, 10, 1083-1092, 2008
3. Hui-suk Yun, Seung-eon Kim, Yong-taek Hyun, Su-jin Heo, Jeong-wook Shin "Hierarchically mesoporous-macroporous bioactive glasses scaffolds for bone tissue regeneration", J. of Biomedical Materials Research: part B, Appl. Biomater. 87B, 374-380, 2008
4. ユンヒスク、キンスンオン、ヒョンヨンテック、"ナノバイオ材料、" 機械と材料、20, 9-24, 2008
5. Jungho Ryoo, Dong-Soo Park, Byung-Dong Hahn, Jong-Jin Choi, Woon-Ha Yoon, Kun-Young Kim and Hui-Suk Yun
"Photocatalytic TiO2 thin films by aerosol deposition: From micron-sized particles to nano-grained thin film at room temperature, Applied Catalysis B Enviromental, 83, 1-7, 2008
6. Su-jin Heo, Seung-eon Kim, Jie Wei, Dong-hwa Kim, Yong-taek Hyun, Hui-suk Yun, Jeong-wook Shin
"In-vitro and animal study of novel nano-HA/PCL composite scaffolds fabricated by layer manufacturing process", Tissue Engineering, 14, 1-12, 2008
7. Hui-suk Yun, Jun-jin Yoon, Eui-kyun Park, Seung-eon Kim, Yong-taek Hyun
"Preparation of self-standing mesoporous bioactive glass/biodegradable polymer composite thin films using water casting method", Journal of Korean Ceramic Society, 45, 631-637, 2008

8. S.J. Heo, S.E. Kim, J. Wei, Y.T.Hyun, H.S. Yun, D.H. Kim, J.W. Shin, J.W. Shin

"Fabrication and characterization of novel nano- and micro-HA/PCL composite scaffolds using a modified rapid prototyping process", J. of Biomedical Materials Research: part A, 89(1) 108, 2009

■ 臧 俐

1. 共著『現代日本の教師を考える』岩本俊郎・浪本勝年他 10 名、(株)北樹出版、2008 年 10 月、P.82~89
2. 「日本の教師教育改革―試析近年日本提高教師素質能力的政策」中国教師教育學術研究季刊『当代教師教育』2008 年第 2 号、2008 年 6 月、中国国際図書貿易総公司、P.43~47
3. 共著「東亜的教師教育与如何提高教師的素質能力」臧俐・呉雲助、『安慶師範大学学報』(中国)第 27 卷 2008 年第 3 期、2008 年 3 月、中国国際図書貿易総公司、P.13~15
4. 共著「東亜教育改革与教師素質培養 ―“第一屆東亜教師教育研究國際研討会”綜述―」呉雲助・臧俐、中国人文社会科学核心期刊『教師教育研究』(双月刊)第 20 卷 総第 118 期、2008 年 7 月、北京報刊發行局、P.51~54
5. 「1990 年代以降の教員の『資質』向上策」『東海大学短期大学部紀要』第 42 号、2009 年 3 月、東海大学出版会、P.49 ~ 53
6. 「『初任者研修』に見る都県教育委員会施策の変容」『研究資料集』No.16(2008)、2009 年 1 月、東海大学教育研究所、P.70 ~ 83

【2004 年度奨学生】

■ 李 濟宇

1. 齊藤潤, 横田泰宏, 伊達健介, 李濟宇, 大谷順, 高野大樹 (2008), 遠心模型実験を用いたトンネル掘削に伴う切羽奥の地中変位分布, 第 43 回地盤工学研究発表会講演集, 地盤工学会, pp.1461-1462
2. 伊丹洋人, 上本勝広, 吉田輝, 北本幸義, 李濟宇, 吉迫和生, 藤崎勝利, 山田岳峰 (2008), 冷熱伝導材による地盤凍結の急速化効果, 第 43 回地盤工学研究発表会講演集, 地盤工学会, pp.1479-1480
3. 李濟宇, 吉迫和生, 大保直人, 坂上貴士 (2008), 道路斜面における液状化に因らないすべり発生量予測に関する研究; 時間履歴解析による接近について, 土木学会第 62 回年次学術講演会講演概要集, 土木学会, pp.629-630
4. 横田泰宏, 李濟宇, 伊達健介, 山本拓治, 北本幸義 (2008), 切羽補強工法の先行変位抑制効果に関する基礎的検討, 土木学会第 62 回年次学術講演会講演概要集, 土木学会, pp.319-320
5. 横田泰宏, 李濟宇, 伊達健介, 山本拓治 (2008), 切羽補強工法の設計手法に関する研究, 第 12 回岩の力学国内シンポジウム論文集, JSRM. pp.1-7.

■ 孟 子敏

1. 「『金瓶梅詞話』における「把」・「将」についての考察」、『松山大学論集』、第 20 卷 第 2 号、『金村毅教授記念号』、松山大学 2008 年 6 月。
2. 「『金瓶梅詞話』における語気助詞「也」」、『言語文化研究』、第 28 卷 第 1 号、松山大学、2008 年 9 月。

【2005 年度奨学生】

■ 包 聯群

1. 「ドルブットモンゴル族の言語使用と言語意識調査」、『中国社会言語学』、2007 年第 2 期、117-129 頁、商務印書館 (2008 年印刷)。(原文中国語)。
2. 「中国黒龍江省ドルブットモンゴル族自治州における成人教育について」、『TOAFAEC 東アジア社会教育研究』No13, 2008 年、160-169 頁。東京・沖縄・東アジア社会教育研究 (原文日本語)。

■ 韓 珺巧

1. Field Test Results of Automated Demand Response in a Large Office Building, Proceedings for the Eighth International conference on EcoBalance 2008, December 2008, Junqiao Han, Mary Ann Piette and Sila Kiliccote

■ 韓 京子

1. 「庭園都市江戸の形成と成長過程」(『日本文化研究』(2008 年 7 月、東アジア日本学会))

2. 「日本近世戯曲の江戸表象研究」(『日本思想』、2008 年 12 月 31 日、日本思想史学会)

■ 金 娟鏡

「準拠モデルとの出会いが韓国人母親の障害受容に及ぼす影響」内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸 太一(編)『PAC 分析研究・実践集 1』第 4 章 ナカニシヤ出版 Pp.91-106 2008

■ 藍 弘岳

1. 「徳川前期における明代古文辞派の受容と荻生徂徠の「古文辞学」——李・王関係著作の将来と荻生徂徠の詩文論の展開——」『日本漢文学研究』第 3 号、2008 年 4 月。
2. 「荻生徂徠の翻訳方法論——訓読と徂徠の「訳学」——」『翻訳学研究集刊』第 11 輯、2008 年 12 月(中国語)。

■ 王 雪萍

1. 『日本人は天生勤奮の国—日本社会経済発展の啓示』朱建栄主編、王雪萍・徐顕芬副主編、(中国)世界知識出版社、2008 年 10 月、199 頁。
2. 『中国の人的資源』田雪原・王国強編中国人口学会著、法政大学大学院エイジング総合研究所(祁景澄・袁媛・王雪萍)訳、法政大学出版局、2008 年 6 月、518 頁。
3. 王雪萍・苗丹国「改革開放以来中国留日回国人材現状研究」、『世界教育情報』(中国)2008 年 6 月、pp88—91。
4. 王雪萍「改革開放後中国的回國留学生就業制度改革和留学生的海外滯留問題—以向日本派遣 379 名本科留学生為例」、『関西学院大学外国語紀要社会科学編』、2009 年 2 月、101—117。
5. 王雪萍「留日学生の選択—〈愛国〉と〈歴史〉」、『1945 年の歴史認識』、東京大学出版会、2009 年 3 月、203-232
6. Yoshika Sekine, Xueping Wang "Policy Coordination beyond Borders: Japan-China Environmental Policy Practices in Shenyang and Chengdu, China", 『Insecurity in East Asia, Japan』, United nations University Press, 2009 年 3 月

■ 王 健歡

Maki Y, Wong KFK, Sugiura M, Ozaki T, Sadato N (2008) "Asymmetric control mechanisms of bimanual coordination: An application of directed connectivity analysis to kinematic and functional MRI data" *NeuroImage* 42, 1295-1304

■ 趙 長祥

1. Case study based on "disruptive innovation" theory--Analysis on entrepreneurship and development process of the biggest asian online survey company(AIP)-- 南開大学エントルブルヌアシップフォーラム論文集 2008.9
2. AIP Case Study Based on Disruptive and Life Cycle Theory-- *Journal of Management Case Studies* 大連理工大学 2008.12
3. Growth model research on Multi-utilization of Technology power in Hisense Group-- 2009.3 四川大学 2009 戦略管理国際会議論文集(2009ICSM)

【2006 年度奨学生】

■ 梁 蘊嫻

『李卓吾先生批評三国志真本』(宝翰楼本)の挿絵について—合戦場面の表現を中心に—(中国古典文学挿画集成・第六集『全相平話五種 三国志演義(宝翰楼本)』(遊子館、2008.1)。

■ シム、チュン キャット

1. 『専門性から「ものづくり」へ③ 学業困難な生徒への対応 ～ 日本・工業高校とシンガポール・ITE の比較』月刊「高校教育」2008 年 8 月号
2. 「シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究 ～ 選抜度の低い学校が果たす教育的・社会的機能と役割」東洋館出版社、2009 年 2 月
3. 「学校教育に対する保護者の意識調査 2008 ～ 子どもを学力別に差異化することに対する保護者の意識とその変化」Benesse 教育研究開発センター、2009 年 3 月

■ ウィーラシンハ・ナリン

Nalin S. Weerasinghe, Suguru Watanabe, Takeshi Hashimoto, and Shui chi Itoh, "A coded convolutional spreading

CDMA system with turbo equalization for downlink transmission over a frequency selective fading channel," IEEE Trans. Communications, vol.57, No2, pp.573-582, Feb. 2009.

【2007 年度奨学生】

■ 金 玖淑

1. 金玖淑「小川敬吉と 1930 年代の修徳寺大雄殿修理工事」『至心歸命禮 - 修徳寺！千年之美』（大雄殿建立 700 年記念特別展示会図録）、韓国：修徳寺檀越聖寶館、2008 年 10 月、pp.287 ~ 300
2. 李明善・金玖淑「景観保存制度にみる韓国の歴史的景観保存の現状と課題」『学術フロンティア推進事業「文化遺産と芸術作品を自然災害から防御するための学理の構築」2008 年度末報告書』、立命館大学歴史都市防災研究センター、2009 年 3 月、pp.94 ~ 99

■ 朴 昭炫

1. 「『アジア』における美の消費：帝国主義的文化芸術政策の原風景」『文化科学』53 号（2008 春）。
2. 「モダニズムの（非）領土：美術史と対決する」『BOL』8 号（2008）。
3. 「画壇改革・近代超克・抽象美術：戦時期日本における『前衛』としての批評家運動」『美術史学報』31 集（2008 年 12 月）。
4. 「『近代美術館』、帝国を夢見る：徳寿宮美術館の誕生」『現代美術館研究』19 集（2008 年 12 月）。
5. 「人文学としての文化政策研究」『文化政策論叢』21 集（2009 年）。
6. 「アンフォルメルと地政学と『行動する画家』、その概念的再配置の系譜」『PLATFORM2008』（2009）。
7. 「境界としての『演劇』、その汚染の戦略：美術と生活の関係をどうやって（再）組織するか」『PLATFORM2008』（2009）。
8. 「ANTI-MUSEOLOGY あるいは文化革命の系譜学：現代美術史と制度化の問題」『現代美術史研究』（2009）。

■ 王 剣宏

1. 大深度地下水道管の外水圧による座屈挙動に関する実験的研究，トンネル工学論文集，Vol.18，pp.45-52，2008.11，天野裕基，満田 規夫，王 剣宏，小泉 淳
2. Buckling Investigation and Design Consideration for New Water Tunnel Structure, Proceedings of Eleventh East Asia-Pacific Conference on Structural Engineering & Construction (EASEC-11), Nov. 19-21, 2008, Taipei, TAIWAN, Jianhong WANG, Norio MITSUDA, Yuki AMANO, and Atsushi KOIZUMI.
3. 大深度地下水道管の外水圧による座屈に関する理論的研究，土木学会論文集 A，Vol.64，No.3，pp.588-602，2008.7，王 剣宏，小泉 淳。

■ 顔 海念

Yan H, Koyano S, Inami Y, Yamamoto Y, Suzutani T, Mizuguchi M, Ushijima H, Kurane I, Inoue N. Genetic linkage among human cytomegalovirus glycoprotein N (gN) and gO genes, with evidence for recombination from congenitally and post-natally infected Japanese infants. J Gen Virol. 2008. Sep. 89:2275-9.

■ ヤロスラフ、シュラトフ

1. モノグラフィ（ロシア語）：« На пути к сотрудничеству : российско - японские отношения 1905-1914 » (『協力に向かう日露関係 (1905-1914)』) ロシア科学アカデミー東洋学研究所、モスクワハバロフスク、2008.
2. Strategic balance in North-Eastern Asia after the Russo-Japanese war – From the point of Russian military circles (1905-1914) – 「東北アジアの新しい秩序を探る」、今西淳子、Ulziiabaatar Demberel, Husel Borjigin 編。風響社、2009（モンゴル、ウランバートルにおける国際シンポジウム（2008 年 6 月 23 ~ 26 日）の論文集）。

【2008 年度奨学生】

■ 馮 凱

1. K. Feng and S. Kaneko, 2009, "Thermohydrodynamic Study of Multiwound Foil Bearing Using Lobatto Point Quadrature", ASME Journal of Tribology, 131(2), 021702
2. K. Feng and S. Kaneko, 2008, "A Study of Thermohydrodynamic Features of Multi Wound Foil Bearing Using Lobatto Point

Quadrature”, Proceedings of ASME Turbo Expo 2008, June 9-13, 2008, Berlin, Germany

3.K. Feng and S. Kaneko, 2008, “Prediction of Static Performance of Bump-type Foil Bearings and Validation,” Proceedings of CIST2008 & ITS=IFToMM2008, Beijing, China

4. 馮 凱, 金子成彦, “バンプ型フォイル軸受性能の解析方法の提案: リンク・スプリング計算モデル”, 日本機械学会 2008 年次大会, 横浜国立大学

■ 劉 健

「日本語の『～中』について」, 『日語研究』, 2008 年 12 月, 商務印書館

■ ネメフジャルガル

1. 「内モンゴル自治区の牧畜地域における労働力問題」 亜細亜大学大学院『経済学研究論集』第 33 号、2009 年 3 月。

2. 共著: 小林熙直編『中国の台頭とそのインパクトⅢ』 亜細亜大学アジア研究所、2009 年 3 月。

■ プアン キムチャイヤラシー

Kimchhayarasy Phuong, Kazuo Kakii and Toshiyuki Nikata, “Intergeneric coaggregation of non-flocculating *Acinetobacter* spp. isolates with other sludge-constituting bacteria”, Journal of Bioscience and Bioengineering, Vol. 107, No. 4, pp.394-400 (2009)

■ 宋 剛

1. 「『没理想論争』と日本の初期自然主義文学の誕生」『日本研究』(中国) 2008 年第 3 号

2. 「魯迅と周作人の漱石受容に関する一考察」『桜美林国際学論集 Magis』第 13 号 2008 年 12 月

3. 「『重右衛門の最後』に関する一考察—— 遺伝・環境に制限された『自然児』と『濁った世』」『桜美林世界文学』第 5 号 2009 年 3 月

■ ヴェルノ、ヘリ リース

『円珍の法身観について』、学習院大学人文科学論集 17 号にて (出版社: 弘学社) 2008 年 9 月

■ 王 偉

Wei Wang, Kenzou Nonami, Mitsuo Hirata: Model Reference Sliding Mode Control of Small Helicopter X.R.B based on Vision, International Journal of Advanced Robotic Systems, Vol.5, No.3, pp.235-242, 2008.

■ 修 震

1. 修震, 北川能, 留滄海, 塚越秀行, 呉平東, “インターネットを用いた空気圧マスタ・スレーブシステムのバイラテラル遠隔制御に関する研究”, 日本フルードパワーシステム学会論文集, Vol.44 No.3, 2009.

2. Zhen XIU, Ato KITAGAWA, Canghai LIU, "An Internet-based Tele-rehabilitation System With Single-Master and Multi-Slaves", the Proceedings of the 7th JFPS International Symposium on Fluid Power, Vol.3, pp.775-780, 2008

3. Zhen XIU, Ato KITAGAWA, Hideyuki TSUKAGOSHI, Canghai LIU, "An Internet-based Tele-rehabilitation System with Scattered Multiple Patients ", the Proceedings of Telerobotics Workshop on 2008 IEEE International Conference on Robotics and Automation(ICRA2008), pp.88-93, 2008

■ 陸 載和

1. 「感恩寺址東・西三層石塔出土舍利容器における四天王像に関する一試論」『武蔵野美術大学大学院博士後期課程 研究紀要』no.2、2009 年 3 月、武蔵野美術大学

2. 「韓国の四天王像に関する図像学的研究」『小林節太郎記念基金論文集』 2009 年 2 月、富士ゼロックス小林節太郎記念基金

■ 張 建

1. 「中国都市部における高校段階教育の格差と階層」『東京大学教育研究科紀要』、2008,3, 第 47 巻 pp461-470

2. 「中国市場経済における「教育産業化」」『日中教育研究交流会議研究年報』, 2008,10, 第 10 号 pp1 - 9

3. 第Ⅲ部 第 1 章「中国における教員養成系大学院制度をめぐる動向」『教員養成系大学院の制度と教育実態』(研究者代表 和井田 清司 平成 18 ～ 20 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究課題番号 18330164), 2008,9,pp307-326

【2009 年度奨学生】

■ ダルウィッシュ、ホサム

"Political Activism under Mubarak's Electoral Engineering in the 1980s."『日本中東学会年報』第24－1号、2008年9月25日、日本中東学会

■ 金 英順

1. 「東アジアの孝子説話にみる自己犠牲の〈孝〉—忍辱太子譚を中心に—」(『佛教文学』32号、2008.4)
2. 「東アジアの仏伝にみる兄弟対立と孝—善友太子譚を中心に—」(立教大学院『日本文学論叢』7号、2008.8)
3. 「東アジア孝子説話にみる異国再会譚—「燈台鬼」と「金遷」説話を中心に—」(『アジア遊学』1004号、2008.9)
4. 「韓国の食文化と孝子説話」(『国文学解釈と鑑賞』別冊『文学に描かれた日本の「食」のすがた』所収、至文堂、2008.9)
5. 「釈迦と提婆達多の物語」(『歴史と古典 今昔物語集を読む』所収、吉川弘文館、2008.12)
6. 「聖徳太子伝にみる中国と朝鮮半島」(『歴史と古典 今昔物語集を読む』所収、吉川弘文館、2008.12)
7. 「鈴鹿本の空白をめぐる」(『歴史と古典 今昔物語集を読む』所収、吉川弘文館、2008.12)

■ 郭 栄珠

KWAK, Y.J., KONDOH, Akihiko, `A Study on the Assessment of Multi-Parameter Affecting Urban Floods Using Satellite Image; A Case Study in Nackdong Basin, S.Korea`, Asia Oceania Geoscience Society, 2008

■ リンチン

1. 「内モンゴルにおける『三面紅旗』政策に関する考察」『中国研究月報』No.720 (2008年2月)、20～39頁。
2. 「内モンゴルの牧畜業の社会主義的改造の再検討」『アジア経済』第49巻第12号 (2008年12月)、2～26頁。

■ シェルマトフ、ウルグベック

1. シェルマトフ ウルグベック「将来債権譲渡担保と国税債権の優劣—アメリカ合衆国における連邦租税リーエンと統一商事法典上の担保権の優劣を通じて—」法学研究論集29号 (2008年9月) 181頁以下。
2. シェルマトフ ウルグベック「ウズベキスタンにおける土地に対する権利」法学研究論集30号 (2009年2月) 159頁以下。

■ イェ・チョウ・トゥ

1. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Positional Prediction: Consonant Cluster Prediction Text Entry Method for Burmese (Myanmar Language)", Proceedings of the 26th ACM Conference on Human Factors in Computing Systems (CHI 2008), April 5~10, 2008, Florence, Italy, Page 3783-3788 【査読発表論文】[2nd Prize for CHI08 Student Research Competition 受賞]
2. Ye Kyaw Thu, Ouk Phavy and Yoshiyori URANO, "Positional Gesture for Advanced Smart Terminals: Simple Gesture Text Input for Syllabic Scripts Like Myanmar, Khmer and Bangla", Proceedings of the first ITU-T Kaleidoscope Academic Conference, May 12~13, 2008, Geneva, Switzerland, Page 77-84 【査読発表論文】[Young Author Recognition Certificate 授与]
3. Phavy Ouk, Ye Kyaw Thu, Mitsuji MATSUMOTO and Yoshiyori URANO, "A Word-Based Predictive Text Entry Method for Khmer Language", Proceedings of the 2008 International Conference on Information Reuse and Integration, July 13~15, 2008, Las Vegas, USA, Page 214-219 【査読発表論文】
4. Ye Kyaw Thu, "Positional Mapping, Positional Gesture and Positional Prediction for Syllabic Languages: Study with Myanmar, Bangla and Khmer", Proceedings of the 9th APRU Doctoral Students Conference, July 14~18, 2008, Vladivostok, Russia 【査読発表論文】
5. Ouk Phavy, Ye Kyaw Thu and Mitsuji MATSUMOTO, "Khmer Word-based Predictive Non-QWERTY Soft Keyboard in Stylus-based Devices", Proceedings of the 2008 IEEE Symposium on Visual Languages and Human-Centric Computing (VL/HCC 2008), September 15~19, 2008, Herrsching am Ammersee, Germany, Page 225-232 【査読発表論文】
6. Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Common and User-Friendly Text Input Interfaces for Asian Syllabic Languages on Mobile Devices", Adjunct Proceeding of the 21st annual ACM Symposium on User Interface Software and Technology, October 19~22, 2008, Monterey, California, USA, Page 27-30 【査読発表論文】
7. Ye Kyaw Thu, Shrestha PRADYUMNA and Yoshiyori URANO, "Analysis on Possible Combinations of Vowels with a Consonant of Nepali", Proceedings of the 6th International Conference on Computer Applications (ICCA2009), February 26~27, 2009, Yangon, Myanmar, Page 17-23

- 8.Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "LRUDC (Left, Right, Up, Down and Center) Button for Myanmar Language Software Keyboard", the 128th Human Computer Interaction Symposium 2008, May 28~29, 2008, Translational Research Informatics Center (TRI), Kobe, Japan, SIGHCI, Information Processing Society of Japan (IPSJ) SIG Technical Reports, 2008-HCI-128, Page 159-164
- 9.Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "A Comparison of Myanmar PC Keyboard Layouts", the 131st Human Computer Interaction Symposium 2009, Jan 26~27, 2009, Yufuin Kouminkan, Yufuincho, Yufu, Oita Prefecture, Japan, SIGHCI, Information Processing Society of Japan (IPSJ) SIG Technical Reports, 2009-HCI-131, Page 15-21
- 10.Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Analysis on Four Directional Arrow Keys (4DAK) and Left, Right, Up, Down and Center (LRUDC) Button Text Input Interfaces for Myanmar Language", Proceedings of the Forum on Information Technology (FIT2008), September 2~4, 2008, Shonan Fujisawa Campus, Keio University, Fujisawa, Japan, Page 31-34 【査読発表論文】
- 11.Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "Positional Prediction Software Keyboard Layout for Myanmar PDA", Proceedings of the 2008 IEICE Society Conference, September 16~19, 2008, Meiji University, Kawasaki, Japan, Page S-155~S-156
- 12.Ye Kyaw Thu and Yoshiyori URANO, "RomanPP: Myanmar Text Typing with Consonants Romanization and Possible Vowel Combinations Prediction with 4 Directional Arrow Keys", Proceedings of the 71st IPSJ National Conference, March 10~12, 2009, Ritsumeikan University, Biwako-Kusatsu Campus, Shiga Prefecture, Japan, Page 4-17~4-18
- 13.Ye Kyaw Thu, Shrestha PRADYUMNA and Yoshiyori URANO, "PP_Clickwheel: Positional Prediction Nepali Text Input Interface with Clickwheel", Proceedings of the 2009 IEICE General Conference, March 17~20, 2009, Ehime University, Matsuyama, Japan, Page S-49~S-50
- 14.Huotely YIN, Ye Kyaw Thu, and Yoshiyori URANO, "Online Khmer Handwriting Character Recognition by employing Nearest Neighbor and DTW Algorithms", Proceedings of the 2009 IEICE General Conference, March 17~20, 2009, Ehime University, Matsuyama, Japan, Page S-47~S-48
- 15.Chinzorig Sashka, Ye Kyaw Thu, and Yoshiyori URANO, "Personalized review based recommendation system for tourism domain", Proceedings of the 2009 IEICE General Conference, March 17~20, 2009, Ehime University, Matsuyama, Japan, Page 95

■ 朱 琳

「梁啓超における中国史像の構想——「専制進化」という視点から」『二十一世紀東北亜日本研究論文集』北京：学苑出版社、2009年2月。

◇ 設立の趣旨について

近年の交通・通信手段の発達により、海外旅行者の数はめざましく増加し、また、世界中の出来事が即座に伝えられるようになりました。このような時代に生きる私達は、もはや国家という単位ではなく、国際社会の一員として物事をとらえていかなければならないのではないのでしょうか。しかし、現在経済大国となった日本は、国際的な活動をもっと積極的に押し進め、世界に対してより大きな役割を果たすことができるのではないかと指摘されています。

渥美国際交流奨学財団は、1993年10月14日に物故いたしました渥美健夫鹿島建設名誉会長の遺志により、このような状況にあります日本の国際化の推進にささやかながらもお役に立ちたいという願いをこめて設立されました。当財団は諸外国から日本の大学院に留学している優秀な学生に対し、奨学援助をいたします。日本にやって来た留学生が、学問を成就するだけでなく、豊かな文化や社会に触れ、より大きな収穫を得ることができまうようお手伝いさせていただきたいと思います。

渥美氏は、アジア、西太平洋建設業協会国際連盟（IFAWPCA）会長、世界建設業連盟（CICA）会長、及び社団法人CISV日本協会会長を長年にわたって勤め、国際交流に尽くしてまいりました。CISV（国際こども村）とは、「世界の平和を築くためには子供の時から機会を与え、国籍・人種・言語を越えて同じ人間であることを肌で実感させることが何より大切」という理想のもとに1951年アメリカで始められた平和運動で、毎年世界各地で子供達を集めてキャンプを行なっています。

また、渥美健夫・伊都子夫妻は、ニューヨークのコロンビア大学に日本美術史の冠講座を寄付いたしました。これによりコロンビア大学では、日本美術史の教授職が常置されることになりました。

渥美国際交流奨学財団は、渥美氏の国際交流の促進への信念を引き継ぎ、一層の発展をめざして、活動してまいりたいと思います。若者たちがより大きな世界を知るよう支援させていただくことによって、人々の心の中に国際理解と親善の芽が生まれ、やがては世界平和への道がひらかれてゆくことを願っております。



◇ 2008 年度業務日誌

4 月	10 日	4 月例会：食事会（於：中国料理 豫園）	
5 月	8 日	5 月例会：個人面談（13 日まで）	
	10 日	第 31 回 SGRA フォーラム 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」 （於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 46	
	12 日	2007 年度会計監査	
6 月	3 日	2007 年度年報発行	
	3 日	第 29 回理事会・評議員会（2007 年度事業報告と決算報告）・親睦会（6 月例会）	
6 月	23~25 日	国際シンポジウム「歴史・文学・メディア・アーカイブスからみたグローバル秩序 ー北東アジア社会を中心に」 （於：モンゴル・ウランバートル モンゴル日本センター）	
7 月	1 日	募集要項配布（関東地方の大学に通知、ホームページに掲載）	
	2 日	7 月例会：東京国際空港 D 滑走路新設工事現場見学会	
	19 日	軽井沢リクリエーション旅行（21 日まで）	
	20 日	第 32 回 SGRA フォーラム in 軽井沢「オリンピックと東アジアの平和繁栄」 （於：鹿島建設軽井沢研修センター） SGRA レポート # 47	
9 月	1 日	2009 年度奨学生応募受付開始	
	1 日	9 月例会：個人面談（16 日まで）	
	10 日	文部科学省実地検査	
	26 日	第 3 回 SGRA チャイナフォーラム：延辺大学総合棟 7 階報告庁	
	28 日	第 3 回 SGRA チャイナフォーラム：北京大学外国語学院民主楼 「一燈やがて万燈となる如く：アジアの留学生と生活を共にした協会の 50 年」 SGRA レポート # 48	
	30 日	2009 年度奨学生応募締め切り（応募者総数 128 名）	
10 月	2 日	10 月例会：食事会（於：カンボジア料理 カンボジア）	
	8 日	2009 年度奨学生書類審査	
	23 日	2009 年度奨学生候補者予備面接（29 日まで）	
11 月	4 日	渥美奨学生の集い：八城政基様をお迎えして「グローバル金融危機はなぜ起きたのか」 （於：鹿島新館 / 渥美国際交流奨学財団ホール）	
	29 日	2009 年度奨学生最終選考・面接	
12 月	1 日	12 月例会：個人面談（8 日まで）	
	6 日	第 33 回 SGRA フォーラム「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」 （於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 49（近日発行予定）	
1 月	10 日	1 月例会：新年会	
2 月	2 日	2 月例会：個人面談（5 日まで）	
	21 日	第 34 回 SGRA フォーラム 第 8 回日韓アジア未来フォーラム「日韓の東アジア地域構想と中国観」 （於：東京国際フォーラム） SGRA レポート # 50（編集中）	
3 月	7 日	3 月例会：2008 年度奨学生研究報告会	
	18 日	第 30 回理事会・評議員会（2009 年度事業計画と収支予算について）	
	27 日	2008 年度奨学生最終食事会（於：ドイツ料理「カイトル」）	

◇ 2008 年度収支決算明細書

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入		事業費	43,279,473
基本財産配当金	28,000,000	管理費	11,593,659
基本財産債券利息	11,960,000	次期繰越収支差額	75,640,283
			(内 5,000 万円は奨学資金積立金)
寄附金収入			
寄附金（一般）	13,800,000		
寄付金（指定）	2,390,000		
雑収入			
運用財産受取利息	235,173		
貸与奨学金返戻収入	209,500		
前期繰越収支差額	73,918,742		
収入合計	130,513,415	支出合計	130,513,415

◇貸借対照表 (2009 年 3 月 31 日現在)

(単位：円)

資産の部		正味財産の部	
I. 流動資産		I. 基本金	
1. 現金	89,964	1. 基本財産	1,468,000,000
2. 普通預金	25,550,319	II. 当期収支差額	75,640,283
流動資産計	25,640,283		
II. 固定資産			
基本財産			
1. 投資有価証券	1,465,342,540		
2. 普通預金	2,657,460		
基本財産計	1,468,000,000		
奨学資金積立基金			
定期預金	50,000,000		
固定資産計	1,518,000,000		
資産合計	1,543,640,283	正味財産合計	1,543,640,283

◇財団人名簿

(2009 年 6 月現在)

★ 理事・監事

理事長	渥美 伊都子	CISV 日本協会会長・日本ユニセフ協会常務理事・アジア婦人友好会副会長
常務理事	今西 淳子	関口グローバル研究会代表・CISV International 副会長
理 事	渥美 直紀	鹿島建設株式会社代表取締役兼執行役員副社長
	片岡 達治	元癌研究会癌化学療法センター主任研究員
	加美山 節	国際基督教大学評議員
	加藤 秀樹	構想日本代表・慶應義塾大学教授（総合政策）
	佐藤 直子	プロテニスプレーヤー・コメンテーター・スポーツジャーナリスト
	田村 次朗	慶應義塾大学教授（法学）
	遠山 友寛	TMI 総合法律事務所パートナー（弁護士）
	永山 治	中外製薬株式会社社長
	宮崎 裕子	長島・大野・常松法律事務所パートナー（弁護士）
監 事	石井 茂雄	石井公認会計士事務所所長
	松岡 誠司	元株式会社日本債券信用銀行取締役会長

★ 評議員

青木 生子	日本女子大学名誉教授（国文学）・理事
明石 康	ジョイセフ（家族計画国際協力財団）会長
渥美 雅也	東京水産振興会振興部長
蟻川 芳子	日本女子大学学長・理事・教授（環境分析化学）
岩崎 統子	フォニックス英語研究会代表
植田 兼司	弁護士
嶋津 忠廣	渥美国際交流奨学財団事務局長
長岡 實	資本市場研究会顧問
堀田 健介	グリーンヒルジャパン株式会社代表取締役会長
水谷 弘	専修大学名誉教授（比較文化）
山縣 睦	山縣有朋記念館理事長・栃木産業株式会社社長
八城 政基	株式会社新生銀行会長

★ 選考委員

委員長	畑村 洋太郎	東京大学名誉教授、工学院大学教授（産業機械工学）
	井上 博允	独立行政法人日本学術振興会監事（情報工学）
	片岡 達治	（理事）
	佐野 みどり	学習院大学教授（美術史学）
	田村 次朗	（理事）
	平川 均	名古屋大学教授（経済学）

★事務局

事務局長 嶋津 忠廣
事務局 谷原 正
梁 明玉
F. マキト

◇奨学生名簿

【1995 年度奨学生】

Bambling, Michele バンプリング、ミッシェル：博士（美術史）コロンビア大学（慶應義塾大学）：（在アブダビ）
Gao Lingna 高 玲娜：博士（社会学）一橋大学：（在横須賀）
Gao Weijun 高 偉俊：博士（建設工学）早稲田大学：北九州市立大学国際環境工学部教授、西安交通大学兼職教授（在北九州）
Jin Xi 金 熙：博士（物理情報学）東京工業大学：日本 SGI ㈱
Kwack Jae-Woo 郭 在祐：博士（美術史）学習院大学：日本大学文理学部講師
Maquito, Ferdinand マキト、フェルディナンド：博士（経済学）東京大学：アジア太平洋大学（フィリピン）研究助教授
Park Chul-Ju 朴 哲主：博士（商学）慶應義塾大学：三育義明大学経営学部副教授（在ソウル）
Park Jungran 朴 貞蘭：博士（社会福祉学）日本女子大学：仁済大学社会福祉科副教授（在釜山）
Shi Jianming 施 建明：博士（数理工学・社会工学）筑波大学：室蘭工業大学情報工学科准教授（在室蘭）
Yao Hui 葉 会：早稲田大学（日本文学）：法政大学国際文化情報学部非常勤講師
Youn Seokhee 尹 錫姫：博士（商学）専修大学：仁徳大学観光学部非常勤講師（在ソウル）
阪神大震災被災特別奨学生
Chen Xiao 陳 曉：神戸大学（医学）
Horng Der-juinn 洪 徳俊：博士（経営学）神戸大学：国立中央大学企業管理系副教授（在台湾桃園）
Wang Libin 王 立彬：神戸大学（自然科学）：㈱東洋インキ製造

【1996 年度奨学生】

Chantachote, Viravat チャンタチョテ、ビラバット：博士（法学）慶應義塾大学：タマサート大学法学部准教授、教務部長（在バンコク）
Gulenc, Selim Yucel ギュレチ、セリム・ユジェル：東京大学（政治学）：宗教法人京都ムスリム協会理事、イスラーム文化センター代表（在京都）
Khin Maung Htwe キン・マウン・トウエ：博士（応用物理）早稲田大学：Ocean Resource Production Co., LTD. 社長（在ヤンゴン）
Kim Woong-Hee 金 雄熙：博士（国際政治経済学）筑波大学：仁荷大学校国際通商学部副教授（在ソウル）
Lee Nae-Chan 李 来賛：博士（管理工学）慶應義塾大学：漢城大学経済学部副教授（在ソウル）
Nam Kijeong 南 基正：博士（国際関係論）東京大学：国民大学国際学部副教授（在ソウル）
Park Keunhong 朴 根弘：博士（生命理工学）東京工業大学
Qiao Xin 喬 辛：博士（無機材料工学）東京工業大学：（在ボストン）
Trede, Melanie Maria トレーデ、メラニー・マリア：博士（美術史）ハイデルベルク大学 [学習院大学]：ハイデルベルグ大学東洋美術史研究所（在ハイデルベルグ）
Zhao Qing 趙 青：お茶の水女子大学（比較文化）：（在東京）
Zhu Tingyao 朱 庭耀：博士（船舶海洋工学）東京大学：（財）日本海事協会技術研究所首席研究員 / ハルビン工科大学客員教授

【1997 年度奨学生】

- De Maio, Silvana デマイオ、シルバーナ：博士（日本語学）東京工業大学：ナポリ国立大学オリエンターレ専任講師（在ナポリ）
- Fang Meili 方 美麗：博士（言語学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学外国人講師
- Isananto, Winursito イサナント、ウィヌルシト：博士（応用科学）慶應義塾大学：インドネシア通産省皮革産業開発研究所研究員（在ジョクジャカルタ）
- Kim Woesook 金 外淑：博士（健康科学）早稲田大学：兵庫県立大学看護学部心理学系教授（在神戸）
- Katagiri, Laohaburanakit Kanokwan (Noi) 片桐カノックワン・ラオハブナキット：博士（言語学、日本語教育）筑波大学：チュラロンコン大学文学部日本語講座助教授（在バンコク）
- Lee Hyang-Chul 李 香哲：博士（経済学）一橋大学：光云大学日本学科教授（在ソウル）
- Li Enmin 李 恩民：博士（社会学）一橋大学：桜美林大学リベラルアーツ学群教授
- Nizamidin Jappar ニザミディン、ジャッパル：博士（応用化学）東京大学：キモト・テック（在米ジョージア）
- Wang Yuepeng 王 岳鵬：博士（医学）東京大学：タフツ大学医学部タフツ医療センター分子心臓病研究所研究員（在ボストン）
- Williams, Duncan ウィリアムス、ダンカン：博士（宗教学）ハーバード大学 [上智大学]：カルフォルニア大学バークレー校日本研究センター教授（在米バークレー）
- Zhang Shao-Min 張 紹敏：博士（医学）東京大学：ペンシルベニア州立大学医学部神経と行動学科助教授（在米ハーシー）

【1998 年度奨学生】

- Adiole Emmanuel アディオレ、エマニュエル：博士（政治学）東京大学：ナイジェリア・エネルギー環境研究所主任研究員（在ナイジェリア）
- Cao Bo 曹 波：博士（建設工学）早稲田大学：株式会社北京 NTT データジャパン
- He Zuyuan 何 祖源：博士（先端学際工学 / 光電子工学）東京大学：東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻准教授
- Hu Jie 胡 潔：博士（文学）お茶の水女子大学：名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授（在名古屋）
- Kim Jaesung 金 宰晟：東京大学（仏教学）：仏教大学院大学（在ソウル）
- La Insook 羅 仁淑：博士（経済学）流通経済大学、早稲田大学博士課程修了：国士舘大学政経学部非常勤講師
- Lee JooHo 李 周浩：博士（電子工学）東京大学：立命館大学情報理工学部情報コミュニケーション学科准教授（在滋賀）
- Mailisa マイリーサ：博士（社会学）一橋大学：立教大学非常勤講師
- Sun Yanping 孫 艶萍：博士（医学）東京大学：ハーバード大学ブリッグス病院放射線科准教授（在ボストン）
- Wu Hongmin 呉 弘敏：博士（精密工学）東京工業大学：フクダ電子㈱
- Xu Xiaoyuan 許 曉原：博士（農学生命科学）東京大学：コロンビア大学ナオミベリーセンター研究員（在ニューヨーク）

【1999 年度奨学生】

- Coimbra, Maria Raquel Moura コインブラ、マリア・ハケウ・モウラ：博士（資源育成学）東京水産大学：ペルナンブコ州立大学農水学部応用遺伝子研究室助教授（在ブラジル）
- Hong Kyung-Jin 洪 京珍：博士（化学環境工学）東京工業大学：韓国環境省環境部環境政策室化学物質安全課（在ソウル）
- Hou Yankun 侯 延琨：博士（物理電子化学 / 薬学）東京工業大学：ノムラ・インターナショナル（在香港）
- Ju Yan 具 延：博士（農学）筑波大学：メッツォペーパージャパン（株）
- Li Gangzhe 李 鋼哲：立教大学（経営学 / 経済学）：北陸大学未来創造学部教授（在金沢）
- Mushikasinthorn, Prachya ムシカシントーン・プラチャー：博士（資源育成学）東京水産大学：カセサート大学水産学部助教授（在バンコク）
- Vu Thi Minh Chi ブ・ティ・ミン・チィ：博士（地域研究）一橋大学：ベトナム社会科学院人間科学研究所研究員（在ハノイ）
- Wang Dan 王 旦：博士（音楽）東京芸術大学：バイオリニスト / 昭光物産㈱

Yang Jie Chi 楊 接期：博士（教育工学）東京工業大学：国立中央大学網路学習科技研究所准教授（在台湾桃園）

Yeh Wen-chang 葉 文昌：博士（電子物理工学）東京工業大学：台湾科技大学電子工程科副教授（在台北）

Zhou Haiyan 周 海燕：博士（医学）東京医科歯科大学：たてやまクリニック院長（在富山県）

【2000 年度奨学生】

Jin Zhengwu 金 政武：博士（物質科学）東京工業大学：東芝㈱

Jung Jae Ho 鄭 在皓：博士（物質科学）慶應義塾大学：三星電子 LCD 総括 LCD 開発室開発 3Team(在韓 CheonAnn)

Jung Sung Chun 鄭 成春：博士（経済学）一橋大学：対外経済政策研究院（KIEP）日本チーム長（在ソウル）

Ko Hee Tak 高 熙卓：博士（総合文化）東京大学：延世大学政治外交学科研究教授（在ソウル）

Lim Chuan-Tiong 林 泉忠：博士（国際政治学）東京大学：琉球大学法文学部准教授、ハーバード大学客員研究員（在ボストン）

Molnar, Margit モルナール・マルギット：博士（経済学）慶應義塾大学：OECD 研究員（在パリ）

Naiwala Pathirannehelage, Chandrasiri ナイワラ・パティランネヘラゲ、チャンドラシリ：博士（電子情報）東京大学：日本大学特別研究員（日本学術振興会特別研究員）、東京大学客員研究員

Ren Yong 任 永：博士（医学）群馬大学：ニューヨーク州立大学医学部研究員（在米バッファロー）

Suzuki Sato, Hiromi スズキサトウ、ヒロミ：慶應義塾大学（経済学）：（在東京）

Wu Yuping 武 玉萍：博士（医学）千葉大学：理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター（CDB）（在神戸）

Xu Xiangdong 徐 向東：博士（社会学）立教大学：㈱中国市場戦略研究所代表取締役

Zeng Zhinong 曾 支農：博士（アジア文化）東京大学：（在武漢）

【2001 年度奨学生】

Borjigin, Burensain ボルジギン、ブレンサイン：博士（東洋史）早稲田大学：滋賀県立大学人間文化学部准教授（在彦根市）

Fan Jianting 範 建亭：博士（経済学）一橋大学：上海财经大学国際工商管理大学院助教授（在上海）

Jeon Jin Hwan 全 振煥：博士（建築材料）東京工業大学：鹿島建設㈱技術研究所主任研究員

Jiang Huiling 蔣 恵玲：博士（電子情報工学）横浜国立大学：（株）NTT ドコモ・総合研究所研究主任

Jin Xianghai 金 香海：博士（政治学）中央大学：延辺大学アジア研究センター教授兼副センター長（在延吉）

Kostov, Vlaho コストブ、ブラホ：博士（システム工学）東京都立科学技術大学：パナソニック・ヨーロッパ社（在フランクフルト）

Lee Hyun-Young 李 炫瑛：博士（比較文化）お茶の水女子大学：建国大学校師範大学日本語教育科助教授（在ソウル）

Lee Young-Suk 李 英淑：博士（教育学）筑波大学：釜山大学校師範大学数学教育科非常勤講師（在釜山）

Liang Xingguo 梁 興国：博士（化学生命工学）東京大学：名古屋大学物質制御工学専攻専任講師（在名古屋）

Lwin U Htay ルイン・ユ・ティ：博士（社会医学及び公衆衛生学）東京医科歯科大学：東京大学医学部社会疫学科訪問研究員

Qi Jin Feng 奇 錦峰：博士（薬理学）東京医科歯科大学：広州中医薬大学中薬学院教授（在広州）

Sri Sumantyo, Josaphat Tetuko スリ スマンティヨ、ヨサファット・テトオコ：博士（人工システム科学）千葉大学：千葉大学環境リモートセンシング研究センター准教授

【2002 年度奨学生】

Baek Insoo 白 寅秀：博士（商学）早稲田大学：（在ソウル）

Chen Tzu-Ching 陳 姿菁：博士（国際日本学）お茶の水女子大学：開南大学国際事務中心対外教学組長、台湾大学兼任助理教授（在台北）

Hu Bingqun 胡 炳群：博士（システム工学）日本工業大学：日豊興業株式会社（在名古屋 / 広州）

Iko, Pramudiono イコ、プラムディオノ：博士（電子情報工学）東京大学：インドネシア三井物産（在ジャカルタ）
 Jo Gyuhwan 曹 奎煥：博士（地質学）早稲田大学：新日本石油開発（株）
 Mandah, Ariunsaihan マンダフ、アリウンサイハン：博士（地域社会学）一橋大学：（在米カンザス）
 Mukhopadhyaya, Ranjana ムコパディヤーヤ、ランジャナ：博士（宗教学宗教史）東京大学：名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授（在名古屋）
 Park Young-June 朴 榮濬：博士（国際社会科学）東京大学：国防大学校安全保障大学院副教授（在ソウル）
 Sun Jianju 孫 建軍：博士（日本語学）国際基督教大学：北京大学外国語学院日本語文化学部助教授（在北京）
 Wang Xi 王 溪：博士（電子情報工学）東京大学
 Yimit Abliz イミテ、アブリズ：博士（人工環境システム）横浜国立大学：新疆大学化学化工学院教授（在ウルムチ）
 Yu Xiaofei 于 曉飛：博士（社会文化科学）千葉大学：日本大学法学部准教授

【2003 年度奨学生】

Chae Sang Heon 蔡 相憲：博士（生物生産学）東京農工大学：天安蓮庵大学産学協力担当教授（在韩国天安）
 Chang Kuei-e 張 桂娥：博士（学校教育学—言語文化）東京学芸大学：致理技術学院応用日本語学科専任講師（在台北）
 Husel フスレ：博士（地域文化）東京外国語大学：東京大学大学院総合文化研究科日本学術振興会外国人特別研究員
 Kim Hyeon Wook 金 賢旭：博士（総合文化—表象文化）東京大学：仁荷大学・国民大学非常勤講師（在ソウル）
 Kwak Jiwoong 郭 智雄：博士（経営学）立教大学：九州産業大学商学部商学科専任講師（在福岡）
 Lin Shaoyang 林 少陽：博士（総合文化—言語情報科学）東京大学：東京大学総合文化研究科・教養学部特任助教授
 Lu Yuefeng 陸 躍鋒：東京海洋大学（海洋情報システム）：Merit Intelligence Development Centre, Director（在トロント）
 Piao Zhenji 朴 貞姫：博士（応用言語学）明海大学：北京語言大学外国語学院日本語学部教授（在北京）
 Tisi, Maria Elena ティシ、マリア エレナ：博士（児童文学）白百合女子大学：ボローニャ大学、ペルージャ外国人大学、サレント大学非常勤講師（在ボローニャ）
 Yamaguchi Ana Elisa ヤマグチ、アナ エリーザ：一橋大学（社会学）：上智大学外国語学部助教
 Yun Hui-suk ユン ヒスク：博士（材料学）東京大学：韓国機械研究院付属材料研究所（KISM）（在韓慶南道昌原）
 Zang Li 臧 俐：博士（学校教育学—教育方法論）東京学芸大学：東海大学短期大学部准教授

【2004 年度奨学生】

Ampong, Beryl Nyamekye アンボン、ベリル ニャメチェ：博士（薬理学）東京医科大学：Children's National Medical Center（在ワシントン D.C.）
 Chin, Angelina Yanyan チン、アンジェリーナ ヤンヤン：博士（ジェンダー研究）カリフォルニア大学サンタクルーズ校（お茶の水女子大学）：Pomona College 准教授（在カリフォルニア）
 Khomenko, Olga ホメンコ、オリガ：博士（地域文化研究）東京大学：（在キエフ）
 Lee Jea Woo 李 済宇：博士（地盤地震工学）早稲田大学：鹿島建設（株）技術研究所主任研究員
 Lee Sung Young 李 承英：博士（言語学）筑波大学：光云大学日本学科（在ソウル）
 Meng Zimin 孟 子敏：博士（言語学）筑波大学：松山大学人文学部教授（在松山）
 Mullagildin, Rishat ムラギルディン、リシャット：慶応義塾大学（環境デザイン）：RAUM Architects 社長（在露ウファ）
 Napoleon ナポレオン：博士（機械制御システム）東京工業大学：日産自動車（株）総合研究所
 Sonntag, Mira ゾンターク、ミラ：東京大学（宗教史学）：富坂キリスト教センター総主事
 Tsai Ying-hsin 蔡 英欣：博士（法学）東京大学：国立台湾大学法学部助理教授（在台北）
 Yang Myung Ok 梁 明玉：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科研究員
 Ye Sheng 叶 盛：博士（先端学際工学）東京大学：香港城市大学生物化学係研究員（在香港）

【2005 年度奨学生】

- Bao Lian Qun 包 聯群：博士（言語情報学）東京大学：東北大学東北アジア研究センター客員研究員（在仙台）
- Han Junqiao 韓 珺巧：博士（建築学）早稲田大学：国立ローレンス・バークレー研究所研究員（在カリフォルニア）
- Han Kyoung Ja 韓 京子：博士（日本文化研究）東京大学：徳成女子大学非常勤講師（在ソウル）
- Jiang Susu 江 蘇蘇：博士（物理情報工学）横浜国立大学：東芝セミコンダクター社
- Kim Bumsu 金 範洙：博士（社会系教育（歴史））東京学芸大学：東京学芸大学特任准教授、（韓国）国立公州大学校客員教授
- Kim Yeonkyeong 金 娟鏡：東京学芸大学（心理学）：帝京平成大学現代ライフ学部、近畿大学九州短期大学非常勤講師、YMCA 健康福祉専門学校講師
- Lan Hung Yueh 藍 弘岳：東京大学（地域文化研究）：国立交通大学通識教育中心助理教授（在台北）
- Tenegra Brenda Resurecion Tiu テネグラ ブレンダ レスレション ティウ：博士（人間発達科学）お茶の水女子大学：ノッティンガム大学アイデンティティ・シティズンシップ・移民センター（ICMiC）研究員（在英ノッティンガム）
- Vo Chi Cong ヴォー・チー・コン：東京工業大学（数理計算科学）：DaiTri Joint Stock Company CEO
- Wang Xueping 王 雪萍：博士（政策メディア）慶応義塾大学：関西学院大学言語教育研究センター常勤講師（在大阪）
- Wong Kin Foon 王 健歡：博士（統計科学）総合研究大学院大学：ハーバード大学医学部 MGH 病院研究員（在ボストン）
- Zhao Changxiang 趙 長祥：博士（商学）一橋大学：中国海洋大学法政学院（在青島）

【2006 年度奨学生】

- Chu Xuan Gao チュ・スワン・ザオ：東京外国語大学（文化人類学）：ベトナム社会科学院文化研究所研究員（在ハノイ）
- Hu Xiuying 胡 秀英：博士（看護教育学）千葉大学：四川大学華西看護学部華西病院准教授（在成都）
- Hyun Seungsoo 玄 承洙：博士（地域文化）東京大学：国会議員李相得政策特別補佐官（在ソウル）
- Li Chengri 李 成日：博士（政治学）慶応義塾大学：東西大学校国際学部国際関係学講師（在釜山）
- Liang Yun-hsien 梁 蘊嫻：東京大学（比較文化）
- Mohottala Shirmila モホッタラ・シャミラ：博士（情報理工学）東京大学：東京大学情報理工学研究科特別研究員
- Pantcheva Elena Latchezarova パンチェワ・エレナ：博士（日本研究）千葉大学：日永インターナショナル（株）
- Seo Kyoung Sook 徐 景淑：慶応義塾大学（美学美術史）：（在ソウル）
- Sim Choon Kiat シム・チュン キャット：博士（教育学）東京大学：東京大学教育学研究科研究員、日本学術振興会外国人特別研究員
- Sun Junyue 孫 軍悦：東京大学（言語情報科学）：明治大学政治経済学部非常勤講師
- Weerasinghe Nalin ウィーラシンハ・ナリン：博士（電子工学）電気通信大学：シュルンベルジェ（株）電子エンジニア
- Woo Seonghoon 禹 成勲：博士（建築学）東京大学：東京大学建築学研究科、学術振興会外国人特別研究員

【2007 年度奨学生】

- Chan Chai-fong 詹 彩鳳：東京大学（地域文化研究）：（在台北）
- Deng Fei 鄧 飛：博士（先端エネルギー学）東京大学：東京大学特別研究員
- Gangbagana ガンバガナ：博士（地域文化研究）東京外国語大学
- Kim Minsuk 金 玟淑：博士（建築学）早稲田大学：立命館大学歴史都市防災研究センター PD 研究員（在京都）
- Lee Eungyong 李 垠庚：東京大学（地域文化研究）：（在ソウル）
- Mijiti, Abuduxukuer メジテ、アブドシュクル：博士（外科学）東京医科大学：東京医科大学研究員
- Park Sohyun 朴 昭炫：博士（文化資源学）東京大学：漢陽大学校比較歴史文化研究所 HK 研究教授（在ソウル）
- Porrás Rojas Oscar ポラス・ロハス、オスカル：博士（応用環境システム学）東京海洋大学：コスタリカ大学太平洋岸校副学長（在コスタリカ、Puntarenas）

Quan Mingai 権 明愛：博士（社会福祉学）日本社会事業大学：清瀬市子どもの発達支援・交流センター
Wang Jian Hong 王 剣宏：博士（建設工学）早稲田大学：早稲田大学理工学術院創造理工学研究科助手
Yan Hainian 顔 海念：博士（国際保健学）東京大学：（株）中外製薬安全性データマネジメント部
Yaroslav Shulatov ヤロスラブ、シュラトフ：慶応義塾大学（政治学）

【2008 年度奨学生】

Feng Kai 馮 凱：東京大学（機械工学）
Hong Yunshin 洪 ユン伸：早稲田大学（国際関係学）
Kautzsch, Vroni Friederike カウチ、フローニ フリデリケ：博士（文化財保存学）東京芸術大学
Liu Jian 劉 健：北京大学（早稲田大学在学）（日本語学）
Lkhamsuren, Lkhagvasuren ハムスレン、ハグワスレン：早稲田大学（国際関係学）
Nemekhjargal ネメフジャールガル：博士（経済学）亜細亜大学：内モンゴル大学モンゴル学研究センター（在フフホト）
Phuong, Kimchhayarasy プアン、キムチャイヤラシー：博士（物性工学）宇都宮大学
Song Gang 宋 剛：博士（地域文化）桜美林大学：北京外国語大学日本語学部講師（在北京）
Vorno, Heli-Liis ヴェルノ、ヘリ リース：学習院大学（哲学）
Wang Wei 王 偉：博士（人工システム）千葉大学：千葉大学大学院自然科学研究科研究員
Xiu Zhen 修 震：東京工業大学（機械制御システム）
Yuk Jaehwa 陸 載和：武蔵野美術大学（造形芸術）：武蔵野美術大学非常勤講師
Zhang Jian 張 建：東京大学（教育学）

【2009 年度奨学生】

Choi Eunseok 崔 恩碩：国民大学（東京大学）（日本史学）
Darwisheh Housam ダルウィッシュ ホサム：東京外国語大学（地域文化研究）
Kaba Melek カバ・メレキ：筑波大学（文芸・言語）
Kim Youngsoon 金 英順：立教大学（日本文学）
Kwak Youngjoo 郭 榮珠：千葉大学（地球生命圏科学）
Kwon Nam-hee 権 南希：東京大学（国際法）
Rin Chin リンチン：東京外国語大学（地域文化研究）
Schicketanz Erik Christopher シッケタンツ, エリック：東京大学（宗教学宗教史学）
Shermatov Ulugbek シェルマトフ・ウルグベック：明治大学（民事法学）
Son Jounga 孫 貞阿：東京大学（森林科学）
Veldkamp Elmer フェルトカンブ, エルメル：東京大学（文化人類学）
Ye Kyaw thu イェ・チョウ・トゥ：早稲田大学（国際情報通信学）
Zhu Lin 朱 琳：東京大学（アジア政治思想史）

◇ 2010 年度渥美奨学生募集概要

渥美国際交流奨学財団は、関東地方の大学院博士課程に在籍する留学生を対象に、2010 年度渥美奨学生を下記の通り募集します。

（１）応募資格（奨学期間に下記のすべてに該当すること）

1. 日本以外の国籍を有し、関東地方の大学院博士課程に在籍し、当財団の奨学金支給期間に博士号を取得する見込みのある方。正規在籍年限を超えたために、或いは、他国の大学院より博士号を取得するために、研究員等として日本の大学院に在籍する方も含む。
2. 自分の所属する大学院研究科(研究室)および自分の居住地が、関東地方(東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・茨城県・栃木県・群馬県)にある方。
3. 国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流活動に積極的に参加する意思のある方。

（２）交流活動

1. 当財団は、毎月の例会で学業や生活について報告していただいた上で、奨学金を支給します。
2. 毎年数回奨学生や元奨学生と当財団の理事・評議員ならびに選考委員を招き親睦会を催します。年度末には当該年度奨学生の研究報告会を催します。
3. 毎年 7 月に 2 泊 3 日のリクリエーション旅行に招待します。
4. 海外学会派遣プログラム：渥美奨学生で博士号を取得した方には、海外で開催される学会等に一回参加するための旅費・宿泊費および参加費を支給します。ただし、海外にいる方は日本への旅費にあてることができます。

（３）奨学金の詳細

1. 奨学金は月額 20 万円です。2010 年度は 10 名採用します。
2. 奨学金の支給は 1 年間です。継続は認められません。

（４）応募方法

1. 奨学金希望者は、2009 年 7 月 1 日以後、各大学院の留学生担当課または当財団事務局まで、応募要項と申込書をご請求ください。また、同日以後、当財団ホームページ (<http://www.aisf.or.jp>) からダウンロードできます。
2. 2010 年度申込は、2009 年 9 月 1 日から 9 月 30 日まで、郵便にて受け付けます。

（５）選考の方法

事務局における書類審査と予備面接の後、選考委員による書類選考と面接により審査します。選考の結果は 12 月上旬に通知します。

2008年度の活動にご協力いただいた皆様
～ありがとうございました～

●一般寄付

団体

ケミカルグラウト(株)	中外製薬(株)	大和証券 SMBC (株)
イースト不動産(株)	(株)イリア	鹿島道路(株)
鹿島建設(株)	鹿島リース(株)	鹿島建物総合管理(株)
かたばみ興業(株)	東亜産業(株)	(株)八重洲ブッフェンター
横浜実業(株)		

個人

渥美 伊都子	谷原 正	八城 政基
--------	------	-------

●SGRA フォーラム指定寄付

団体

(財) 鹿島育英会	(財) アジア学生文化協会	(財) 鹿島平和研究所
鹿島建物総合管理 (株)	(財) 岡本国際奨学交流財団	プラス (株)
大興物産 (株)	(株) 虎屋	

個人

M. アブドシュクル	足立 憲彦	赤池 豊	明石 康	青木 生子	蟻川 芳子
浅野 千明	渥美 伊都子	曹 波	張 桂娥	福田 収一	ペマ・ギャルポ
原 嘉男	平館 幸治	平川 均	開 康寛	星埜 弘明	堀田 健介
胡 炳群	池崎 美代子	今西 淳子	井上 博允	石井 茂雄	石井 慶子
岩崎 統子	蔣 恵玲	金 政武	加美山 節	片岡 達治	河相 全次郎
木村 建一	岸本 啓子	小松 親次郎	栗原 俊記	黒住 真	李 恩民
李 鋼哲	林 少陽	前川 麻里	マイリーサ	松岡 誠司	孟 子敏
三澤 正勝	宮川 守久	宮澤 弘	水谷 弘	長岡 實	永山 治
中上 英俊	中島 隆	中村 順次	中曽根 弘文	中澤 忠義	南 基正
並木 隆史	野村 継男	小川 良雄	奥村 裕一	五十殿 侑弘	太田 厚生
太田 美行	大塚 寿	大内 聖子	O. ポラス	佐野 みどり	佐藤 直子
嶋津 忠廣	塩崎 恭久	Y. シュラトフ	孫 軍悦	鈴木 茂	鈴木 由美子
高橋 甫	高橋 司	竹内 忍	東城 清秀	外岡 豊	遠山 幸三
辻 悦子	角田 英一	都竹 武年雄	植田 兼司	上野 宏	上野 由美子
呉 弘敏	武 玉萍	修 震	許 雷	徐 向東	山田 俊作
A. ヤマグチ	顔 海念	梁 明玉	于 曉飛	臧 俐	朱 庭耀

●モンゴルシンポジウム特定寄付

(財) 守屋留学生交流協会	(財) 高澤三次郎奨学財団	三井住友銀行 (株)
鹿島建設 (株)		